



閻魔片へようこそ
古見蔵しか

1 臨終

「9月13日、午前0時21分——ご臨終です……」

その日、一つの命の炎がこの世から消えた。

——そしてその直後、彼は覚醒し静かに目を開いた。

そこは闇と静寂が支配する誰もいない総合病院のロビー。

闇を割るのは非常口の緑の弱い光。

静寂を割るのは中央に飾られる柱時計の微弱な秒針の音

カチ、カチ、カチ——胎動に似たその音はやけに大きく静まりかえった廊下に響き渡る。

そう、ここは深夜の総合病院——だけど、どうして俺はこの場所に？

自分の体調はとてもいい。今まで重かったはずの身体は妙に軽く、頭も今までになく冴え渡っている。そんな体調万全な俺が病院にかかるなど考えられない。

だとしたら——家族？

その瞬間、彼は思わず頭をひねった。なぜか何も思い出せなかったのだ。

自分に家族がいたのか以前に自分が誰であるのかさえもわからない。

頭の中が真っ白——というお馴染みの言い回しがあるが、今まさにそう言える状況で頭の中が混乱しきっていた。

落ち着け、落ち着け——！

彼は待合い椅子に腰を降ろすと頭を抱えて深く深呼吸した。

混乱しても何も始まらない。ここは病院だ。記憶喪失だって治せる医者だっているはずだ——

その時だった。

こつん、こつん……

しんと静まりかえっていたロビーに人の足音が異質に響き渡る

彼はそちらを振り返ると一人の女性がゆっくりと歩いてくる。

年はそれほど若くなく、四〇歳くらいだろうか。地味なワンピースを着、化粧気もあまりない。それどころか彼女の目は真っ赤に腫れ上がり、頬には涙の筋がくっきりと浮かぶ。

女の姿を瞬間、彼の頭の中に雷撃が走った。

^{いよ}
「伊世！」

彼はその場に立ち上がると彼女に向かい手を挙げて叫んだ。

——知らないはずがない。彼女の名前は相楽伊世。彼の妻だった。

だが、どう見ても様子はおかしい。

夢遊病者のようにおぼつかない足に悲しみに暮れた痛々しい顔。

そして、夫の彼さえ眼中に入っていないかのように伊世は彼の横を素通りし更に奥へと進んでいく。

彼は呆然とした顔で彼女を振り返るとその先にあったのはロビーの片隅にある公衆電話コーナーであった。

伊世はふらつく身体を公衆電話にもたれさせ手を震わせながらテレホンカードを入れるとどこかへ電話をかけ始めた。

そして、伊世は彼に驚くべき現実を間接的に告げた——

「もしもし……アヤ？ 夜分遅くごめんね……」

伊世は掠れそうな小さな声で言った。

「心配かけてごめんね——うん、終わったわ……彼、何かから開放されたようにいい顔して亡くなったわ——」

そう言うと伊世は声を出して再び泣き始めた。

凍り付くような静寂を突き抜けるように響く彼女の嗚咽。

彼はそんな彼女の姿を焼き付けるように目を日開いてじっと見つめるのみであった。

「大丈夫——心配しないで……私は大丈夫だから！」

彼女は上ずった声で大丈夫と連呼した。

「彼にとってはこれからって言うときに無念かもしれない。でも……これも運命で——認めないとダメなのよ——」

そう言うと伊世はその場に崩れむせび泣きながら言葉を続けた。

「——ごめん……今——うまく表現できないけど……とにかく電話切るね——今は一人で頭の中、整理したい——から」

伊世は力なくそう言うと公衆電話の受話器を置いた。

ピピー、ピピー、ピピー……

公衆電話からの電子音が響いたときには彼女は堰を切ったように号泣した。

静寂しきった廊下に彼女の痛々しい声が悲しく反響し、深い眠りについていていた病院が一気に哀しみの表情へと変わる。

彼はそんな伊世を見ていられないように目をそらした

——間違いない……伊代はある人が死んだことで悲しみに暮れている。それは他でもない俺自身だろう。

でも……だとしたら、今の俺は何者だ？

そう思った瞬間、彼は思わず眉をひそめた。

もし自分が死んでいるとしたら、今の自分はどう考えてもおかしな存在だった。

生前のように変わらず元気な身体。はっきりとした意識。

俺は生きているのか、死んでいるのか……それとも幽霊みたいな中途半端な存在になったのか——

それさえも自覚していない自分に彼は激しい戸惑いを覚え、居ても立ってもいられずその場から去ろうとした——その時だった。

さがらみねお
「相楽峰雄さんだね」

その若い男の声に彼はドキッとしてそちらを振り向いた。

そこに立っていたのは全身黒づくめの服を着た一人の少年。

しかし、彼はその姿を見て恐怖で思わず息を呑んだ。

白に近い銀髪。深紅の眼。そして、彼の額には小さな角が二本生えていたのだ。

「ひっ……」

顔はそれほど恐ろしくない——むしろどこでもいるような愛嬌のある少年だ。

だがその風貌は少年が人とは似て非なる存在。おそらく昔話で出てくる鬼であるのはまちがいなかった。

その瞬間、彼は少年から走って逃げだそうとしていた。

「待てよ」

少年がそう言った瞬間、彼は言うとおりにピタッと金縛りにあうように止まってしまった

身体が言うことを聞かない——それどころか逆に少年の言うことを忠実に聞くように自らの身体はゆっくりと少年をむき直した。

「俺こんな風貌してるけど、別にあんたのことを取って喰う気なんてないから安心しなよ」

少年はそう言うと人なつっこそうな笑みを浮かべた。しかし、その口元には時折鋭い牙がギラギラと光っている。

「君は……」

彼は息を呑みながら恐る恐る少年に話しかけた。

「人間——じゃないよね」

「当たり前じゃん」

少年はあっさりと肯定した。

「あんただって薄々気付いてるんだろ。俺があんたたちの世界で言う鬼だってことにさ」

少年のその指摘に彼は唾をもう一呑みした。

額に生えた角。尖った耳。そして、口元に光る鋭い牙——

そんな異形の者が見えるようになった今、彼はその事実を受け止めざるをえなくなってしまうていた。

「——なあ」

彼はふと少年の鬼に聞いた。

「本当に俺は死んだのか？」

「——はあ？」

少年の鬼は怪訝な顔で彼を睨んだ。

「あんたさ、もしかして死んだときのこと覚えてないの？」

少年の鬼のその一言に彼は深く頷いた。

「ああ……そうなんだ」

その一言に少年の鬼の顔が一気に曇った。厄介な奴に当たったな——明らかにそう言いたげな顔だった。

「なあ、俺は本当に死んでしまったのか——」

「ああ、あんたは間違いなく死んでいるよ」

彼の言葉を遮るように言い切った鬼の顔は幾分か不機嫌そうに見えた。

「いいか、あんたには俺が見えてるんだ。これがどういう事か解ってんのか？ ええ？」

「いや……」

「——ったく、これだから最近の人間は……」

そう言うと少年の鬼は拳を額にあて呆れたようにため息をついた。

「俺はね、死人を冥界に連れて逝く——いわゆる『お迎え』だよ。つまり、俺みたいな鬼が見えるって事はもうこの世にはいない死人ってわけ！」

死人を冥界に連れて逝く——

少年の鬼が言ったその言葉に今までぼんやりとした死に対するの現実感がやっとはっきりと目に浮かんだような気がした。

それと同時に彼の心の中にはい出したのはこれからへの恐怖心。死んだ後に死が怖くなるなんてもう笑うしかできない。

「どう、やっと思感湧いた？」

ニッと憎めない笑みを浮かべて少年の鬼が効いたその一言に、彼は小さく頷くしかなかった。

「まあ、死んだときの記憶がないって言うのはよくあることだからあんまり気にしない方がいいよ」

そう言うと少年の鬼はふっと彼から背を向けると一言言った。

「——じゃあ、そろそろ逝こうか」

「逝くって……あの世？」

「そうだよ」

少年の鬼はそう言うと鋭い牙を見せて笑った。

「この世とは完璧にお別れになるんだ。やり残したことなんて——ないよね？」

そう言われて彼は公衆電話でしくしくと泣く伊世の姿を見た。

伊世を見る彼の顔は苦渋に満ちていた。

「お別れしたいんなら今だよ」

「え…」

彼の気持ちを代弁するような少年の鬼の言葉に、彼は顔を上げた。

「はっきり言って彼女とは^{とわ}永久の別れになるよ」

「でも——彼女には俺が見えないんじゃないか……」

「やってみれば解るよ」

そう言われて彼は再び伊世を見つめた。

自分が死んだことも自分が誰かさえも解らない彼に唯一残った妻伊代との記憶。それは何よりも鮮明で何よりも濃厚だった。

あの世に持っていくのは伊世との記憶だけでいい——もしかしたら死ぬ間際に俺の頭はそう判断したのかもしれない。

そう思った時には彼の足は自然に彼女へと向かい、そして彼女の崩れた身体を拾い上げるように優しく抱きしめた。

「ありがとう、伊世……そして、さよなら——」

その瞬間、伊世はハッと顔を上げ後ろを振り向いた。

しかし、そこには誰もいない。

ただ眠るような静けさを漂わせる病院のロビーが広がるだけだった。

伊世はふと身体を愛おしむように触った。その瞬間、彼女の身体は彼のぬくもりを感じた。

だけどそれは一瞬で彼は流れる煙のように闇へと消えていった。

伊世は小皺の目立つ眼からまた涙を一筋流した。

——もう、あの人は、いない……

旅立つ彼の最後のプレゼントである温かさを噛みしめながら伊世はまた悲しみに暮れるしかなかった。

2 マンホールの底

草木も眠るような深夜であるはずなのに摩天楼の灯は自分を見下すように煌々と灯ってる。

不夜城、東京——

誰かの墓標のように立ち並ぶ摩天楼を目に焼き付けながら相楽峰雄は少年の鬼の後をついていった。

——彼はどこへ向かうつもりだろう……

軽やかに進む少年の鬼の後ろ姿を見ながら峰雄はふとそう思った。

逝き場所はその世だと言うことは解ってはいるものの、先ほどから目に入る風景は現世である夜の東京の姿だった。

到底、この風景の中ですぐにあの世に逝けるとは思えないし、むしろどこに向かっているのかさえよく解らないのが本音だった。

「そう言えば——」

ふと少年の鬼は足を止めて、峰雄を見た。

「俺、まだ自己紹介がまだだったよね」

そう言うと少年の鬼は黒いコートの内ポケットから一枚の名刺を出し峰雄に渡した。

峰雄は鬼である彼の名刺交換に戸惑いを隠せなかったが、訝しげにその名刺を眺めた。

【閻魔庁生前特捜部三課 冥界送致官 涼炎鬼】

「閻魔庁……」

——何だかお役所みたいな名前だな……

堅苦しい名刺を眺めて峰雄はふとそう思った。

「あ…名前を呼ぶんなら涼にしてくれないかな……本名は堅苦しくて好きじゃないんだ」

そう言うと少年の鬼こと涼は照れくさそうに笑みを浮かべ、まだどこも知れない未知の場所へと歩き始めた。

「ねえ、涼……君？」

「何？」

涼は足を止めずに返事した。

「俺はあの世に連れて逝かれるんだよね」

「そうだけど？」

「でも、さっきからどう見ても東京の街をうろうろしている感じがするんだけど——」

「——そのうち解るよ」

涼は一言そう言うとまた夜の街へと足を速めた。

しばらく歩いていくと眩く輝いていた街の灯りが徐々に弱くなり霧のような闇が辺りを包み込む大きな公園へと入っていた。

闇を裂くのはカチカチと点滅を繰り返す切れかけの街灯。

その微弱な光が照らすのは公園にちらほらと散らばる段ボールハウス。

おそらくここはホームレスの領域なのだろう。

だが恐ろしく濃度の濃い闇と凍り付くような静寂は、寝静まる人の気配さえかき消してしまっていた。

少年の鬼涼はそんな夜闇の公園を早足で突っ切っていく、そしてある場所でぴたっと足を止めた。

それは公園の一脚のベンチ。

そこにはぼろをまとったホームレスがだらしなく眠っていた

「——ったく、また寝てるよ……」

涼はそのホームレスを見てぶつぶつと文句を言いながら彼に近付いた。

そして次の瞬間、峰雄は涼の行動に目を疑った。

「おい、オッサン！」

何を思ったことか涼はぐっすりと眠るホームレスの頬をペチペチと叩きだした。

「そこで寝てないで早く『門』を開けろよ。俺、これから仕事なんだからさ！」

「おい……」

それを見て峰雄は不安げな表情を浮かべた。

「こんなホームレスを起こしてどうするんだ？」

「だから見てたら解るって」

涼は冷たくそう突き放すと再び頑固に眠るホームレスを乱暴に起こし始めた。

「なあ、起きてくれないかな。俺、時間通りにこのオッサンを護送しないとまた篁に怒られるんだけど……」

「うう……ああ？」

ホームレスは寝言のようにそう唸ると、ごろっと寝返りを打ち涼の顔を見た。

峰雄はその顔を見てまた息を呑んだ。壮年のホームレスの額にもまた角が生えていたのだ。

「何だ……篁のところの使いっ走りか……」

「うわー！ その言い方すっげえムカツク」

そう言うと涼は不機嫌そうに口を尖らせた。

「——ったく……こんな夜中に何の用だ」

ホームレスの鬼はそう言うとむくっと起きあがりぼりぼりと白い頭を掻いた。

「見て解らない？ このオッサンの護送だよ」

「それくらい解ってる」

「本当に？ 何だか寝ぼけてるようにしか見えないんだけど」

そう言うと涼は先ほどのお返しと言わんばかりにホームレスの鬼を挑発した。

「大体あんたはいつも職務怠慢だよ。仕事のない時はベンチで爆睡してるなんてそれでよく『地獄の門』の番人って言えるよなあ」

「うるさい若造だな……」

ホームレスの鬼はそう言うと陰湿な眼でじろりと涼を睨んだ。

「俺の仕事は『門』を管理すること。ちゃんと仕事をしておけば後の時間は寝てようが遊んでようが関係ないんだよ」

「本当に楽な仕事選んだもんだな」

そう言うと涼は皮肉な笑みを浮かべた。

「まっ、とにかく数少ない仕事をちゃんとしてくれないかな」

「はいはい——ったく、上司に似て部下も口が悪いな……」

そうぶつぶつと文句を言うとホームレスの鬼はベンチから重い腰を上げてある方向にのそのそと歩いていく。

それはベンチの目の前、存在さえ忘れてしまうようなマンホール。

しかし、その蓋の柄はお馴染みの銀杏の葉ではなく炎をかたどった少々おどろおどろしいデザ

インだった。

そして、ホームレスの鬼はあろうことかその重そうなマンホールの蓋を素手で軽々と持ち上げ横にどかした。

そんな思いがけないホームレスの鬼の行動に峰雄は口をあんぐりと開けて見ているしかできなかった。

「ほら、これでいいだろう」

ホームレスの鬼は手に付いた埃をパンパンと払いながら涼を見た。

「しかし、本当に楽な仕事だよなあ……」

涼は羨ましいような目つきでホームレスの鬼を見ていった。

「俺も今度、地獄門管理課に異動届出しちゃおうかな」

「エリート街道まっしぐらの生前特捜部の若造が何を言うんだか……」

ホームレスの鬼はそう鼻で笑うと、再びベンチに戻り横になった。

「ま、後はがんばりな」

そう言うとホームレスの鬼は目を閉じまた眠りについた

「さて……と」

涼はそう言うと深い穴と化したマンホールへと歩いていき、そして呆然とそれを見ていた峰雄に向かって手招きした。

——正直、どう反応したらいいのか解らなかった。

しかし、峰雄の困惑をよそに涼の手招きにつられるように彼の足はマンホールへとゆっくりと近付いていった。

穴がむき出しになったマンホール。

黒い闇の濃霧で底が見えないくらいその穴は深くどこまでも続いていた。

「もしかして——」

峰雄は不安と困惑を隠さず涼に聞いた。

「このマンホールの下があの子への扉？」

「そうだよ」

涼はにっこりと笑いながら言った。

「この穴の下は完璧にあの子だよ」

そう言うと涼はいきなりその穴の中へとためらうことなく飛び降りた。

吸い込まれるように穴へと消えた涼の身体。峰雄はその様子を見て焦ったように穴を覗き込んだ。

底さえ見えない闇の穴。

しかし、次の瞬間耳の疑う声が響いた。

「ほら、オッサンもこっち来いよ」

マンホールの中から反響して聞こえる声。それは間違いなく幼さを残す涼の声だった。

「こっちに来るって……」

峰雄は焦ったようにもう一度穴を覗き込んだ。

涼の声は比較的はっきりと聞き取れるのだが、それでも見た目はものすごく深く感じる穴。

確かに鬼ならば落ちても平気かもしれないけど——俺は一応人間だ。

「大丈夫だって！ あんたはもう死んでるから何も傷つかないよ」

彼はそう言うがその深さを考えると、巨大なあの恐怖感が峰雄を包んだ。

死の後の死への恐怖。死は怖くないのにこのマンホールの下が怖くて仕方がなかったのだ。

「無理だ…」

峰雄は蚊が飛ぶような声で一言言った。

「何で？」

「とにかく怖いんだ！」

そう言うと峰雄は穴から目を反らした。

「この穴はそんなに深くないよ」

「そうじゃなくて……」

一体このマンホールの先で何が待っているのだろう。

それを考えると悲観的にならざるをえない自分がいたのだ。

「いいから、早くしろよ！」

穴の向こうの涼は苛ついた口調でそう急かした。

それでも峰雄はその穴に墮ちることをためらっていた。

「まったく、世話が焼けるな……」

彼はそう一言そう言った瞬間、峰雄の身体はふわっと宙を浮かんだ。

浮いていると言うより見えない何かに持ち上げられているようだった。

しばらく宙を浮いた後、急に胸ぐらを乱暴に掴まれ一気に彼の身体は強引に穴の中へと引き込まれた。

ただ、彼の激しい叫び声を残し穴は峰雄の身体を呑み込んだ。

そして、見計らったように炎をかたどったマンホールの蓋がごりごりっと動きだし、また元通り穴を塞いでいった。

3 賽の河原

闇に響き渡る激しい絶叫。

そして、身を切るようなスピード感。まるで自らが彗星になったかのように闇の中を突っ切るように堕ちていく。

おそらくそれは一瞬——なのだろうが、その一瞬が峰雄には特別長く感じられた。

風は身を切り裂き耳の奥でうなる。

そして、深い深い穴に堕ちていくという恐怖感が瞬く間にフルに働くのがわかった。

深い闇の超音速の旅が終わりに差し掛かった頃、視界が一気に開けた。

射抜くような光。それを感じた瞬間、峰雄は地べたに激しく激突した。

痛——くない……

生身の肉体なら足の骨一本や二本折っていてもおかしくない衝撃なのに、峰雄はけろっとした表情でしっかりとごつごつとした石の上に立ち上がった。

ここは——？

峰雄は呆然とした表情で周りの景色を眺めた

ひんやりとした空気。辺りを包み込む朝靄。墓標のように積み上げられた白い石。

そこは静寂のみが支配する白色に支配された河原だった。

そして、眼下には海のように蕩々と流れる広い大河——

——これが、三途の川……

それを見た瞬間、峰雄はついに現世から離れたことを思い知った。

マンホールから堕ちた先は三途の川の川縁——つまり、正真正銘あの世に来てしまったのだ

「ようこそ。死後の世界へ」

その声に峰雄はハッと振り向いた。

そこには一足早くあの世に着いていた涼がにやにやと牙を見せながら笑っていた。

「あの穴、墮ちてみたらそんなに大したことなかつたろ」

そんな彼の憎めない笑顔を見て峰雄は無性に腹立たしい気分になった。

峰雄は訝しげに彼の顔を睨み付け一言口出しした。

「君は……俺を無理矢理穴に墮としたな」

「人間き悪いな。これは正当な職務執行だよ」

そう言うと涼は白い指をくいと動かした。

すると指の動きに忠実に従うように峰雄の身体は意志に反して彼の元に引っ張り出されたのだ。

「俺は亡者なら誰でも自在に操れる。それだけは覚えときな」

無邪気ながらも高圧的な側面を見せる涼の笑みを見て、峰雄は初めて彼が怖いと思った。

よく考えてみると彼は俺をあの世に連れて逝く鬼——

彼は『あの世』とぼかした表現をするけど、もしかしたらそれは『地獄』と言った方が似合っているのではないか？

——そう言えば……

峰雄はふと先ほど涼からもらった名刺を取り出した。

その名刺の一番最初に記された『閻魔庁』。名刺をもらった時は何一つ考えなかったけど、閻魔って名前が付くって事はかの有名な閻魔大王に関係があるに違いない。

つまり、俺は閻魔大王に裁かれて地獄に墮ちる——

そう言う宿命をたどると思うと峰雄の目の前は一気に真っ暗になったその時、三途の川に到底似合わない電子音が静寂を切り裂くように響く。

あろう事かそれは現世で飽きるほど聞いてきた携帯電話の着信音だった。

「電話か……」

その音に反応するように涼はポケットの中から黒い携帯電話を取り出し当たり前のように電話に対応した。

「はい、もしもし」

『涼か？』

「なんだ、あんたか」

涼はその凜とした声を聞くと小さな笑みを浮かべた。

『今、どこにいるんだ？』

「え……賽の河原だけど？」

『じゃあ、もうそろそろだな』

そう言うのと電話の向こうの声は意味深なため息を漏らした。

「あれ？ まだ何か言いたげだな」

『ん……？ ああ……』

電話の向こうの声はそう言うのとゆっくりと喋りだした

『お前が護送しているその男——相楽峰雄の事なんだけどな』

「うん……」

『いろいろ資料に目を通したんだけど、どうやらかなり問題有りの人物らしい』

「問題有り？」

『ああ、資料だけ見れば厳しい審判を下されても仕方がない行いをしてきた男だよ』

「へえ……このオッサンが……」

そう言うと涼はちらっと隣にいる峰雄を見た。

「——俺にはそんな風には見えないけどなあ」

『それでだな、涼』

電話の向こうの声は低く鋭い声で涼に訊いた。

『お前、彼を見ていておかしいと思ったところなかったか？』

「おかしいところねえ……」

そう言うと涼は天を仰いだ。

「——そう言えばこのオッサン、死んだときの記憶がないみたいなんだ」

『ほう』

「びっくりしちゃったよ。開口一番俺は死んだのかなんて訊かれるんだもん——あれほどとぼけた亡者は久しく見たことがなかったね」

『——とぼけてる……か』

電話の向こうの声は思案をめぐらすように一言呟いた。

『まあいい。とにかくお前は彼の監視を続けろ』

「わかった——」

「わああああああっ！！」

涼がそう答えた瞬間、静まりかえっていた河原に峰雄の悲鳴が轟いたが、涼は焦ることなく平然と電話の向こうの相手に伝えた。

「ごめん、奪衣婆が来たみたいだから——電話切るね」

そう言い残し涼は電話を切るとやっと峰雄の方を見た。

峰雄は何者かに背後から強く肩を掴まれ今にも泣きそうな顔をしてただ恐怖に怯えていた。

「おぬし！ 亡者じゃな！」

しわがれた声が河原に響き渡った。

後ろから峰雄の肩を掴む手は年輪を重ねたしわしわの老人の手。

しかし、指にはエメラルドやサファイアの指輪をはめてさらには真っ赤なマニキュアまで付けてかなり派手な印象だった。

「ばあさん……」

涼は峰雄を襲う背後の人物をみて思わず笑みを浮かべた。

「今日の衣装——すごいな」

「そうか？ 似合っとるかのう？」

涼の一言に、峰雄の肩を掴むしわしわの手の力がゆるんだ。その隙に峰雄はその手を振り払うと相手を睨み付けるが次の瞬間、峰雄は自分の目を疑った。

そこに立っているのは真っ白な白髪を振り乱した文字通りの鬼婆——

しかし、その衣装は何故かブランドものと思われるピンクのツーピーススーツ。

顔と服の不釣り合いはあまりにも滑稽でおかしいを通り越して、なにか未恐ろしい者を見てしまった気分だった。

「もしかして、それってまたふんだくった衣装なの」

「そうじゃ。この前交通事故死した占い師から奪ったシャネルのスーツじゃ」

そう言うと奪衣婆とよばれた鬼婆は得意げにセクシーポーズを取った。

それを見て峰雄は美しいのか怖いのかそれとも気持ち悪いのかよく解らない不思議な気分になった。

「なんだかの、このスーツは一点ものらしくてのう……その占い師の女はかなり頑固に抵抗したがの、結局は儂に屈服したんじゃよ」

「そりゃ、ばあさんには勝てないからなあ」

そう言うと涼は同情的に笑った。

「それは、そうしてな」

奪衣婆はそう言うと今にも襲いかかりそうな目つきで峰雄を睨んだ。

「この亡者はおぬしが連れてきたのか？」

「そうだよ」

「ほう……」

そう言うと奪衣婆のしわくちゃの口元にギラリとした鋭い牙が光った。

それを見た瞬間、峰雄は恐怖に身を凍らせごとくと息を呑んだ。

「なあ、このババア——否、淑女は何するつもりなんだ」

峰雄は恐怖のあまり隣にいた涼に縋り付いた。

「何って……服を奪うんだよ」

「——え？」

もっと詳しく聞こうとしたその瞬間、峰雄は奪衣婆の激しいタックルを食らった。

見た目の年齢に似合わずパワフルな彼女に峰雄の身体はいとも簡単に押し倒されたのだ。

「ラコステのグレーのワイシャツに、ユニクロで買った綿パン、それに腕時計はイミテーション——はっきり言って最悪のオヤジファッションじゃのう」

シャネルのオートクチュールスーツを着た鬼婆は倒れた峰雄の身体に馬乗りになり口元に恍惚の笑みを浮かべた。

「はっきり言って俺はあまり男物には興味はないんじゃないがのう、これも仕事じゃ。我慢せい——！」

「ちょっと……待って！ 待ってたら——！！」

峰雄の悲鳴に似た叫び声は三途の川に響き渡った。

「お気の毒に……」

その狂気の光景を遠巻きに見ながら涼は人ごとのように呟いた。

再び三途の川に静けさが戻ったときには、あの恐ろしい奪衣婆は満足げに峰雄が着ていた服から下着まで抱えて霧の中へと消えていった。

「しかし、ばあさんはいつも強引だよなあ……」

濃い霧の中へと姿を消していく奪衣婆を見送りながら涼はふとそう漏らした。

その横には丸裸で体を震わせ蹲る峰雄の姿。その眼には怯えきった涙が浮かんでいた。

「——犯されるかと思った……」

追いはぎ同然に身ぐるみさっぱり剥がされた峰雄は涙声で一言呟いた。

「馬鹿言うなよ。あれがばあさんの仕事だ」

「仕事——！？」

峰雄は驚きの表情を浮かべて涼を見た。

「追いはぎがあのババアの仕事だって言いたいのか！」

「そうだよ」

涼はあっけらかんとそれを認めた。

「あれ？ 言ってなかったっけ？ 三途の川の対岸は現世の持ち物は持ち込み禁止だって？」

「え——？」

そんなこと聞いてないよ——峰雄はそう言いたげな顔をした。

「これは閻魔庁の内規に決められてるんだよ。亡者は現世の空気で汚された物を冥界に持ち込んではいけない。必ず川を渡る際、奪衣婆に持ち物を全て預けること——ってね」

涼のその説明に峰雄は渋々納得したように唸り声を上げて一言呟いた。

「だから、あのばあさんが強制的に服を奪うんだ…」

「そう言うこと」

「——でも、追いはぎはナシだ……」

その峰雄の思わず出た本音に涼は冷ややかな笑みを浮かべた。

「あんたはあの世の事なんて全然解ってないね」

「え？」

「一言言うけど、あんたはお客としてこちらに来ている訳じゃない。それだけは頭に入れておいて欲しいな」

突き放すような涼の冷たい言葉に、峰雄は再び自分の置かれた立場を知らしめられた
——そう、ここはあの世なのだ。これから俺は罪人として裁かれ、それからは……どうなるのかは解らない。

そう思うと、峰雄の中で漠然としたこれからへの不安が増大していった。

「でも、安心しなよ」

そう言うとき涼は峰雄の緊張をほぐすように笑った。

「あんたが思っているほど地獄での審判は確かに甘くはないけど、死ぬほど怖いってほどでもない。特にウチの課は上司の方針で他の課のようなえげつない追求をしないんだ」

そう言うとき涼はふと霧に霞む三途の川に目を向けた。

耳を澄ませば、朝靄の奥からギィギィと何かがきしむような音が聞こえる

「——そろそろ、お迎えが来たようだね」

涼はそう言うとき三途の川に向かい指笛をピィッと鳴らした。

高い音が響き渡った瞬間、朝靄の水面に一艘の渡し舟のシルエットが浮かんだ。

峰雄は徐々にはっきりと映る舟を見て思わず目を見張った。舟には船頭の姿はなく完璧な無人だったのだ。

しかし、舟自体が意志を持っているように自動で舵を動かし霧の中をゆっくり進んでいるのだ。

そして、賽の河原の岸边にたどり着くとその動きを止めたのだ

「ほら、乗りなよ」

涼は真っ裸の峰雄に向かいゆっくりと手招きした。

峰雄はその手に操られるように自然と舟へと近づきおっかなびっくりと乗り込んだ。

それに続き、涼も舟に乗り込むと舟は静かに岸辺から去っていく——はずだと思っていた。

しかし、先ほどまで自動で動いていた舟は峰雄が乗り込んだとたん、何の変哲もない舟に変化していたのだ。

「あれ……？」

峰雄は不思議そうな顔をして舟を見回した。

「動かないぞ？」

「当たり前じゃん」

涼は偉そうに座りながら言った。

「動かす人がいないと動かないに決まってるじゃん」

「でも、さっきは自動操縦だった——」

「馬鹿だねえ、またさっき言ったこと忘れたの？」

そう言うと涼は冷ややかな笑みを浮かべた。

「あんたはお客じゃなくて被告人。冥界に入った瞬間、罪の償いは始まっているんだよ」

涼のその言葉に峰雄は思わず言葉を失った。

そして、その一言だけで自分が何をすべきか直球で言われたような気分になった。

「——俺が……漕ぐのか？」

探るような峰雄の言葉に涼はにっこりと笑った。

「そう言うこと」

4 閻魔庁

まるで鏡のように静かな水面を一艘の渡り船が滑るように進んでいく。

全裸の船頭峰雄はただこの広い三途の川を対岸めざし渡り船を必死に漕いでいた。

いくら肉体が滅び全ての感覚が麻痺しているとはいえ、このひんやりとした朝霧と冷たそうな川の水を見ていると、その中を素っ裸で過ごすのは幾分かつらいものがあった。

ギィギィと舵を漕ぎながら峰雄はふと殿様気分で座っている涼を横目でちらりと見た。

何かの罰ゲームかのように裸で舟を操る峰雄をよそに、護送役人の鬼は人ごとのようにぐっすりと眠っている。

——のんきなもんだよなあ……

すうすうと寝息を立てながら眠る彼のあどけない寝顔を見て、峰雄は小さな苛立ちを憶えた。

そりゃ、わがままを言える立場ではない言うことは十分解っている。

だが、それでも納得できない事はたくさんある。

このまま裸のまま事が進んでいく事に狂おしいほどの恥ずかしさを感じるし、第一償いという理由でこの仕打ちを受けなくてはならない事が今ひとつ説明不足なのは否めない。

今すぐ涼をたたき起こして文句を言いたい気持ちはやまやまだ。

でも、時折窺わせる彼の鬼としての本性を見ているとやはり声をかけることに怖じ気づいてしまう自分がいた。

角がある以外はそこら辺の若者と変わらないのになあ……

峰雄はそんな自分に呆れたかのように深いため息をつきまた前を見て舵をこぎ始めた海のように広く感じる三途の川。

そのうち霧の向こうに要塞のような黒い影が朝霧をゆっくりと切り裂いていった。

そして、それが三途の川の対岸に根付く馬鹿でかい大樹であることがはっきり見えてきた。

——なるほど、あれを目印に舟を進ませればいいんだな。

際だって目立つ大樹を見ながら峰雄はゆっくりと舟を進ませていく。

徐々に対岸に近付き朝霧がうっすらと晴れ始めると、目指す大樹自体が尋常ではない大きさであることを峰雄は知った。

なにもない荒れ地に急に生えた太くて大きな大樹——大きさはちょっとした高層ビルくらいはあるだろうか。

そこから枝分かれした長い二本の枝は目の前で仁王立ちしているような腕のように長く伸びており、さすが地獄の入り口のランドマークタワーと言うべきか、そびえ立つおどろおどろしい魔界樹に峰雄は思わず息を呑んだ。

「そろそろ着いたかなあ」

舟を岸に着くのとタイミングを同じくして涼は大あくびをしながら目覚めた。

そんな彼を峰雄はむっとした様子で睨み付けた。

「何？ その不満そうな顔は」

「別に……」

そう言うと峰雄はもう一つ深いため息をつき舟を下りて対岸に足を踏み入れた。

目の前に立ちはだかるようにそびえ立つ魔界樹。

だが、その向こうの景色は荒涼と荒れ果てた大地が延々と続き、遠くにたれ込んだ雲からは断続的に稲光が走っていた。

おそらくこの大地の向こうに『閻魔庁』なるものがあるのだろうが、ざっと見ただけでは何処にあるか見当たらない。

——もしかして、閻魔庁に付くまでずっと裸なのか？

一瞬そのことで思わず気が滅入りそうになった峰雄をよそに、涼はゆっくりと巨大な魔界樹に近付いていき、何かを探るように極太の魔界樹の幹に手を当てた。

——何をするつもりだろう？

峰雄は涼の行動を不思議に思い魔界樹に近づき彼の行動を訝しげに覗き込んだ。

人々が苦しむような顔をした魔界樹の節々。間近で見ると具象彫刻のようにリアルで気持ち悪い。

そんな節の一つ、口を開けて叫んでいる顔の節を涼はなぜかしきりに触っていた。

——え……

峰雄は涼の手元を覗き込んだ瞬間、言葉を失った。

節が口を開けた中にはテンキーしきボタンが配列されており、涼はそれをカタカタと鳴らし慣れた手つきでパスワードを打ち込んでいたのだ。

そして、彼の手がエンターキーを押した瞬間、そびえ立つ魔界樹の様子が急変した。

怒りを露わにするかのような地鳴りのような唸り声を上げた瞬間、魔界樹は大きな口をゆっくりと開けてみせた。

峰雄はあんぐりと開かれた魔界樹の口を見て目を疑った。

その口の奥には闇に包まれた下り階段が延々と続いていたのだ。

「この樹は……入り口なのか？」

峰雄は呆然とその階段を見ながら涼に聞いた。

「そうだよ」

涼はカンテラに火を付けながら笑った

「間違いなくこの先が地獄だよ」

そう言うとき涼はカンテラの灯を持ち迷わず魔界樹の階段へと降りていき、また峰雄に向かいゆっくりと手招きした。

延々と続く下り階段。

もうどれくらい降りただろうか……

随分長い間、この階段をただひたすら下り続けているような機がする。

相変わらず峰雄は真っ裸のまま。

感覚のないはずの裸足に階段の冷たさが伝わり身体も心も芯から冷えていた。

——この階段の先は地獄……

先ほどの涼の言葉が峰雄の頭の中で繰り返される。

本当ならそこから逃げ出したい。

しかし、ふと振り返ると降りてきたはずの階段は闇の中に消え失せたようになってしまっていた。

「戻ろうって言ったって無駄だよ」

涼は峰雄の方を振り返らずに冷たく言い放った。

「あんたが足を進めるたびに今まで歩いたはずの階段は跡形もなく消えていくんだ——もし後戻りしたら真っ逆さまに墮ちちゃうよ」

「墮ちたらどうなるんだ？」

「そりゃ……」

その瞬間、カンテラに照らされた涼の顔が邪悪に笑った。

「自分でも解るでしょ」

「え？」

「有無も言わさず最もつらい地獄の地の底まで墮ちるってことくらい解ると思うけど？」

その言葉を聞いて、峰雄は思わず息を呑み怖じ気づいたように目の前の闇から一步引いた。

「まあ、希望を捨てるのなら引き返してもいいけど……それはいやだろ」

涼はそう言うともたコツンコツンと階段を下っていく。

——どちらにしる地獄に墮ちるのは変わらないじゃないか……

峰雄は恨めしく後ろの闇をしばらく見つめたが、諦めたように深いため息をつき渋々カンテラの明かりの方に付いていった。

「なあ……」

峰雄は早足で涼に追いつくと今まで持っていた疑問を訊いた。

「俺はいつまで裸でいなきゃいけないの？」

「そのうち解るよ」

「——じゃあ、この階段はいつまで続く……」

「それも、そのうち解るよ」

そのうち解る——涼は口癖のようにそう突き放した。

そう言われてしまうと峰雄はそれ以上の追求が出来ず再び黙る他なかったのだ。

そのまま峰雄は黙ったままただ階段をただひたすら降っていった。

もうどのくらい降りたのかさえも解らなくなった頃、その先にほんのりとともる光が峰雄の目

を捉えた。

ずっと闇の中を歩いていたからだろうか——峰雄はその瞬間、大きな安堵感に包まれ 重かった足取りも軽くなり一気に駆け下りるようにその光を目指すようになっていた。

その先が地獄でもいい。殺伐とした風景が広がり、人々が業火に焼け苦しみ、虎皮パンツをはいた鬼が人々を監視する——そんな世界でも構わない。とにかくこの闇の世界から解放されたい!!

いつの間にかカンテラを持つ涼さえも抜き去り峰雄は一直線に光に向かい駆け降っていく。

そして、その光の先にたどり着いた瞬間、峰雄は目の前の光景に度肝を抜かれた。

待望していた光の先は驚くべき事にだっ広い一つの部屋。

しかも、その部屋はいわゆる『お役所』と同じ匂いがぷんぷんとする大きな総合受付窓口だった。

ただ違うのは、窓口の外で順番を待っているのが峰雄と同じく裸の人間ばかりで、窓口の中はリクルートスーツに身を固めた鬼たちが事務作業をしているところくらい。それさえ覗けば人間界のお役所と寸分違わない雰囲気醸し出していた。

受付ホールの真ん中に呆然と立ちつくし周りを眺めている峰雄の尻目に、涼は彼を素通りし【受付窓口】と書かれた場所に一直線に向かう。

そして、窓口の亚克力板をコンコンと叩いて中の役人の鬼を呼んだのだ。

「おーい。ちょっと誰かいらないのか？」

そう言ってもなかなか中の役人はシカトしたように窓口の前に現れない。

何だか現世のお役所と大して変わらない。その様子を見て峰雄は思わず小さく笑ってしまった。

「まったく、総合窓口課っていつもこうだよな」

しかし、涼はそんな窓口を見てかなりご立腹の様子だった。

「あんたたちがもう少しスムーズに仕事してくれればこっちだって余裕もって仕事できるのにさあ！」

「うるさいですね……」

涼の言葉を遮るようにのそっと一人の女の鬼が窓口に座った。

笑顔一つ見せない愛想なしの女性公務員の鬼だった。

「窓口であまり騒がないで下さい。仕事の邪魔になりますので」

「何言ってるんだか」

涼はそう言うと鼻で笑った。

「かわいげもなく、たいした仕事してないのによく窓口なんてやってられるよな。栞」

その一言に栞とよばれた女は涼を陰湿に睨んだ。

「これだから三課は——」

「上司に似て口の悪い部下ばかりって言いたいんだろ」

涼はにやつきながら彼女の言葉を代弁した。

それを聞いて栞は苦々しく涼をまた睨んだが苛立ちを抑えるようにため息をついた。

「どうでしょうね。仕事の出来る人は少々口が悪くてもいいと思いますけど——」

そう言うと栞はちらっと涼を見ていやらしくふっと笑った

「何だよその笑いは」

涼は彼女の笑みを見てムツとした表情を浮かべた。

「俺は篁とは違って出来の悪い冥官だからダメだって言いたいのか」

「別に……」

そう言うと葉は隣に置いてあった書類を手を取った。

「でも、それは自分でも心当たりはあるのでは？」

「——何だよ……ムカツク女だな」

涼は力なくふてぶてしく呟いた。

「大体なあ、俺はお前と言い合うために——」

「ここに着たわけじゃないって言いたいんでしょう？」

葉は涼の言葉を軽くかわすかのようにすっと一枚の書類を窓口から差し出した。

「認証ナンバー AAA197967W——相楽峰雄ですね」

「——ああ……」

彼女の口からいきなり仕事の話が出たことに、涼は思わず鳩が豆鉄砲を食ったような表情を浮かべた。

「大丈夫ですよ。ちゃんと必要な書類は届いてますし、後は亡者の署名があれば手続きは終了です」

葉は書類を手慣れた手つきで整理しながら事務的に言う彼女を見て、涼はまたふてぶてしい表情を浮かべた。

「なるほどね、出来のいい冥官はやるのが違うって言いたいんだな」

「解ってくれるならありがたいですね」

——かわいげのない女だな。

涼はそう言いたげな目線を葉に送ると差し出された一枚の書類を取り、それを見つめていた峰雄に乱暴に突きつけた。

その書類の頭には【死亡通知及び審理受付通知届】と書かれていた。

「これは——？」

「難しいこと考えずに空欄を埋めるだけでいい」

まだ栞とやり合ったことで苛ついているのだろうか。涼は一言そう冷たく突き放すとその書類を峰雄に渡した

峰雄は不思議そうな顔でその内容を眺めだした。

【死亡通知及び審理受付通知届

認証ナンバー A A A 1 9 7 9 6 7 W

氏名 相楽峰雄

性別 男

享年 五四歳 二ヶ月 九日

死因 動脈瘤破裂

死亡時刻 2007年 9月13日 午前0時21分】

——俺は動脈瘤破裂で死んだのか……

峰雄はこの薄い書類を見て初めて自分の死の真相を自覚した。

だが、その書類はさらに驚くべき自らの事実を峰雄に知らせていたのだ。

【生前家族構成 配偶者有り、子供はなし。

生前職業 板金工、収入は460万円程度

前科 強盗殺人事件で有罪、10年間広島刑務所で服役。

妻とは1983年、獄中結婚。

2000年、仮出獄、現在に至る。

備考 前世に置いて一人殺生している事実がある為、特A級被告人に分類する】

強盗殺人事件で有罪——！

その文字を見た瞬間、峰雄は絶句した。

ぺらぺらの書類を持つ手は一気に震え額には脂汗が浮かぶ。

混乱で頭の中は真っ白になり、動いていないはずの心臓が激しく脈打っている感覚さえ覚えた

。

——何かの間違いだ！

峰雄は信じられない文字の羅列をもう一度眺め直した。

そう、彼にはこのぺらぺらの書類に書かれているような事をした覚えがさっぱりなかった。

それ故にその文字を見た衝撃は計り知れなかったのだ。

「——なあ……」

峰雄は声を震わせながら涼に訊いた。

「これ……本当か？」

「あん？」

涼は不機嫌そうな顔で峰雄を睨み付けた。

「あんた、まだサインしてないの？」

「え…？」

「ほら、一番下に署名と捺印があるだろ」

そう言われて峰雄はもう一度恐るべき書類に目を通した。

【なお、これから49日間、貴殿の身柄は生前特捜部の管理下に入る上、以下のことに同意すること。

- 一、冥官、及び閻魔庁職員に逆らわない事。
- 一、冥官、及び閻魔庁職員に問いには素直に従う事。
- 一、冥官、及び閻魔庁職員に気安く声をかけない事。
- 一、七回の裁きで嘘偽りを言わない事。
- 一、本書に書かれた貴殿の罪を冷静に認める事

以上のことに同意できない場合、また守れなかった場合、それも貴殿の罪として加算されることをお伝えする

そして、本書に同意するのなら下記に署名と捺印を印すこと】

峰雄は呆然と一番下の空欄を見つめた。

おそらくここに署名すればいいのだろうけど峰雄には到底それは出来そうになかった。

見覚えのない罪を認めると言っているような書類だ。

こんなものに署名などしたらその言われもない罪を認めた——ということにもなりかねない。

「早く署名しろよ」

涼は峰雄にプレッシャーをかけるように一言言った。

しかし、峰雄の手はボールペンを持ったまま固まっていた。

「出来ないよ……」

峰雄は蚊の飛ぶような声で一言呟いた。

「こんなデタラメな書類に署名なんか出来ない！」

「はあ！？ 何だって！」

その瞬間、涼の顔が怒りの色に満ちかえった。

「ここに書いてること見てねえのか！あんたは冥官である俺に逆らえないんだぞ!!」

「そりゃ、そうなんだけど……」

涼のあまりの迫力に峰雄は一瞬怯みを見せたが負けずに言い返した。

「でも、覚えのない罪を認めるなんて出来ないよ！」

「覚えのない？」

その一言に涼は声を立てて嘲笑った。

「馬鹿らしい、俺たちはあんたの全ての知っているのに」

「え……？」

その言葉に峰雄は愕然としが、涼は残酷な笑みを浮かべながら峰雄を見て言葉を続けた。

「いいか、あんたはこれから49日間、俺たち生前特捜部によって裁かれるんだ。そんな俺たちがあんたのことを隅から隅まで知らないでどうするの？」

「でも……」

「まだ解らないようだね」

涼は呆れたように深くため息をつくと峰雄から書類を奪い目の前に突きつけた

「記憶がないのかそれとも偽っているのか知らないけどこの書類は絶対に嘘はつかない。なんせ

、あんた以上にあんたを知り尽くしている俺たちが作った書類なんだからな」

そう言うと涼は峰雄の前に書類を置いてまた冷たい笑顔を浮かべた。

「まあ、嘘だと思ふんならそう思えばいいと思うよ。でも、そんな風に嘘を上塗りしていけば後で苦しむのはあんた自身と言うことを忘れるんじゃないよ」

涼の言葉はもう脅しに近いものがあつたが、それを聞いて峰雄のペンは進まない。ただ空欄の上で震えているだけだった。

「——俺が無理矢理操ってでも書かせてもいいんだけどね」

そんな峰雄を見て涼は落ち着いた口ぶりで言った。

「でも、この署名をしないとあんたはずっと素っ裸で裁きを受けなきゃいけないんだぞ」

「えっ!？」

その言葉に峰雄はギョツとした。

「恥ずかしいだろうなあ。ウチの庁は女性職員が結構多いし、なんせ人間の淑女の皆さんもいるんだ——」

そう言うと涼はちらりと峰雄の裸を見た瞬間、峰雄の中に燃えさかるような羞恥心が生まれ、思わず情けない息子を手で覆い隠した。

「服……着たいだろ」

涼はにやつきながら峰雄に迫った。峰雄はそれに頷くしかなかった。

「じゃあ、答えは簡単だろ」

その瞬間、峰雄は正常な判断が出来ない状態へと陥っていた。

罪も認めるのも嫌——でも裸も嫌で、地獄行きも嫌……。

この書類に署名すれば裸でもなくなるし地獄行きも幾分か軽くなるかもしれない。

そんな甘い餌を目の前に吊されたからには峰雄は頑なな態度を軟化させざるをえなかった。

峰雄はそれから間もなくして空欄にペンを走らせた。

乱雑な字で【相楽峰雄】と――

5 特A級亡者

犯罪者がするような写真撮影の後、涼の言うとおりに峰雄に念願の衣が支給された。

それは真っ白な死に装束に白い三角巾——

自分は死んでいるのだから違和感のない衣装だが、いざ袖を通してみると何か心が落ち着かなくなるのを峰雄は感じた。

この感覚、ずっと前に覚えたような感じがする——

そう思った瞬間、峰雄の頭に電光のようによぎったある記憶。

それは刑務所に護送され囚人服を手渡され袖を通した——あのとときの自分の姿だった。

峰雄は一瞬我に返った。

やっぱり、微かだけど記憶は残っている。自分が殺人罪で収監されて塀の中で暮らしていたと言う忌々しい記憶が……

でもあんな薄っぺらな書類に書かれていたような人を殺めたと言う決定的な記憶どころか誰を殺したのかさえも覚えていない。

そんな曖昧な記憶しか残っていない俺はこれから残酷な鬼たちに裁かれる。

たいした真実も言えず、たいした弁護も出来ず、ただ地獄へ逝くのを待つような49日間——

そう思うと峰雄の気持ちは重く沈み込んでいき、とぼとぼと案内された場所へと向かう。

部屋の前に書かれているのは【特A級被告人研修会】

ドアを開けると部屋の中はかなりだだっ広い講義室になっており、そこには峰雄と同じように死に装束に身をまとった男女がぎっしりと詰め込まれている。

特A級——

前世で決定的な罪を犯し地獄逝きの烙印を押された亡者たち。

射抜くような眼をぎよろつかせながら辺りを見回す金髪の若者。

自らのタトゥーを見せつけるように着物の裾をまくり上げたやくざ風の男。

そして、ぺちゃくちゃとお互いの身の上話をするお水系の女——

見た目だけなら何かやってそうな雰囲気や漂わせる確信犯が多いが、所々峰雄と同じような普通の雰囲気を漂わせる男女もいる。

でっぴりと太った中年の女性。白髪のすらりとした紳士。そして、信じられないくらい綺麗な少女も——

でも、怖そうな雰囲気でも普通の雰囲気でも彼らは生前必ず一つ大きな罪を犯してきた。

それは彼らだけではなく自分も同じ事——

峰雄は深いため息をついて自分の認証ナンバーが標された席に着いた。

ざわつく講義室。

皆、不安げな表情を浮かべて『お上』のお沙汰を待っている。

そして、彼ら以上に峰雄は不安で押しつぶされそうな表情を浮かべ前を見たそのときだった。

「あの～」

男の声が舐めるようにすぐ隣から響く。

ハッとしてそちらを振り向くとそこにはこってりと肌に脂の浮いた壮年男性が引きつった笑顔を浮かべていた。

「そちらさんも、特A級にランクされたんでっか？」

「——ええ……」

そう言うと峰雄はまた俯いた。

「覚えはないんですけど書類にそう書かれてしまったようなんです」

「はああ、それは不幸ですなあ」

それを聞いて男はため息混じりにそう言った

「わたいもいろんな方に話を聞いてみたんですが、どうやら特A級って言うのは現世で言うといわゆる前科有りの間人らしいですわ」

「——やっぱり……」

その言葉を聞いて峰雄はガクッと肩を落とした。

「まあ、わたいも大口を叩かれへんのですが一度詐欺行為で警察に捕まったことがあるんですわ。やっぱりそこがあかんかったんかなあ」

「——」

峰雄はそれ以上男の言葉を返すことが出来なかった。

罪の自覚のある人なら覚悟も余裕もあるのだろうけど、そうじゃない人間は違う。

このまま得心できずに地獄行きになるなんて峰雄には納得できる話ではない。

「それで、あんた。書類にどう書かれてはったんですか？」

「え……」

関西弁の男にそう言われて峰雄は顔を上げた。

「ええやないでっか。どうせわたいら地獄へ行くんでっしゃろ」

——やっぱり覚悟の出来ている人物は気持ちがちがうなあ。

峰雄は恨めしい眼で関西弁の男を見つめると深いため息をついて一言言った。

「——殺人罪ですよ」

「ほう——そりゃ、また……」

関西弁の男はそう唸ると手に持った冊子の頁をめくり始めた。その冊子は【閻魔庁及び地獄道案内】と書いてある。

「そうでんなあ、あんさんのその罪なら…行き先は——これかもしれへんな」

そう言うと関西弁の男は峰雄にある頁を開き峰雄に渡した。

それを見た瞬間、峰雄は思わず目を覆いたくなった。

【等活地獄——

この地獄は前世にて殺生を犯した亡者が墮ちる地獄です。

この地獄に行くとき貴殿の左手は鋭い鉄の爪へと変わり、ところ構わず見かけた人間同士で殺し合います。

そしてお互いに骨になるまで肉を裂き合った後、我々職員が残った骨を粉々に砕きます。

しばらくした後、涼風が辺りを吹き抜けると貴殿の身体は綺麗さっぱり生き返るのです。

そして、また貴殿は見かけた人同士殺し合う——これの繰り返しです】

そんな文章の横には人々が鉄のかぎ爪で肉を裂き合い血が飛び散る写真がでかでかと載っており、なんとも残酷な頁だった。

峰雄はそれに拒否反応を起こすようにその冊子を勢いよく伏せた。

——こんなの……嫌だ！

見覚えのない罪を背負ったままこんな残酷な地獄に堕ちる——なんて！

「でも、あんさん。これは一番上層の地獄らしくてな、まだ救いようがあるかもしれまへんで」

関西弁の男はそう言うと落ち着きながら冊子を見た。

「わたいなんて詐欺っちゅう罪犯してまっしゃろ。なんや詐欺やら嘘なんかついた人間は噂の舌を抜く大叫喚地獄に堕ちるかもしれまへんねん」

「あなたは…怖くないんですか？」

峰雄は涙声で関西弁の男に訊いた。

「怖いのは当たり前や」

そう言うと関西弁の男は複雑な笑顔を浮かべた。

「でも、前世で犯した罪は消せないから半分諦めておりますわ」

「——はあ……」

そんな男を見て峰雄は凶らずも少し感心してしまった。

この場合、彼みたいな罪の意識のある人間の方が強く地獄で生き抜けるのかもしれない。

——しかし、それに比べて俺はどうなんだ？

記憶にさえない罪を背負いただ責め立てられそのまま残酷な地獄へ――

そんなこと俺には絶対に耐えられない。そんなこと納得なんか出来ない――！

そう思った瞬間、室内は一気に静まり逆に緊張感がピリリと高まった。

峰雄はハッと周囲を見回すと、いつの間にか監守のような制服を着た鬼が部屋の四隅に陣取るように立っていた。

皆、巨人のように身体が大きく腰には警棒――と言うよりこん棒をぶら下げている。

それと間もなくして皆の視線が集中する教壇に一人のスーツを着た官僚風の鬼が立つ。

撫で上げられた青藍の髪。何もかもを見透かすような金色の瞳。そして、どの鬼よりも大きい水牛のような角

身体だけなら監守の鬼の方が大きいのだが、怖さと迫力はこの官僚の鬼の方が優っているような気がした。

「ようこそ、特A級被告人の諸君」

官僚の鬼は鋭い牙をギラリと光らせてにやりと笑った。

「私は諸君に閻魔庁での審判をレクチャーする生前特捜部一課の牛頭だ」

そう言うと官僚の鬼こと牛頭はホワイトボードに乱雑にペンを走らす。

その文字は【49日】だった。

「配っている広報誌にも書かれているように、諸君が我々生前特捜部の管理下に入るのは49日。その後は地獄へ逝くかそれとも浄土へ逝くか――もしかしたら、諸君たちのこれからの態度が関係してくるかもしれないと言うことを伝えておこう」

「はっ？ 俺たちの態度だって？」

その言葉に初めて反論したのは眼をぎょろつかせる金髪の若者だった。

「俺はてっきりもう地獄逝きが決まってるもんだと思ってたよ。なんせ特A級って烙印を押されたんだからな！」

彼の言葉に部屋の中の亡者たちが活気づいたように急に騒ぎ出した。

彼に賛同する者、鬼官僚牛頭に罵声を浴びせかける者、また恐怖で泣き崩れる者――

「黙れ！」

牛頭はそう言うと思かな亡者たちを黄金の眼でキッと睨み付けた次の瞬間、騒いでいた亡者たちは息を呑むように黙り込んだ。

「諸君がそこで何をほごこうが自由だが、そんな愚行をすればするほど諸君の言うとおりの地獄逝きも近くなると思っておいた方がいいぞ」

牛頭はそう毒を吐くと、またホワイトボードに向かった

「――いいか、諸君はこれから七日おきに七回の審判を受けることになる。これは諸君が知っている人間の愚かな裁判とは違い諸君が生前犯した罪という罪、善という善を洗いざらい審理する崇高な裁判。そして弁護する人間は諸君自身だけだと思っておいた方がいいだろう」

そう言うとき牛頭は【49日】と殴り書いた字をどんと拳で叩いた。

「そして、49日目の最後の審判。ここで諸君の運命は決まる。我が閻魔庁の長官であり天界十二天の一角である閻魔王が直々諸君を裁き、直々にお沙汰をくだされる。そこで初めて諸君の処遇が決定される――簡単に言えばこんなところだろう」

「あの……」

そう言うとき初めて峰雄は震えながらも手を挙げた次の瞬間、亡者ならずとも恐ろしい牛頭や四隅の監守までもが峰雄に射抜くような視線を送った。

「――なんだね」

牛頭は恐ろしいほどの鋭い黄金の眼で峰雄を睨み返した。

そんな彼の威圧感に峰雄は一瞬たじろぎそうになったが負けずに震えながら声を出した。

「私は……どうも記憶がないようなんです」

「ほう、記憶ね……」

「だから、どうしても書類に書かれた罪が見覚えさえもないので認めることが出来ないんです！」

一気に集中する視線に恐縮しながらも峰雄はその言葉を言い切ったが、牛頭の次の反応はあまりにも冷ややかだった

「貴様は相楽峰雄だな」

そう言うと牛頭は手元の資料を探り始めた。

「——はい……」

「貴様は三課の担当になっているので、一課の私はそう言うことは受け付けられんな」

「え……？」

「そう言う諸事情は三課の担当官に言った方が効力があるって事だよ」

そう言うと牛頭はにやりとまた牙を光らせた。

「それに、貴様の担当官は貴様のお仲間でもあるからな……もしかしたら芽はあるかもしれんぞ」

牛頭はそう言い残すとまた閻魔庁の説明の続きを始めた。

しかし、峰雄にはそんな説明さえ耳に入らなく、呆然とその場に立ちつくすばかりだった。

事前説明が終わり、そろそろと研修室からグレーの作業着を着た特A級の亡者たちが出てくる

。

そんな中、一際虚ろな目をしておぼつかない足取りで出てきた峰雄は深くため息をつくばかりだった。

これから49日に七回、いわれのない罪で裁かれ弁護するのは自分自身。こんな酷くて惨いことがあっていいのだろうか。

峰雄は思わず壁に手を当てうなだれた。

頭の中で囂らずも蘇る、裁判官の小槌の高圧的な音。

『判決。被告人を懲役12年に処す——』

記憶の中で眠る、現世での裁判の記憶。

今では微かしか覚えていないけど、ただただ検事や裁判官が怖くていつの間にか有罪が決まっていた気がする——

ここまで覚えているのに何故俺はその罪を認めようとししないのだろう。

そう、あの時だってそうだった。最後の最後まで罪を認めてはいなかった——

「相楽峰雄さんですね」

その声は峰雄のすぐ背後から響き、彼は驚きのあまりはっと息を呑んだ。

「わっ」

勢いよく後ろを振り向くと誰もいないと思っていた後ろに一人の女の鬼が立っていた

ぼさぼさのおかっぱ頭に乏しい表情に眼鏡——存在感ゼロとっていいくらい印象に残らない顔だった。

「あんたは誰——ですか!？」

「あなたを担当する三課の人間ですが——何か？」

女はそう言うと眼鏡の奥の瞳で峰雄をじとっと睨んだ。

それを見て、峰雄は「何でもありません」と小さく言うだけしか出来なかった。

「私はあなたの担当になった書記官、直梨鬼です。直と呼んでください」

「はあ……」

女性書記官直は無表情の顔でそう言うと峰雄に名刺を渡す。先ほどの受付嬢以上に愛想のない印象の女性冥官だ。

「先ほど涼君から聞きましたけど……あなた記憶がないんですってね」

「はあ……そのようで」

「ふーん」

直は意味深にそう唸ると手に持った資料に目を落とす。

峰雄はそんな彼女の一言一言の言動に裏があるのかと思うとどぎまぎするしかなかった。

「まあ、いいですわ。わからないところは審判で白黒つければいいんだから」

「はあ……」

審判か……その言葉を聞くと峰雄は急に気持ちが重くなった。

今回は地獄の裁判だ。どんな追及が待っているかわからない。きっと、あの時以上に厳しく恐ろしいにちがうないのだから

「じゃあ、行きましょう」

「え……もうですか？」

「当たり前ですよ。審判は7回しかないのですよ。もたもたしてる場合ではありません」

「——」

峰雄はその言葉に沈黙するしかなく、それと同時に回は緊張と恐怖で一気に強張った。

まるで世界の終わりを見ているような峰雄の顔を見て、直は呆れたようなため息をついて言った。

「こんなところで緊張してどうするつもりですか」

「え？」

「安心してって言い方はおかしいけど、最初っから緊張していたら後が持ちませんよ。それに——」

そう言うと直は眼鏡を指で押し上げると初めて口元に笑みを浮かべた。

「私の課の担当官はあなたのお気持ちを一番よく解る立場にいるひとだと思いますよ」

6 鬼よりも鬼らしい男

暗く冷たく狭い部屋。峰雄はその部屋の真ん中の椅子にちょこんと座っていた。

手前には書記官と名乗った直という女の鬼が眼鏡を光らせパソコンのディスプレイを睨んでおり、そして峰雄と対するデスクにはまだ担当の相手は姿を見せていない。

担当官を待たされる間、峰雄の緊張感は嫌が応にも高くなる。

この閉ざされた部屋——いつぞやの警察署の取調室に雰囲気こそっくりだ。

そして、あの時も次々と被せられるいわれのない罪に怯えていた。

『そろそろ罪を認めましょうよ。相楽さん』

『あんたがやっているって事は解ってるんですよ』

『ここで認めればすぐにここから出してあげますよ。だから一つ認めてみては？』

次々と蘇る峰雄の隠された記憶。こんな冷たい空間で拷問のように罪を問い質す警察官。

どんなに否定しても、どんなに拒否しても、警察は決めつけたかのように峰雄に罪をなすりつけようとする。

そして、その苦しさから抜け出したいくてついつい言ってしまったその言葉。

——私 が や り ま し た。

「あのう……」

そんな記憶を断つようにギュッと目をつぶった峰雄を直は冷めた目でじっと見ていた。

「そんなに怯えることないでしょ」

「でも……」

「こわーい鬼が来てあなたを食べるワケじゃないんだし、もうすこしリラックスしたら？」

「——え？」

さらりと言った直のその一言に、峰雄は思わず言葉を失った。

おそらく彼女は峰雄の気持ちを和らげようとそう言ったのだろうけど、明らかにおかしい言い回しだ。

「怖い鬼がこないだって？ 嘘だろ」

峰雄はそう言うときすっと鼻で笑った。いくら自分を安心させるとはいえ、直の一言はあからさまな嘘すぎる。

「あら、そうですか？ そういうのなら自分の目でお確かめになったら？」

だが直は平然とした様子で、またパソコンのディスプレイに目を落とす。

峰雄はそんな癪に障る彼女の態度に少しムツとした表情を浮かべ、また重々しく黙り込んだ。

思いやりのある態度かと思ったら、明らかな嘘。これじゃあまるで馬鹿にされているみたいじゃないか。

ここは地獄——この椅子に座るのは恐ろしい鬼しかいないのだから。

そんな時だった。

遠くから響いてきたカツンカツンと高くなる靴の音。

——鬼が来る！

徐々に部屋に近付いてくるその音を聞いたとたん峰雄はギュッと目を閉じた。

ここに座るのはどんな恐ろしい鬼なのだろう。血も涙もない非情な鬼なのだろうか、それとも見た目から恐ろしい忿怒した鬼だろうか——

ガチャッと扉が開いた音を聞いても峰雄はとても目を開ける気にはなれなかった。

多分その顔を見た瞬間、俺は壊れてしまう——そう信じ込んでいた。

「顔を上げろ」

その男は落ち着き払った声で一言訊いたが、峰雄は答えることどころか顔を上げることさえも出来なかった。

「——そんなに俺が怖いか？」

そんな頑なな態度を取る峰雄を見て彼はため息混じりに言った。

「まあ、そう思うのは人好き好きだと思うけど、せめてその目で俺を見てから決めつけて欲しいな」

「でも、あなたは鬼なのでしょう！」

「そんなの見てみなければ解らないだろ」

彼の突き放すような言葉に峰雄は訝しげに顔を上げ、恐る恐る目を開いた。

ゆっくりと露わになる彼の正体——それを見た瞬間、峰雄の悲観的な予想は図らずも裏切られた。

偉丈夫の身体を包んだぱりっとしたスーツ。綺麗に整髪された艶やかな黒髪。涼やかな目元にきらりと光る眼鏡——

目の前にいたのは不思議な存在感のある美男の冥官だったのだが、彼にはあるはずのものがない。

それは額に生えているはずの角。それどころか耳も尖ってないし牙も生えてない。

見た目だけならどちらかというと鬼より人に近いような気がする風貌だった。

「あの…角は？」

峰雄は指で角のジェスチャーをしながら一言聞いた

「見たらだろう」

彼は持ってきた資料を整理しながら一言冷たく答えた。

「でも、鬼だから——」

「誰が鬼だって言った？」

「え…？」

「俺は君と同じ人間だ」

その言葉に峰雄は目を見開いた。

「——でも、ここって死後の世界ですよ？」

「それくらいわかってる」

そう言うと彼はキッと峰雄を睨む。

その射抜くような眼には下手な鬼より凄みがあり峰雄は黙り込むしか出来なかった。

「まあ、話せば長くなるんだけど——俺はこれでも昔人間だったんだ。今は鬼と一緒に閻魔庁に務めてる身分だけど、ずっと昔——確か今から数えると一二〇〇年前くらいまでは君たちと同じように人間として人間界で生きていた」

「一二〇〇年前……」

図らずも触れた彼の歴史に峰雄は息を呑むしかなかった。単純計算しても奈良時代から平安時代の初め——とんでもない昔だ

「そうそう、俺は君の担当になった——こういう者だ」

そう言うと彼はスーツの胸ポケットから一枚の名刺を出し峰雄に手渡した。峰雄は訝しげに名刺を見るとこんな事が書いてあった。

【閻魔庁生前特捜部三課 第三特別審議官 小野篁】

小野篁……

確かに名前だけ見ると日本人っぽい名前だし人間なんだろうなとは思わないことはない。

でもこんな鬼しかいなさそうな職場に同じ人間がいるということに、峰雄は驚きと同時に不思議な安心感が生まれた。

彼が人間であるなら自分の事情だってわかってくれるはず——峰雄はそう確信したのだ。

「——で、本題に戻すけど」

篁はそう言うとまた資料に目を通した。

「君は俺の質問に素直に答えればいい。わかったな」

「はい……」

「——君の名前は？」

篁の威圧的な質問に峰雄は思わず唾をごくりと呑み、恐怖に声を震わせながらゆっくりと答えだした。

「相楽…峰雄です」

「享年は？」

「五四歳……」

「職業は？」

「——」

その質問で峰雄の答えは途絶えた。

あのぺらぺらの書類には板金工とは書いていたがそんな記憶など全くない。

おそらくあそこに書かれていたことは事実なのだろうけど、記憶がない以上本当だとは言えなかった。

「答えられない——か」

困ったように足をもじもじさせる峰雄を見て、篁は呆れたようにため息をついた。

しかし、その鋭い眼差しは峰雄の表情や態度をじっと見つめ何かを見抜こうとしているようだった。

「まあ、いい。次の質問をするから、はいといいえで答えなさい」

そう言うと篁は次の資料をめくり淡々と質問を続けた

「君は生前悪事を犯したことがある」

篁の言葉はいきなり峰雄の急所をついた。

——そんなことどう答えたらいいか…困ったように下を俯いた峰雄を見て篁は質問を続けた。

「その悪事は盗みである」

「——いいえ……」

「その悪事は邪淫である」

「いいえ……」

「その悪事は妄言である」

「いいえ……」

「その悪事は邪見である」

「いいえ……」

しばらくテンポよく質問を続けていた篁が、その瞬間計ったように黙り込みちらっと峰雄の顔を見た。

そして、じっくり彼を観察しながらゆっくりとした口調で次の質問をした

「その悪事は殺生である」

その質問が来た瞬間、峰雄の顔から余裕が一気に消えた。

「——いいえ！」

かすれそうでも強い口調でそう言いきると峰雄はギュッと目を閉じた。

そんな彼を篁はなめるような目つきでじっと観察した後、何かをメモに取った。

「じゃあ、今度は君個人のことを訊くよ」

そう言うと篁はまた違う書類を出し静かに質問した。

「君には奥さんがいるそうだね」

「ええ、伊世って言います……」

「その奥さんとはいつどこで結婚したの？」

その一言にまた峰雄の答えがつかまる。

あの書類には1983年獄中結婚となっていたけど、峰雄にはそれが到底信じられない。

しかし、それ以外で伊世といつどこで結婚したのかがさっぱり思い出せないのが本音だった。

「わかりません……」

「君の結婚の話だぞ？ 本当に覚えてないのか？」

「——すみません……」

そう言うと峰雄は恐縮したように縮こまった。

「——まあ、いいや」

そう言うとき、篁は資料の中から一枚の写真を峰雄に見せた。それは陰湿な顔をした老女の色あせた写真だった。

「君には彼女に見覚えがあるはずだ」

「え……？」

そう言うとき、峰雄はもう一度その写真を見返したが峰雄にはさっぱり見覚えがない——否、記憶にない老女だった。

「すみません、やっぱりわかりません」

「いいや、そんなはずはない」

そう言うとき、篁は鋭い目で峰雄を見た。

「我々が記録していたことが本当なら、君にとって彼女は生涯忘れることの出来ない人間であるはずだ」

「と…言われても——」

怪訝な顔で写真を見つめる峰雄を見て、篁はため息をついて強い口調で言いはなった。

「中村ヨネ。1981年11月26日死亡。死因絞殺——容疑者同年12月13日逮捕。容疑者氏名相楽峰雄——」

「え…！」

その一言を訊いて峰雄は絶句した。

——何かの間違いだろ……この婆さんこそが自分の手で殺めてしまった相手だなんて。

それを知った瞬間、峰雄は持っていた写真をぱらりと落とし凍り付いたように固まった。

「君は過去彼女を殺し、彼女の家から三万円を盗んだ。そして警察に捕まり、最高裁まで争った上で君の罪は確定した。奥さんとは獄中で結婚し、出所しここに来るまでの五年間幸せに暮らした——それが本当の君の人生さ」

篁は自分が殺したという老婆の写真を強く指差しながら峰雄を高圧的に責め立てた。

この声、聞き覚えがある。いつか自分を奈落に突き落としたあの刑事たちと同じ声だ。

責め立てる相手、調書を作る相手、そんな彼らに閉ざされた空間。何もかもがあの時と同じ。それに気づいた瞬間、峰雄の心の中に黒い霧に似た恐怖が湧き出た。

——まずい、壊れる……

しかし、理性がそれを止める間もなく峰雄はドンと机を激しく叩いていた。

「俺はやってないッ!!」

狭い部屋に木霊すようにその声が響いたが、篁と直は表情一つ変えずに峰雄をじっと見た。

「一言言っておくけど、閻魔^{うち}庁の資料の正確さは人間界の警察や検察などより比べものにならない。それでもやってないって言えるのか？」

「ああ！ 天に誓ってもやってない!!」

「もしそれが嘘だとしたら君は殺生と盗みの罪と同時に妄言の罪も被らなければいけないことになる。それがどういう事か解るか？」

「地獄のもっと深いところに墮ちる——そう言いたいんだろ！」

「もしそうなれば、さすがの俺でも君を救い出すことはできない。それでもいいんだな」

「ああ、何度でも言えばいいさ。それでも俺は何度でも殺してないって言い続けるよ!!」

その瞬間、篁の眼鏡の奥の瞳が鋭く光る。

峰雄の言葉や表情の裏の裏を探るような眼光に峰雄はそれ以上の反論の言葉が出なかったが、それは篁も同じ事だった。

「あなた、今言ったことは記録に残るけどいいの？」

そんな沈黙した空間に一石を投じたのは直の淡々とした質問だった

「何が……」

「篁さんも仰っていたけど、あなたはあなたが犯した罪を今ここで全否定するわけですよ。それでも本当にいいんですね」

「だから、俺が嘘を言っているとしたら地獄のもっと奥へと堕ちるってこと——」

「口で言うのは容易いですけど、そうなればあなたは今判明している刑期の倍以上の時間叫喚地獄で過ごさなきゃなりません。ざっと計算して……等活地獄50年に黒縄地獄30年、それに加えて叫喚地獄が120年と言ったところかしら——」

指折り数え地獄の刑期を計算する直を見て、峰雄は少し背筋が寒くなるのを感じた。

頭に過ぎったのが特A級研修会にパラパラと読んだ地獄案内という残酷な冊子。

あの写真のような地獄が50年100年も続くような刑が自分には確定していると言うのか——そう思うと峰雄はなんとも絶望的な気分になった。

「直、亡者をいじめるもんじゃない」

半ば脅しに近い直の発言をうけて篁は一言やんわりと彼女を諷めた。

「だって……生意気じゃないですか。うちの調査にケチを付けるなんて」

「所々記憶が飛んでいるんだ——数日は混乱するのは仕方ない」

篁は納得いかない直の言葉をそう手早く片づけるとまた資料に目を落とした。

「で——その君の記憶の話なんだけど」

「ええ……」

「さっきから話を聞いているとどうやら君は罪を犯した記憶の他に結婚や職業に対する記憶もところどころ飛んでいるようだ」

「——」

篁のその一言に峰雄は答えようがなかった。

「困ったものだな……」

そう言うと篁は深くため息をついた。

「久々に現世に記憶を忘れた亡者を受け持ってしまったようだ」

「記憶を——忘れた？」

「何もわからない亡者のあなたに説明するのはむずかしいんだけどね……」

そんな不思議な言葉に思わず首をひねる峰雄を見て、直はため息混じりに説明しだした。

「いわゆる死後記憶喪失症という現象で、壮絶な最後または生前の限界的精神状況が引き起こす強い衝撃で、死後肉体切り離された魂が生前の記憶を引き継がずこちらに来ることで」

「——まあ、平たく言うと滅びた肉体から切り離された魂の君が滅びた肉体の君に記憶を置き忘れにしたままこちらにきてしまったということ」

直の説明に付け加えるように篁は一言そう言うと、じろっと峰雄を見るともう一つ大きなため息をついた。

その眼は明らかに厄介なものが来たなと言わんばかりだった。

「あの……一つ質問——していいですか？」

そんな篁に恐縮しながら峰雄は一言訊いた。

「ご勝手に」

「やっぱり……記憶がないとまずいですかね」

「当たり前だ」

そう言うと篁は冷たく突き放すように言った。

「これから君を弁護するのは君自身だ。宛になるのは君の口と記憶だけとしか言えないね」

「え……？」

その言葉を聞いて峰雄は焦ったように篋に縫った。

「そんな……あなたが弁護してくれるんじゃないんですか？」

「誰がそんなことを言った」

篋は席を立ち上がると、峰雄を指差し見下すように睨み付けた。

「君にとって俺は便利な弁護士なんかじゃない。君の罪を洗いざらい調べる閻魔庁の冥官だ」

そう言い部屋を後にしていく篋に峰雄は何も反論が出来なかった。

ただ一つ地の底に突き落とされた峰雄は心の中で一つの言葉を吐く

——あの男、鬼だ……

7 新人冥官

高い天井の一番上まで並べられた書籍。広い部屋の奥まで並べられた資料。

静粛で広大な閻魔庁総合図書資料室――

未だに現世にしがみついている生者から生を全うし現世を離れた亡者まで、ありとあらゆる人間の資料がここには集まってくる閻魔庁の頭脳。

その資料の山の間をちよろちよろと数十匹の餓鬼がせわしなく働いている。

黒ずんだ身体、細い首、ふくれた腹――栄養失調の子供のような見た目の餓鬼。前世で罪を犯した人間のなりの果てだ。

そんな餓鬼たちは自分より何倍も高く積み上げられた資料をせわしなく受付に運んでいく。

ぺらぺらの書類から分厚い書籍、はたまたDVDらしきディスク類まで――

資料室の受付に徐々にうずたかく積まれていく大量の資料を見て若い女の鬼は思わずため息をついた。

その顔はまだ初々しさが残る少女で、着こんだリクルートスーツはどこか様になっていない。

「信じらんない」

少女はそう呟くと資料から目をそらし手に持ったメモを苦々しく見る。そこには【相楽峰雄に関する資料、一式】とだけ書かれていた。

「メモには一言しか書いてなかったのに、こんなに来るなんて反則よ……」

「そんなつまらない文句言ってちゃダメだよ。円ちゃん」

そう言い彼女を宥めたのは資料を一つずつチェックしている司書官、司。亜麻色の長髪を後ろで束ねたインテリ風の鬼だった。

「これでも、いつもよりかは少なめだよ」

「ええ!? これが少ないめなんですか？」

「そうだよ」

司は慣れた手つきで資料をきっちりと整理しながら言った。

「新人の円ちゃんには多いと思うかもしれないけど、一応人間の一生分がつまった資料なんだから膨大になるのは仕方ないんだ」

「へえ……」

そう言うとうず高く摘まれた資料を見上げながら円は呆れたような声を上げた。

「でも——今日の亡者の資料はなんか変だな？」

そう言うとき司は一つの資料を円に渡した

「どうやら一部分の記憶が綺麗さっぱり抜け落ちているみたいなんだ」

そう言われて円は手渡された資料をぱらぱらとめくって目を通した。

1981年の相楽峰雄の記憶——

確かに普通なら365日びっしりと書かれた記憶が虫食いのように荒く消されていた。

「あ…ホントだ」

円はその空欄を訝しげに見つめながら言葉を続けた。

「これって記録漏れってヤツじゃない？」

「そうかな。僕はそうだとは思えないけどな……」

「え？」

円はそう言うとき司を見ると、彼は眉をひそめて別の資料を眺めていた。

「記録漏れにしては大きすぎる気もするし、それに君の上司がそんな凡ミスをするとは思えない

」

「——そうですかね？」

そう言うと円は渡された資料を司に返した。

「確かに篁さんは仕事の出来る冥官かもしれないけど、あの人一応元人間ですし——」

「——円ちゃんは新人だから解ってないね」

司は呆れ笑みを浮かべてまた大量の資料を裁いていく。

「小野審議官は僕たちみたいな凡人とは全然違うよ。なんせ入庁のきっかけが閻魔王直々のヘッドハンティングだったんだから」

「へえ……そうなんだ」

円は感心したように唸った。

「でも、なんでわざわざ非力な人間を——？」

「それは閻魔王自体が理由を明かしてないから今でも謎のままだよ。でも……彼の仕事ぶり見ていてわかるでしょ」

「そう……ね」

そう言うと円は急に納得した表情を浮かべた。

「私も入庁前から人間出身冥官の話は噂では聞いていたけど、実際あの人の下で働くと怖いほど頭の切れる人で驚いちゃった」

「そうですよ」

そう言うと司はうっすらと笑みを浮かべて言葉を続けた。

「だから、円ちゃんも彼のことをあまり人間だと思って舐めてかからない方がいいよ。彼には鬼よりも鬼らしい部分があるからね」

「うーん。それは言えてるかも」

その言葉に円はふっと笑みを浮かべた。

「篁さんって滅多に笑顔を見せないし口も達者と言うか悪いんだよね。やっぱりああしないと閻魔庁で生き残れなかったのかな？」

「さあ、それは君の上司に直接聞いてみたら？」

司はそう受け流すとうずたかく積まれた資料の山を手際よく数えだした。

「生前調査票が54冊、記憶DVDが30枚——そして、これは死後記憶喪失症に関する著書だ」

「死後記憶喪失症？」

そんなの借りてこいって言われたっけ——？そう思いながら円は分厚い本を手にとった。

「どうしてこれを？」

「ついさっき君の上司からついでに頼むって連絡があったからね」

にやっと笑みを浮かべる司の顔を見た瞬間、円は自分の上司小野篁の機転の速さを思い知り啞然とした表情を浮かべた。

「急にこんな本用意したり資料が虫食いになってるのを見ると、今回の亡者は相当ひどい記憶喪失があるようだな」

「亡者に記憶がないとどうなるんですか？」

「そうだね……」

そう言うと司はふと考え込んだ。

「まず、亡者は自分の弁護が出来ない。それはつまり、審判の時にこっちに攻められっぱなしになって地獄逝きが現実味を帯びちゃうね」

「ふーん……でも、それはこちらにあんまり関係ないですね」

「いや、問題はこれからだ」

そう言うと司は険しい表情を浮かべて円を見た。

「亡者に記憶がないって事は、君たち生前特捜部にとって唯一の情報が得られない状況になってしまう。たいした事前審理も出来なし、その状態で閻魔帳を付けなきゃいけない——つまり、冥官としての技量を問われる案件なんだよ」

「へえ…大変そう……」

どうやら新入職員の自分には関係ないとでも考えているのか人ごとのように唸る円を見て司は呆れた表情を浮かべた。

「——まあ、新入職員の君に言っても仕方がないか」

司はため息混じりにそう言うと近くにいた餓鬼に資料を運べと目で命令した。

言葉を奪われている餓鬼たちは黙ったまませこせここと積み上げられた資料をキャリーカートに運んでいった。

「でも、君も未来の冥官を目指すんだったら小野審議官の仕事をちゃんと見ておいた方がいいぞ」

「はい……」

そう頷くと円はぼんやりとキャリーカートに積まれていく大量の資料を見つめた。

——これ私一人が運ぶなんて、はっきり言って最悪よね。

円はそう思いながら不満げなため息をついた。

8 閻魔庁生前特捜部3課

窓の外で走る稲妻。その光が円の白い頬を更に白く照らした。

庁舎の外は荒涼とした黒い大平原。その空には赤黒い雲が低く垂れ込んでいた。

そんな変わり映えのしない地獄の風景にも目に暮れず、円は慎重に資料を載せたキャリーカートを進めた。

総合図書資料室から彼女の配属された生前特捜部三課はさほど遠くはない距離だ。

しかし50冊以上の書籍と30枚以上のDVDを運んだキャリーカートを操っている今は悲鳴を上げたくなるほど遠い距離に思えた。

——まったく、こんな事なら資料室が近ければいいのに。否、ウチの課が資料室に近ければいいのよ。

頭の中でそんなつまらない問答を繰り返しながら、円は稲光の差し込む廊下をゆっくりと進んでいく。

やがて彼女はある部屋の前で足を止め、ドアを開けた。生前特捜部三課——彼女の配属部署だった。

「資料持ってきましたよー……」

彼女は部屋に入るなり大きな声でそう言ったが部屋の中の重々しい雰囲気を感じた瞬間、一気に縮こまった。

彼女の目に真っ先に飛び込んできたのは深刻そうな顔をした先輩四人の会議姿。

一人はベビーフェイスのくせに一番の古株の外回りの涼。

一人は眼鏡をかけた根暗なお局書記官の直

一人は大柄な体格におおらかな表情が印象の事務担当の雅。

そして、もう一人がこの課を取り仕切っている人間出身冥官の篁だった。

「資料はそこに置いていて」

円の存在に最初に気付いたのは雅だったが、彼もすぐに深刻な会議の方へと集中していった。

「はい。解りましたよ……」

そんな彼らの秘密会議を気にしながら円は資料を乗せたキャリーカートを部屋の隅に置いた。

「なあ、あのオッサン……^{マジ}本気で記憶がないのか？」

涼は開口一番に篁に迫った。

「ああ、間違いないよ」

篁はため息混じりに資料を眺めた。

「お前が死んだ記憶がないって言ってきた時から何となく怪しいとは思ってたけど、案の定って感じだな」

「え……そんなときから？」

その言葉に涼は驚きを隠せなかった。

「あら、涼くんはそのこと全く気付かなかったの？」

そんな彼を意地悪げに聞き返したのはお茶をすすっていた直だった。

「うるせえな……おれはてっきりとぼけているだけだと——」

「だから、彼のことをしっかり観察しとけて言っただろ」

そう言うと篁は呆れたように深くため息をついた。

「——ったく、もう少しお前に洞察力があればとうの昔に外回りなんて卒業できるのにな」

「なんかその言い方ムカつく……」

そう言うと涼はふて腐れたように俯いた。

「しかし、面倒な亡者に当たったものですね」

相楽峰雄の写真を細い目で眺めながらそう漏らしたのは雅だった。

「現世で強盗殺人を起こした特A級被告人——さらに悪いことに死後記憶喪失症が激しく肝心の殺生の記憶さえなくて頑なに否定し続ける——正直言ってウチには回ってきて欲しくなかったですね」

「そりゃどこの部署でも一緒だろう」

篁はため息混じりにそう言った。

「正直言えば、俺もこんな厄介な亡者の面倒を見るのはごめんだよ。こんな事になるのなら一課や二課の奴らに回しとけばよかった」

「へえ、珍しいこと言うじゃん」

そう言うと涼は顔を上げた。

「でも、そうなったらあのオッサン有無も言わずに地獄逝き決定だよ」

「そっちの方が楽でいい」

「あんたには同族を哀れむ気持ちなんて無いんだな……」

あまりにも冷たく突き放した篁の言葉に涼は呆れ気味な声を上げた。

「でもな、一課や二課が彼を裁こうとしても果たして正しい判断が出来るか——疑問と言えば疑問だな」

「——それは、どういう事ですか？」

直の質問に篁は不敵な笑顔を浮かべた。

「はっきり言うよ。彼はかなり特殊だ」

「特殊？」

三人は同時にそう言った。

「お前たちは彼が強盗殺人をしたって事信じてるか？」

「そりゃ……」

そう言うと涼は雅と目を合わせながら言った。

「うちの庁が調べた資料に書いてあるんだから信じるしかないだろ……」

「俺も最初はそう思った——でも正直言って彼と面談して若干の疑問を持ったね」

そう言うと篁はリモコンのボタンを押してテレビを付けた。そこに映ったのは先ほどの相楽峰雄の面談のビデオ映像だった。

「俺は今までいろんなホラ吹きとやり合ってきた。だから、嘘か誠かなんて表情を見れば大体見当がつく——」

篁はそう言うところある場所で一時停止ボタンを押したあと、ひとつ間をおいて再生ボタンをおした瞬間、静寂しきった室内に相楽峰雄の悲痛な声が響いた。

『俺はやってないッ——！！』

「お前たちはこの彼の顔——どう思う？」

篁のその問いに涼と雅と直はお互いに目を合わせた。

「どうって言われても……」

「偽りの顔か誠の顔かどちらだと思う？」

またその問いに三人とも目を合わせて黙り込んだ。

そんな彼らの表情を確認した上で篁はゆっくりとした口調で一言言った。

「——俺には彼が嘘を言っている顔だとは思えないね」

「え……？」

その一言に三人は驚きの表情を浮かべた。

「少なくとも顔だけみれば彼は真実の否定をしている——」

「ちょっと待って！」

涼は焦ったように篁の言葉を遮った。

「もしかしてあんた、あの亡者の戯言を本気で信じようなんて思ってるのか？」

「さあ……どうかな」

そう言うと篁はテレビの電源を切ると、ブラウン管に映る必死で罪を否定する相楽峰雄の顔が一気に暗転した。

「相手はかなり激しい記憶喪失だ。肝心の事件の記憶もないのだから必死で罪を否定するのも仕方がないと言えば仕方がない。ただ——」

そう言うと篁は手元にあった彼の資料をめくった。

現世で強盗殺人事件を起こし無実を訴え最高裁まで争った上で罪が確定——たった一行に集約された彼の現世での罪を眺めながら篁はゆっくりと口を開いた。

「彼の表情や態度を見ていると^{うち}閻魔^うの資料もかなり薄っぺらく感じてしまっているんだ」

「薄っぺらい？」

「どちらが本当でどちらが嘘だとは今の時点では断言できない。でも、今はどちらとも疑ってかかった方がいいような気がするんだ」

そう言うと篁は資料を机の上に置くと部屋の隅で資料の整理に追われる新人の円を見た。

「おい、円！」

「はい？」

「そこに1981年の生前調査票があるだろ」

「えっ！」

その言葉に円は焦ったようにちらとこちらを見た。その先にはプレッシャーをかけるような視線を投げる上司篁がいた。

「——そんなこと急に言われても……困るよお」

円はそんな文句をぶつぶつと呟きながら、せっかく並べた資料の山を漁りだす。そして、資料をぐしゃぐしゃに荒らした後、円はお目当ての資料を手にとった。

「あった！」

そう言うと、円は立ち上がり駆け出すように篁の側へ寄った。

「あの一」

円は資料を篁に渡しながら一つ訊いた。

「私、さっきこの資料見たんですけど——」

「記入漏れがあるんだろ」

そう言うと篁は資料を取り上げると、ぱらっと開いた。

「——知ってるんですか？」

その言葉に円は驚きの表情を浮かべた。

「大体は予想のつく話だ」

篁はそう言うとある頁を開き、それを見せびらかすように机に置いた。普通ならびっしりと素行が記入されているはずの頁は綺麗さっぱり空白になっていた。

「1981年11月26日——オッサンが人を殺したはずの日か……」

その空白の頁を涼は険しい顔をしながら眺めた。

「——でも、これっておかしくないですか？」

疑問の声を上げたのは雅だった。

「亡者が肉体に記憶を忘れたのならまだしも、生前の素行を事細かく記入しているはずの生前調査票まで空白があるなんて——絶対に変ですよ」

「やはりそう思うか？」

そう言うと篁はその資料を取り上げまたぱらぱらと見た。

「当たり前ですよ」

直はため息混じりに言った。

「ウチの資料がこんな散々な状態だなんて……何かの間違いだと思いたいわ」

「それが間違いじゃないのがこの資料の謎だ」

篁はそう言うと手を組み静かに目を閉じた。

「お前らも知っているだろうけど、この生前調査票って言うのは人間の一生が文章化された資料だ。普通なら一字一句記入漏れなんてないの完璧な資料であるはず——」

「じゃあ、なんで…」

「答えは簡単だ」

そう言うと篁はゆっくりと開眼した。

「彼は現世にいるときからこの時期の記憶がないということだ」

閻魔庁での審判は七日おきに計七回。計ったかのように現世で自分を吊う法要と見事に重なっている

かといって現世での初七日の経文の声がこんな地の果てまで聞こえるはずもないし何の加勢にもならない。

何のための法要なのか……峰雄はそれを虚しく感じていた

冷たいばかりの小さく狭いあの取調室。

そして取調官も1回目の時と同じ、書記官は無愛想な鬼女直と、人間の冥官小野篁だった。

本当にこれから審判が始まるのだろうか……

峰雄は訝しげに準備に勤しむ直を遠巻きに眺めていた。

彼女は一目プロジェクターにしか見えない機械に一枚のDVDを挿入しており、その前には真っ白なスクリーン。

今から何らかの映像を見せるつもりなのだろうか……

峰雄は首を傾げながら準備に勤しむ彼女を見つめる篁に恐る恐る尋ねてみた。

「あの……これから何を——するんですか？」

「審判だ」

「いや…それは解っているんですけど……」

そう言うと峰雄は黙り込んでちらっとプロジェクターに目を落とす。

まるで奥歯に物が挟まった疑問を投げかける峰雄を見て篁はため息混じりに答えた。

「——君には運悪く冥界に記憶を持ってきていないことは前触れただろ」

「はあ……」

「でもな、我が庁には生前記録という形で君の記憶が一部資料として残っていて、それがこの記憶DVDなのだよ」

そう言うと篁は徐に峰雄に一枚のディスクを見せた瞬間、峰雄は思わずごくりと唾を呑んだ。

「ものすごい個人情報ですね……」

峰雄はビクビクしながら一言訊いた。

「一応、我が庁は生前の行いを事細かく記録し審査する仕事があるからな。最近の人間たちがうるさい個人情報なんてお構いなしに集まってくる」

篁のその言葉に峰雄は思わず絶句した。

よく考えてみると閻魔庁というお役所は思っていたよりも恐ろしいかもしれない。

資料という形で生前の行いが残り冥官たちは自分より自分という存在を知り尽くしているなんて——背筋が凍るほど怖い話だ。

「まあ、君自身の記憶がほとんど残っていないわけだし、この記憶の映像でも見て自分が取り戻せたらなと思ってね——」

そう言うと篁は部屋の灯りの電源を切った。

一気に薄暗くなった取調室。

時を経たずにテーブルに置かれたプロジェクターから青白い光が放たれスクリーンが一気に白く光った。

「君は一九五三年八月二五日、埼玉県のパ田舎に生まれた。父親相楽為助は農家を営む昔気質の頑固親父。そして母親相楽弥生は昔から身体が弱かった。君はそんな両親の長男坊として生まれ、両親の期待を一身に集め育っていくはずだった——」

* * *

君の最古の記憶は四歳の冬。深々と静かに牡丹雪が降りしきる雪の日だった。

布団に女の人が横たわっているのがわかるかね？

雪のように白い肌、血色の悪い唇に虚ろな目——君の母親、弥生さんだ。

彼女は弟佳彦のお産の後肥立ちが悪くここ最近の冷え込みにより肺炎を併発してしまっていた

。

医者を呼んでもここは山の中の集落——この大雪もあり簡単に呼べる状態ではなかった。

四歳の君にとってそれは衝撃的すぎる光景だったかもしれない。

息を引き取ろうとしている母。

それを見ておろおろするばかりの父と親族と大人たち。

何も知らずにすやすやと横で眠りにつく生まれたての弟。

そして、何一つ母の力になれない幼い自分——

「そう——俺はその状況が悔しくてならなかった。こんなに大人がいるのに、どうして誰も母さんを救ってくれないのか。どうして弟なんて生まれてきたんだ——何もかもが悔しくて仕方がなかった……」

幼い君は居たたまれなくなって障子を開けて寒風吹きすさむ縁側に出たね。

雪化粧した殺風景な坪庭を眺めているとしばらくして大人たちの唸るような泣き声が響いてきた。

「その時、母さんは天国に行った……か」

君にとって母親の死は大きな損失だった。

その影響で残された父親との関係、そして新しく生まれた弟との関係、どちらともギクシャクしていたのは事実だったはず。

特に母親の死の原因とも言っていない弟に関しては憎しみさえ感じていただろう。

「ああ、思い出した——俺の弟はとにかく出来のいいヤツだった。勉強させれば学年で一番なんて当たり前。運動神経抜群、性格も太陽みたいでクラスの人気者。勉強も運動もそこそこで引込み思案の俺が勝てる相手じゃない事は明らかだった。

佳彦の方が出来がいいって事を知った瞬間、親父はアイツの方を可愛がるようになったし、周りもみんなアイツばかり愛していたのは目に見えて解った。俺はそんな佳彦を憎かったのか嫉ましかったのか——いろんな感情の交ざった眼差しで見っていたな……」

何のしがらみもなく自由に育つ弟に対して、君は早く言えばコンプレックスの塊。

君は明るくて誰からも愛される弟に嫉妬でもしていたのだろう。

何かと付けて彼をなじったり悪さをなすりつけたり——相当酷いいじめもしていたようだ。

「そう、裏の銀杏山——俺が住んでいた村の子供は大体この山は庭のように歩いていた。そして俺とアイツも——

その日、俺たち佳彦は二人でこの山で鬼ごっこをしていた。そのうち後ろから追いかけていたアイツが転けたんだ。

俺は最初そんな大層に思わなかったけどアイツがなかなか動かないから恐る恐る近付いたんだ。

『足が……』

どうやら挫いたみたいだった。

小さな裏山とは言っても山の中。俺はどうしようもなかった。

——助けようか……

そんな気が無かったと言えば嘘になるがとって、元々遺恨のある弟でもあるから意地悪な気持ちも出てきたのも事実——

結局俺はその気持ちに負けた。

痛がって涙する佳彦に背を向け俺は走って山を下りていったのだ。

アイツを助けるためではなく、放り出すために——」

君のその行為は父親はじめ身内から非難轟々だった。

夜通し捜索が続いた次の朝、弟は無事家に帰ることが出来事なきを得たけど君は痛いお灸を添えられた。

「『なんだ！ アイツの方が俺より大切なのかよ！』

——その時、俺は思わずそう思ってしまったね。

それからは家族との関係がもっとギクシャクし始めた。親父からは愛されず佳彦とはお互いに憎しみあっているような気さえしてしまっていた……」

君はそんな鬱々とした気持ちを抱きながら少年時代を過ごしていく。

その鬱積した気持ちはいつしかこの町を出たいという願望にまで発展していったね

「こんな片田舎で農業やるよりも、東京に出て一山当てたい。こんなボロ屋を継ぐのは可愛がられている佳彦で十分だ——あの頃の俺はずっとそう思っていた…」

そして中学の卒業式の日、君はその足で小さな駅のホームに立っていた。

早春の薄ら寒い日。ごとごととホームに近づくローカル線を見つめ君はやっと家族とのしがらみが解けると安堵し、そして未来の希望に胸膨らませていた。

そして、これが君にとって最後のふるさとでの記憶だった——

* * *

スクリーンの映像が白濁し、そして暗転する。

プロジェクターが放つ青白い光がプツンと切れたのを合図に直は次のディスクをケースから取り出した

「随分、思い出してきたようだな」

足を組んで椅子に座っていた篁のその一言で峰雄はハッと顔を上げた。

彼の皺が彫りこまれた目じりを潤ませ血色の悪い頬を伝って一筋の涙が零れ落ちる。

何故だかわからないがあの映像を見た瞬間峰雄は涙が止まらなくなっていた。

「不思議だな……」

峰雄は鼻をすすらせながら一つ呟いた。

「頭の中には何も残ってないのに何故か懐かしくてたまらない……」

「当たり前だ。これは君の記憶そのものなんだからな」

篁はさらりと言いのけた。

「記憶を置き忘れたとは言っても、君の頭の中には断片的に記憶が残っている。この映像はその記憶を繋ぎ合わせる役目をしているだけだ」

「記憶を繋ぎ合わせる……」

峰雄はその言葉を思わず繰り返した。

置き忘れたはずの記憶がこの映像を見ただけで次々と蘇る――

その感覚は催眠術にでもかかっているかのようで、不思議としか言いようがなかった。

「まあ、この調子で思い出していけば何とかかなりそうだな……」

そう言うと篁は直に次のディスクを挿入するように合図を送ると、彼女は黙ったままプロジェクターに次のディスクを挿入した。

すると再びプロジェクターから青白い光が照射されスクリーンを真っ白に照らしていく。

峰雄はその映像をじっと食い入るように見つめる。自らの記憶を取り戻すため。そして、自ら

の無実をこの眼で確認するため――

* * *

東京に出た君は青木建設の現場作業員として雇われることになった。

世は高度成長期のまっただ中。

青木建設は公共工事から民間まで受注が殺到している急成長中の土建屋だった。

「――採用は意外とあっさり決まったのを覚えている。なんせ人が足りないのだから若ければ俺みたいな素人でも何でもよかったのだろう。最初は日雇い同然だったけど急成長中なのだからそのうち昇級するだろう――その時は軽い気持ちで考えていた……」

東京での住居は都心からは少し離れた杉並の閑静な住宅街。日雇い作業員たちとボロアパートで身を寄せ合って暮らしていた。

「――そう言われても、突貫工事や出張なんかでほとんど帰る暇なんてなかった。帰ったら帰ったで仲間と酒を飲んだり麻雀したり……そんな楽しみしかないつまらない場所だったよ」

上京当初、君はがむしゃらに働いた。建設に対しての勉強も怠ることもなかった。

全ては上司の目にとまって正社員そして管理職にしてもらうため。そして、自分を疎んじていた故郷に錦を飾るため――

「でも、世の中そんなに甘いものじゃなかった。二〇歳くらいでやっと一人前扱いされるようになったけど、それからは――対して待遇なんて変わらなかった。その頃は学歴で待遇が変わる時代に突入していた。中卒のたたき上げより大卒の専門的頭脳――勝負できる次元ではなかった」

それでも君は勤勉に働き続けた。そして、学歴を増やすために定時制高校の夜間部に入学した。

確か二五歳の時だったね――

「高校くらい卒業しなきゃダメだ——仲間の中でそんな話になって成り行きで入学してみた。確かその時一緒に入学したのが後輩の吾妻俊幸。俺より五歳年下で一番目をかけていた後輩だった」

その定時制高校で君は運命の出逢いをするようになるね——

将来君と結婚することになる相川伊世——君より八歳も年下の少女だった。

「その頃の定時制高校っていうのは俺たちみたいに昼間働く人間や、ある事情で高校に行けなかった老人とかが多かったけど、伊世みたいな現役世代はかえって少なくてかなり異質だったのを覚えてる。

話を聞いてみると伊世は俺と同じで早くに母親を亡くし、そして父親は病気がちで、さらに幼い妹もいた。そして彼女も中学卒業を機に大手スーパーに働きに出て、そして片手間に定時制高校に勉強しにきていた。

——家族を捨てた俺がそう思うのもおかしい話だけど、俺はそんな彼女に強いシンパシーを感じたよ……」

でも、それは君の後輩の吾妻も同じだった。

実は、伊世が最初に付き合いだしたのは彼の方だったそうだね。

それを見た君は激しいショックを受けた——

「最初、吾妻から『伊世のことが好きだ』って聞いたときは驚いて声も出せなかった。俺も同じように伊世にほのかな恋心を抱いていたわけだから、どう言い返せばいいのか解らなかった。

でも、よく考えてみると吾妻って言う男は弟の佳彦とタイプが似ている。陽気で誰とも気さくに喋れる——万人に受けするタイプなんだ。俺はそんな彼に勝てる気がしなかった。俺は伊世にも吾妻にも何も言えないままだ中で、アイツらは付き合いだしたんだ」

それからの君は彼に対する^{ジェラシー}嫉妬心を押さえ込むように仕事に没頭した。

そのうちせつかく決意を持って入学した高校にも足が遠のいてしまったね。

「——とにかく伊世に会いたくない！ 伊世と吾妻が仲良くしているところなんて見たくない！

そんなこと思ってたら高校なんて行きたくなくなった……」

君はすっぱりと高校を中退し仕事に生きようと決意した。

それから、彼女の事なんて忘れてしまったかのように君はがむしゃらに働き続け、そのうち現場監督に認められて君はやっと正社員の道が開け始めた。

初めてやり甲斐を感じ始めていた二七歳の冬、君は仕事帰りのアパートの前で思わぬ人と再会する。

昔、ほのかな恋心を抱いていた伊世に——

「——とにかく底冷えのする寒い日だった。弱い街灯に照らされる一人の女性に俺は息を呑んだ。

少女の顔から美しい女性の顔へと変わった伊世——

俺は嬉しい気持ちが半分、逃げ出したい気持ちが半分だったね。

そのうち彼女は俺を見るなりに早足で近付いてきた。

その顔はどこか怒っているような悲しんでいるような……不思議な顔だった。

『何で学校を辞めたの？』

彼女は藪から棒に一言言った。

俺はなんて答えたらいいのか解らなかった

黙り込む俺の前で彼女は語気を荒げて言葉を続けた。

『これから出世するには学歴が大切だって言っていたのはあなたでしょ！ それなのに逃げるなんて卑怯よ！』

『違う！』

俺は思わず反論してしまった。

『俺は——あそこにいたら……自分が壊れそうだったから』

その言葉を聞いて伊世は不思議そうな顔をして俺を見た。

俺はその時だけは夜の底冷えなんて忘れたくらい身体が火照っていた。

『——吾妻を待ってるのか？』

俺は沈黙を守れないように一言伊世に聞いた。

『馬鹿言わないで……もう別れたわ』

『別れた？』

俺はその言葉に呆気にとられた。

『——何で？』

『私は——あの人のこと愛してないことが解ったから別れたの』

『愛してない？』

俺は伊世の言っていることがよく解らなかった。

しかし、そんな俺をよそに伊世は顔を赤らめながら言葉を続けた。

『私、あの人よりもずっと好きな人がいるの……』

『え…』

その瞬間、伊世はふっと俺の身体に抱きついた。

俺は驚きのあまり声が出せなかった——

『ずっとあなたのことが好きだったのに、何故あなたは私の前から去っていったの？』

伊世は俺の胸の中で怒りに似た愛情をぶつけるかのように涙を流した。それを見た瞬間、俺は

初めて伊世の気持ちを知ったのかもしれない。

そして、何も言わず彼女の前から消えたことを心から悔やんだ。

俺には彼女を抱きしめることでしか罪滅ぼしは出来なかったんだ——」

君と伊世はその時初めて結ばれた。

その関係は相思相愛と言ってもよかったのかもしれないな。

君は真剣に伊世との結婚を考え近くに新居まで用意した。

仕事も私生活も順調——絵に描いたような幸せがこれから待っているはずだった。

「でも伊世と付き合いだしてから急に仕事の方でトラブルが多くなった。内定が出そうだった正社員の話が急にナシになったり、いわれのないことで現場監督に責められたり——俺にはどうしてうまく行かなくなったか心当たりがまったくワケがわからなかった。

でも、俺がくじけそうになったら決まって励ましてくれたのが伊世だった。

『今の俺は一人じゃない。彼女のためなら何でも出来そうだ——』

俺はそれだけが頼りでただ働き続けた——」

君と伊世の結婚話も順調に進み一ヶ月後の入籍を目標に君は今まで以上に働いた——

でもそんな二九歳の一二月——ある事件が君の身に降りかかった。

そう、君の人生を奈落に突き落とすあの事件が——

肌寒い冬晴れの日、君は新居のアパートから仕事に向かうため出た。

それはいつもと変わらない日常の始まりだと思っていただろう。

君は外階段をコツンコツンと降りていった先には二人の男が待っていた。

一人は黒いコートに身を包んだ壮年の男一人は真新しいスーツを着た若い男——君にとっては

見覚えのない男だった。

君は彼らを避けるように歩くと、彼らは君の進行方向を塞ぐように立ちはだかった。

『相楽峰雄さんですね』

黒コート男は威圧的にそう訊いた。

『そう……ですけど？』

君は彼らに不審の目を向けながら恐る恐る聞いた。

その瞬間、彼らはお互いに目を合わせた後黒コート男の方が胸からあるものを峰雄に見せた。

——警察手帳だった。

『私は杉並署の者だが、先だって相楽さんに聞きたい事がありましてね——署まで同行してもらえませんか？』

君はその瞬間、気が動転した。

何で家の目の前に警察官がいるのか、そして何故自分を署に連れていこうとするのか——その時の心当たりが見つからなかった。

『どうしてですか？』

君は縋り付くような声で訊いた。

『何故——俺が警察に連れていかれるんですか？』

『それは署で話しましょう』

『そんなの納得できない！』

そう言うと君はその場から逃げるように早足で後にしようとした。

しかしその身体を若い刑事がひしっと捕まえた。

『放せ！』

『無駄な抵抗はやめましょうよ。相楽さん』

『——うるさい！』

その瞬間、君は若い刑事を突き飛ばした。

——でも、それが運の尽きだったね……

突き飛ばされた若い刑事は表情を変えると胸から手錠を出し、冷淡な表情を浮かべて君の手に縄をかけた——

『午前七時四五分——公務執行妨害で逮捕する……』

* * *

「ちょっと待って！」

自分が逮捕される場面を見た瞬間、おとなしく映像を見ていた峰雄は急に声を上げ、その声に反応するように篋もちらっと彼を窺うように見た。

「——この映像、どこかおかしくないか？」

「おかしい？」

「ああ、そうだよ！」

峰雄は語気を荒げてリモコンを使って画面を巻き戻し始めた。

記憶が遡るように巻き戻される映像を食い入るように見つめながら峰雄は言葉を続けた。

「この映像には俺が逮捕される場面はあるけど、本当に人を殺めるシーンなんて全然ない。普通なら——逮捕よりも先に事件を起こす方が正しい順序じゃないか!!」

「ほう……」

しかし指摘を受けても篁は冷静な表情を崩さなかった。

「まあ、確かにそう言われれば、そうなるかもしれないな……」

「ほら、やっぱり！」

峰雄はさらにたたみかけるように言い放った。

「どうしてこんな間違った順序なのか説明してくれ！ いや——まさか、あんたたちの都合で映像を編集したんじゃない……」

「馬鹿を言うな」

その言葉に頭にきたのか篁はキッと峰雄を睨み返す。

その迫力に峰雄は思わず言葉をつまらせ反撃さえ出来なかった。

「——はっきり言うよ。この映像を編集したのは君自身だ」

「俺？」

その言葉に峰雄はきょとんとした顔をした

「それどういう事——」

「リモコン貸して下さい」

そう言ったのは黙って事のなりを見ていた直だった。

峰雄が持っていたリモコンを乱暴に奪い返すと、直はリモコンを使ってまた映像を巻き戻しあの逮捕される場面の頭を出した。

問題の映像の頭は記憶をかき消すようなノイズが混じりその前の伊世との幸せな映像とは不自然な編集で繋がっていた。

「この幸せそうなあなたの映像とその後のあなたの逮捕の映像——実はこの不自然に途切れたノイズの間にはあなたのいくつかの記憶が飛んでおります」

峰雄は呆然と何回もリピートされるノイズ混じりの映像を訝しげに眺めながら一言呟いた。

「よく解らない……」

「簡単に言えばあなたには元々この時期の記憶が綺麗さっぱりない——ってことです」

直のその一言に峰雄ははっと顔を上げ震える声で一言叫んだ

「そんな——そんなこと聞いてない！」

その瞬間、峰雄は溢れ出るように今まで溜めていた鬱々とした気持ちをぶつけ始めた。

「あんたはここで俺の記憶を呼び起こそうとしてるんだろ？それなのにここへ来て肝心な殺人事件の記憶だけ呼び起こせないなんて反則だ!! この記憶がはっきりしない限り俺は——生前と同じように冤罪をなすりつけられ結局地獄に堕ちるなんて——絶対に認められない！」

峰雄はまるで堰を切った水のように喋り終わると縋るような目で篋を見たが、彼は急に峰雄から目をそらし一つため息をついた。

「君は俺たちの事を勘違いしている」

「え…？」

「俺たちにとって君の記憶を呼び起こすのは、生前の行いを洗い出して閻魔帳に記入するため。ただそれだけだ」

「あんた、それでも人間か！！」

その瞬間、峰雄はいきり立ち篋を睨み付けた。

「角がないから俺と同じように血が通っているのかと思ったのに——見事に裏切られたよ！」

「俺が人情に流されるとでも思ったか？」

篁は冷めた目で峰雄を見て言った。

「馬鹿らしい。俺にそんなくだらないものが残っていたら閻魔庁では生き残れないよ」

「でも、俺とあんたは仲間じゃ——」

「それ以上甘っちょろい台詞を吐くと承知しないよ」

篁のその一言は峰雄を一瞬で黙らせた。

鬼のような脅しのような怖さはないのだが人を屈服させる力強さを持った声に峰雄は強い恐怖を憶えた。

一瞬、凍り付いたように静かになった取調室。

篁は頭を垂れてうなだれた様子の峰雄を見て深くため息をつきプロジェクターの電源を切ると、青白い灯りが消えて取調室はなお一層暗くなった。

「——今回の審判はこれくらいにしよう……」

熱々のお湯を注ぐと粗挽き豆を巻き込みながらコーヒーが大きな泡が立った。

部屋中に広がる香ばしいコーヒーの香り。

ドリップパックから滴る黒い液体を見つめ円は大きなため息をついた。

『三課』に配属されてはや百年——と言っても人間界と地獄では時の価値観が違う。

篁に聞いてみたら人間界の時間では地獄の百年は『一年』にも満たないと言われた。

つまり、人間界の時間の掟に従えば自分は入庁して一年足らずの新人まっただ中——ということになる。

そんな円が最初『三課』に配属されると聞いたときは、いきなり左遷？——とも思った。

何せ、三課は数ある生前特捜部の中でも一際こぢんまりとしている。

今でさえ円を含めて五人の小所帯——これでよく仕事を消化できるのか不思議なほどだ。

そんな『窓際の三課』に配属されて仕事という仕事は資料室への往復とこのコーヒーを入れる事くらい——

時々そんな自分の現状が哀しくなることがあるけど、これが上司篁の方針なのだから仕方がないと言えは仕方がない。

円は気分を変えるようにカップにコーヒーを注ぎお盆に乗せると、小所帯にしては広すぎる部屋をすたすたと歩いていく。

雑然と資料が散らばった部屋には今のところ円とパソコンに向かう雅しかない。

広い部屋が更に広く静かな部屋が更に不気味に静まりかえっているが、円は慣れた顔で雅にコーヒーを差し出した。

「どうかしたのですか？」

円は雅の様子を見つめながら訊いた。

彼は細い目を更に細めながら相楽峰雄の生前調査票を食い入るように見つめているが、その様子はどこか釈然としない顔だった。

「いや、気のせいだと思うけど……」

雅はいつも通り丁寧な言葉遣いで言った。

「この調査票——いつもよりおかしい感じがしましてねえ……」

「そりゃ、当たり前じゃないですか」

円はお盆で口を隠しぷつと吹き出すように言った。

「だって、空白だらけの記憶喪失の亡者ですよ。おかしいなんて当たり前ですよ」

「——いや、そう言う意味のおかしいじゃないんだけど……」

そう言いよどむと雅は円にその資料を手渡した。

「円さん、この空欄をよく見てごらん」

「え……空欄——」

円はそう言いながら雅に指定された頁を眺めた。

日記の付け忘れのようにぼつぼつと穴が空いた空欄が特に多いその頁。

よくよくじっくり見てみると空欄のあちらこちらに残る不自然な消し忘れの残骸。

肝心の内容はわからないのに、どこか意図的であるかのように荒く消し残されていた

「——変なの」

円は思わずその空欄を見て首を傾げた。

「君にはこれがどういう意味か解るかい？」

「え……？」

雅の質問に円は顔を上げた。

「だから——このぼつぼつ空いてる空欄はもともと何か書かれていたけど誰かに消された——って事ですか？」

「うーん。半分正解かな」

そう言うと雅は優しそうな笑みを浮かべた

「確かにこれは最初何かが記録されていたはずだけど完璧に消されてしまっている。それは正解だよ。でも、この生前調査票って言うのはね第三者が偽装したり小細工したり出来るはずないんだ——」

「でも、現に誰かによって消されてるじゃないですか」

「——そりゃ、そうだけど……」

円の痛い指摘に雅は思わず顔をしかめた。

「でも、何でこんなしょうもない亡者の記憶を偽装しなきゃいけないんだろう」

「しょうもない——って君……」

「だって、そうじゃないですか。この亡者は変わったことと言えば人を一人殺めていることだけで、他は何の取り柄もない普通のおじさんじゃないですか」

「そう言えば、そうだな……」

「向こうの世界で相当の影響があるとか、ものすごく有名人だったとかなら解るけど、一小市民に偽装って必要なのかな？——私にははっきり言って必要ないと思う」

円の言う事は乱暴ではあるがしつかり的を射ていた。

そんな彼女の言葉に雅は思わず感心したようなため息を漏らし、降参したように笑った。

「なかなか鋭いね、円さん」

そう言うと雅はまたしかめっ面をして資料とにらめっこを始めた。

「でも、じゃあ何のためにこの記録は消されているのか——ますます解らなくなったな」

「——そんなの簡単だ」

背後から響いたその声に雅も円は一齐に振り返った。

そこには審理を終えた篁が立っていた。

「簡単——と申しますと？」

「雅だって知ってるだろう。調査票の記録は誰一人小細工できないって事くらい…」

「でも！ 本当に意図的に消されてるんですよ！」

円はムキになるように、篁に資料を突きだした。

「篁さんも見れば納得するわ！ これは閻魔庁始まって以来の大事件なんだから！」

「円さん、それは言い過ぎだよ……」

雅は妙に熱くなる円をたしなめるように言った。

「でも、こんな事が発覚したら閻魔庁の信用なんてがた落ちですよ！ これは絶対に何者かによる偽装工作に間違いない——」

「お前たち……こんな事で大騒ぎしてたのか？」

篁はパラパラと資料を眺めながら半ば呆れに似たため息をついた。

「この記録が消されているのは解ったけど、外部の偽装工作とは到底思えんな」

「え……？」

「普通、偽装するならもっと丁寧に偽装するはずだと思うけど？」

「それは……そうですね」

雅は妙に納得した様子で頷いた。

「じゃあ、何でこの記録は中途半端に消去されてるんですか？」

円は最後に嘸みつくかのように篁に訊いた。

「これは彼の記憶の記録。普通なら記入漏れ一つなく記録が付けられるはずの資料だ」

そう言うと篁は資料の頁をパラパラとめくりながら資料を見つめた。

「でも、この資料は彼が記憶喪失になれば記入漏れが生じてしまうし、彼が嘘の記憶を信じ込めばそれが本当になる事だってある」

「え……？」

その言葉に雅も円も言葉を失った。

「人間と言う生き物は弱い存在でね……周りから間違っただけをああだこうだと間違っただけを言われれば、それが本当だと信じ込んでしまう。それは記憶だって同じ事だ——」

「ちょっと、待ってください！」

円は篁の言葉を遮るように言った。

「つまり、篁さんはこの資料の空白は亡者自身が作り出したって言いたいんですか！？」

その問いに、篁の資料をめくる手がピタッと止まった。

「そうなるかもしれない……」

「そうなるかもって——そんなことアリですか！」

円はまたムキになるように篁に食いかかった。

「私、入庁試験でいろいろ勉強しましたが、人間が自分の記憶を書き換えられるなんて参考書に一行も載ってませんでしたよ！」

「俺は人間だ。お前らよりかは彼らのことは解っているはずだ」

そう言うと篁は資料をぱたんと閉じた

「ただ、俺もあの亡者が自分自身で記憶を書き換えたか——信じがたい部分があるのは事実だ」

「でもさ——」

「——円！」

篁はすかさず反論しようとした円の口を封じるように強い視線で彼女を射抜いた。

下手な鬼より鬼気迫る彼の表情に円は反論の言葉を飲み込むしかなかったのだ。

「すみません。差し出がましいことを……」

「お前、人間界に出張してこい」

「——え？」

思わぬ展開だった。

円はいきなり舞い込んだ大きな仕事に眉をひそめながら篁を見つめた

「今から——ですか？」

「そうだ」

混乱する円をよそに篁はいつもと同じように簡潔に仕事を伝え、そのまま部屋を出ようと足を進めたのだ

「とりあえず今、涼に証拠集めに向こうに行かせているけど——あいつだけじゃな—んか、物足りないからお前も応援に行ってくれ」

「え——ちょっと…待ってっててば！」

そんな篁を追いかけるように円は更なる説明を求めたが、彼は足早に事務所を出て行ってしまふ。

記憶のない事件の証拠集めという途方もない仕事をいきなり押しつけられて、円は呆然と立ちつくすしかできなかった。

「なるほどね、確かに『何者か』に記録を消されているな……」

司の低いトーンの声がだだっ広い資料室に響き渡る。虫眼鏡を片手に彼は資料の空白とにらめっこをしていた。

「最初見たときは、俺も驚いたよ……」

篁はカウンターに腰掛けて一つため息をついた。

「記録がこんな荒っぽく消されているなんて、偽装にしては幼稚だとは思うんだが…」

「それは絶対にあり得ない」

「だろうな……」

司の自信満々の答えに篁は相づちを打つしかなかった。

「でも、珍しいな」

そう言うと司は虫眼鏡を机に置くと篁の顔をちらりと見た。

「忙しい特別審議官の君がこんなつまらないことを訊くためにわざわざこんな所に出向くなんてさあ……」

「まさか、俺の訊きたいことはもっと別のことだ」

篁はそう言うと急に真面目な顔をして司の顔を見た。

「俺の仮説ではなこの記憶の空白はこの亡者自身が作り出した——つまり、亡者自身が何らかの形で圧力をかけられて自分の記憶を書き換えてしまったと思うのだが……」

「その仮説に自信がないって言うわけだね」

本心を見抜かれたような司の口ぶりに篁は不機嫌に黙り込んだ

「——でも、さすが閻魔王に見初められただけはあるね。なかなかいい線をついた仮説だと思うよ」

「そうか？」

「君が一番心配しているのはこの記録を亡者自身が書き換えた実例があるのかということだろ」

「ああ……」

「僕も2千年近く膨大な資料を整理してきたけど、そういう事例は珍しいと言えば珍しいけど、ないことはないよ」

そう言うと司は近くに無造作に置かれた別の資料を取り上げた。

「この記録は一年前にこちらに来た享年19歳の少女のものだけど——確か生前は親の行き過ぎの虐待にだんだん精神的におかしくなって、そのまま自殺した少女の生前調査票さ」

司はそう言うと篁に資料を手渡した。

その亡者の資料を手にとった篁はぱらっと頁をめくると、そこは黒いペンでぐしゃぐしゃに塗りつぶされたようになっていた。

「——こりゃ酷いな……」

まるでパニックを起こしていた頭の乱れそのまま表すようなその黒い頁。

篁にはそれだけでその少女の心理状態が手に取るように解った

「まあ、彼女は『自殺』という大罪を犯したわけだから、そんな心理状態を裁かれることなく地獄逝きになったけど——極限の心理状態に曝された人間は自分の記憶を忘れ書き換えるのは可能と言えれば可能だね」

「極限の心理状態——ね」

そう呟くと篁はその痛々しい資料をぱたりと閉じ司に手渡した。

「君が今回担当することになった亡者は確か記憶喪失だったね」

「ああ……」

「君は一通り資料に目を通してあるから解るだろうけど、この資料の消え方は尋常じゃない。それに——どうも空白は1981年の11月から12月にかけて集中している……」

「そう、それは彼が人を殺めたとされる期間にしっかり重なっているんだ」

そう言うと篁は深くため息をつきぼんやりとあることを思案する。その目には徐々に彼の記憶喪失の真相が見え始めていた。

混乱している間に警察に捕まり、そのまま拷問のような取り調べ、そして繰り返される裁判——

彼はそんな外部からの激しいストレスを受け尋常ではない心理状態に陥り次第に肝心の記憶を失っていったのかもしれない。

もしそうだとしたら彼の記憶はもう二度と戻ることはないだろう。

そして、彼の審判は肝心の人を殺めた記憶がないまま進んでいく——そのことを篁は強い危機感を感じていた。

「——随分厄介な亡者に当たったね」

司はそう言うと篁に相楽峰雄の資料を返した。

「でも、どのように彼の空白を埋めるか——今回の君の審判は見物と言えれば見物だね」

「ギャラリーは気楽なもんだよ……」

そう言うと篁はぶすっとふて腐れた。

「でも本当はこのまま人を殺めたと言う既成事実だけで裁いていけば楽だろうけど、それは人間界の裁判と大して変わらない。俺は——冥界にしか出来ない裁きをやるだけだよ」

篁はふと相楽峰雄の資料の表紙を眺めた。

生前調査票 1981年版——

黒地に金色で標された表紙をぼんやりと眺めながら篁は司に訊いた。

「資料室って通常は亡者の記録を何年間くらい保管するものなのか？」

「そうだね……」

司は考え込むように天井を見上げた。

「歴史上重要人物でない場合は15年間保管が原則になってるけど、最近は整理が追いつかない状況だから25年間分はたまってると思うけど——」

「25年か——」

篁はため息をつくともう一度表紙を眺めまた思案をめぐらせた。

白でも黒でもない灰色の記憶の亡者。

無実か否かなどは関係なく篁は彼の真実を明らかにしたいと強く思った。

間違いなく鍵は26年前のあの時に落ちている。

それを拾えるのは、間違いなく俺だけだ——

11 新たな手がかりを求めて

赤茶けた錆に覆われた重々しいドアを押して外に出ると射すような日光が円の目に入った。

東京六本木。

目の前には首が痛くなるくらい巨大なビルがいくつも建ち並び、その最下部を人が行き交い車が走り抜ける――

その華やかな街の片隅に忘れ去られたように立ちつくす雑居ビルの非常口が冥界の入り口だなんて街行く人間たちは知るはずがない。

じめじめとしたさび付いた非常階段を下りながら、円は容赦なく襲いかかる人間界の光に目を細めた。

――また『昼間』だ……

夜しかない冥界で生まれ育った円にとって人間界の『昼間』の日差しはいつ見ても慣れないものだった。

涼は人間界の『昼間』を明るくて楽しい人間たちの象徴だとか格好つけて言っているけど、ただまぶしくて迷惑なだけじゃない。

――でも逆にこの明るい空があるから亡者たちは冥界を陰湿な場所だって思うのかも知れない……

階段を下りて裏通りに出ると円は『六本木』という場所にまたに新しい高層ビルが建っていることに気が付いた。

――そう言えばこの前出張も同じ事を思ったような気がする。

こんなに高層ビルばかり建てたら大好きな空が埋まっちゃうよ？ そんなことさえ気付かないの？――本当に人間って果てしなく愚かなんだね……

「おい。円」

ぽかーんと大嫌いな眩い空ばかり眺めていた円を背後から不意に声をかける者がいる。

相手はわかっている——というか、冥界の民である円が見えるのは彼しかいないはずだ。

「お前、なにぼけーっと空ばかり見てるんだ？」

外回りで人間界によく出入りしている涼は物珍しそうに上を見上げる円を訝しげに見た。

「新しいのが建ってる……」

「んあ……？」

そう言われて涼も彼女が見上げる先を見たが、彼は平然とした表情で理解に苦しむ円に一言教えてあげた。

「あれ、東京ミッドタウンだよ」

「え？ みっど……た…うん？」

「たしかつい最近だっけな～。今人間たちの中で一番流行ってる場所だっけさ」

「でもこの前は違う名前のビルが流行ってるって言ってたじゃん」

「ああ、六本木ヒルズのこと？」

「そう！ その何とかひるずだよ！」

「あれはその右奥にあるデカイやつ。いい加減憶えろよ。田舎者みたいだぞ」

「——冥界は田舎じゃありません！」

円はそう言うとぷうっとふくれて涼から顔をそらした。

相変わらずな彼女の態度に涼は呆れと不満を混ぜたような口調で一言言った。

「しかし、篁の奴……なんでコイツを援護要員に送ってきたかな～。こいつが来るなら俺一人でやった方が絶対仕事は速く片づくのに……」

「そうかしら？ 篁さん涼だけじゃ不安だから私を送り込んだのよ」

「何!? あいつそんなこと言いやがったのか！」

円のその言葉に涼は激しく憤った様子だった。

「まったく、あいつは俺の力量を思いっきり間違ってるわ。こんなぺえぺえの新人に手出しされるほど俺は落ちぶれてなんか——」

「——で、少しは証拠集まってるの？」

「——!!」

その一言に涼は思わず絶句する。

あ、これはもしや何も収穫なしかしら……？ 彼の態度を見て円は得意げに笑った。

「やっぱり箕さんの言ってる事って正し〜い」

見透かしたような円の笑みを見て涼は苦々しく唸るしか他ならなかった。

どうしてこんな奴に見下されるのだろう——そう思うだけで腑が煮えくりかえりそうだった。

「でも安心してよ。私が来たからにはどんな小さい証拠だって逃さないわよ！」

「——26年前の事件だぞ。お前が思ってるほど甘かないわ……」

そうぶつぶつ文句を言う涼を尻目に、円の足は軽く人のごった返す表通りへと向かっていた。

「ほら、早く行こうよ。涼！」

「って、勝手に行くなよ！」

——まったくあいつは考えが甘すぎる！

そんな円への不満を胸の奥でかみ砕きながら、涼は不機嫌そうな顔をして先に行く彼女を追いかける。

相楽峰雄の死からちょうど一四日後の午後だった。

人間界の殺人事件の『時効』は一五年だという。

彼らの法律では一五年でその罪を問うのを諦め、そしてその罪を許してしまうことになるらしい。

だけど、冥界に『時効』という都合のいい言葉などない。

その罪が二〇年前だろうと三〇年前だろうと五〇年前だろうと、犯した罪は決して帳消しになることなく閻魔王の元へと届くのが冥界の常識。

それを考えると十五年そこそこで罪を諦めてしまう人間の法律はとんでもなく甘いように円は思えてしょうがない。

だけど——それにはそれなりの理由があることも閻魔庁に入庁して知った事だ。

自分たち獄卒には十五年なんて瞬きするようなくらいの一瞬に過ぎないけど、人間の時間にしてみれば十五年という月日はとても長いらしい。

そして、その間信じられないことに人間は様々なものを無くして生きていくらしいのだ。

例えば罪の記憶であり、怒りや哀しみであり、そして事件の証拠も時と次第に消えていく。

閻魔庁みたいにすべての罪と証拠が集まるような便利な仕組みは人間たちにはない。

だから十五年して罪が解決しなければそこで罪を不問にしてしまう。まったく、諦めが早いったらありゃしない……

話は変わるが、現在2007年9月27日。相楽峰雄が大きな罪を犯して26年目に入った今日、当たり前だが証拠はすぐ側に落ちているような状況ではない。

否、もはや彼の起こしたはずの26年前の事件などとっくの昔に風化して人々の記憶からも消え去っているに違いない。

人間界の恐ろしいほど早い時間の流れは人々から記録も記憶も何もかも消していく

——その状況で、私たちは人間界で言うと大昔の事件を掘り起こそうとしてるなんて……

「本当に証拠なんて見つかるのかしら？」

やっと相楽峰雄の自宅のある団地に着いたとたん、円は顔を俯けて一言走漏らした

「ん？もう泣き言か？」

涼はにやにやと馬鹿にするような笑みを浮かべそう聞く。

それに対し円は顔から火が出るように真っ赤にさせて言い返した。

「うるさいわね。そう言う意味じゃありません！」

「じゃあなんだよ。その自信のなさは」

「だから——あれよ。人間の世界で言えば二六年前って大昔でしょ。それを今から慌てて証拠探しだなんて……間に合うのかなって思っただけよ」

「証拠なあ……」

涼はそう言うと思わず天を仰いだ

「それだけ言ったらもうこの世から消えてなくなってるかもな」

「ほら、やっぱり！」

そう言うとき円は涼の前に回り込み更に畳みかけるように言った。

「涼だってそう思うでしょ。今更証拠集めなんてどう考えたって無理！　だって消えてなくなってるんだもん！」

「馬鹿。それじゃあ一五年で諦める人間とそう変わらないぞ」

「でもさ——」

「いいか、円。決定的な証拠は消滅してるかもしれないけど、それを掴むヒントくらいは手に入るかも知れない。俺たちはそう言う心構えでこの忘れ去られた罪を洗い出してるんだ！」

「——」

涼の真っ当な正論に円はそれ以上反論できなかった。

悔しそうに顔を俯げる彼女を涼は横目で見て最後に一つ付け加えた。

「別に決定的な証拠に固執することはないと思うよ。ただ——本の小さいヒントが状況を打破することだってざらにある話さ」

「そうかしら？」

「そう。それが閻魔庁ってところなんだから——」

涼がそう話を進めようとしたその時だった。

団地の階段から女が一人外に飛び出した。

口に小さく紅を差し服も至って地味。端から見ればどこにでもいるような奥様と言ったところだ。

だが、その女が目に入ったとたん、涼は円とのつまらない話をやめ彼女を興味深そうにじっと眺めた

「ねえ、どうしたの？」

「あれ、おっさんの嫁だよ」

「え?! あの人が獄中結婚までして亡者とくっついた……伊世さん？」

涼のその言葉に円も目を丸くして彼女の後ろ姿を追いかけた

意外ね——そんなことをするほど情愛が深いようにちっとも見えないじゃん。

一見すればそこら辺に掃いて捨てるほどいるおばちゃんにしか見えないじゃない——

「ところで、彼女何処へ行くんだ？」

涼はそう言うと彼女の後ろをゆっくりと追い始めた。

「何処って、夕飯の買い物なんじゃない？」

そんな彼の後を追いながら円はいつものように口答えした。

「馬鹿だな。あのおばさんは買い物なんかじゃ口紅付けないんだよ」

「そうなの？」

「そ、俺が見てる限りでは口紅付けるときは特別な……」

そう言いかけた瞬間、涼は急に顔色を変え彼女を追う足を速めた。

「どうしたの？」

そんな彼に歩調を合わせながら円は一つ聞いた

「あのおばさん、明らかに女の顔だった……」

「そんなの当たり前じゃない……」

「違う！ 彼女は一人の女として誰かに会うつもりなんだよ！」

涼にそう言われて相楽伊世の後を付け始めたのはいいものの、円は涼がどうしてそこまでこだわるのかよく解らないでいた。

ただ少し口に紅をさしてただけだって言うのに、あれほどムキになるなんて信じられない。

第一、誰と会うためにあのおばさんはおめかししたの？

「一人の女」と言うことは男と言うことになるのだろうか——でも旦那が亡くなってそんな時も絶ってないのに……

その間相楽伊世は電車を乗り継ぎ、家から大分離れた分譲一戸建てが並ぶニュータウンへと足を踏み入れた。

大分しっかりとした足取りでどこかに吸い寄せるように歩く彼女の後をずっと追っていくと、やがて彼女はある場所で足を止めた。

何かを秘めた輝きを放つその瞳でじっとその一軒家を見上げた後、迷うこともなくインターホンを1回押す。

その家の表札は「吾妻」——その名前を見て円はギョツとした

「えええ！ あのおばさんが会いに行った相手って……」

「昔付き合っていた男——って言うことだな」

涼はため息を混じりにそう言うと、一段と鋭い視線で彼女を見た。

「何それ！ 旦那が死んだとたんに昔付き合っていた男とヨリが戻り始めちゃったって言うの？ そんなの信じられない！」

円は怒りに近い表情を見せると不機嫌そうにそう唸った。

信じられないのも仕方がない。人間の女とはそこまでふしだらなのかと愕然となるような気分だ。

まだ夫である相楽峰雄が亡くなって2週間強だ。

普通なら喪に服しているはずの時期なのに、こんなこと——あってたまらない。

「待てよ。まだそう言う関係って決まったワケじゃないだろ」

「何言ってるの。さっき一人の女としてって言ったのは涼じゃない」

「そりゃ、まあ……そうだけだな」

円のその切り返しに思わず言葉につまった涼だが、すぐに開き直ったように一言言い放った。

「とにかく、どういう関係か見届けるのが俺たちの仕事だ。わかったな」

人の目からすると生暖かい風が扉を押し開けたように見えるのだろうか。

自分たち冥界の民は今を生きる人間には絶対に見えない存在だから家の中に入ろうが何をしようが本人たちには気付かないのだ

涼と円は家の中にはいると二人が卓上を付き合わせて座る和室を入り口からじっと覗いた。

雰囲気は特にいい感じというワケではない。

二人の顔には緊張の色が強いような感じがするし、どこことなく重々しい空気がどんよりと流れているようだった。

「ねえ、本当にこの二人ヨリが戻った——？」

円は訝しげな顔をして涼に再度迫ろうとしたが、彼は人差し指を立てて彼女の声を制止させる

それに対し円は彼らには私たちは見えないよと涼に言い返そうかと思ったが、それを阻んだのは急に耳に入ってきた女のすすり泣く声だった。

「ごめんなさい……」

正座する体を最大に硬直させ相楽伊世はか細い声で一言呟いた。

「この前のあなたのお誘いととても嬉しかった。だけど——今は主人が亡くなって間もないし、私だけこんな楽しい思いしていいのか——わからないの……」

「何を言ってるんだい伊世さん……いや、伊世」

卓上の向こうの男は強い口調で彼女の名を呼ぶ。

ひょろりとした白髪交じりの男。着衣そして整髪から社会的地位も高そうな貫禄が漲っている

。

——この男が、吾妻俊幸。相楽伊世が一時期付き合っていたという峰雄の同僚

「やめて下さい」

そんな吾妻の強い言葉を振り払うように伊世は顔を背けた。

「もう私たちはあの頃の私たちじゃないのよ……それだけはわかって。お願い……」

「伊世……」

吾妻は愛おしげにそう呟くとまた沈黙する。

また二人の間に流れ出した重々しい空気を感じながら円は再び首を傾げた。

「全く話が見えないわ」

「だから、黙って見てろって……」

「だって……これだけじゃ関係なんて見えるわけ——」

円がいつもと同じように文句をたらたら言い始めようとしたその時、吾妻の小さく低く震えた声が沈黙に凍り付いた座敷を切り裂いた

「君は相楽先輩と一緒にあって幸せだったかい？」

「え——？」

「だから——先輩と結婚して後悔なんかしてない……よね？」

その一言に伊世は不思議そうな顔をして吾妻の顔を見る

彼の顔は硬直しきっておりまともに彼女の顔さえ見られないほどだった。

「幸せ……とまではいかないな」

伊世はその問いを苦笑で返した。

「でも、後悔なんかはしてないよ。あの人の人生に付きあえられたことはそれはそれで満足してる」

「そっか……」

吾妻は伊世の複雑な答えを聞いてさらに顔を強張らせ背を縮こませた。

それは明らかにひょろりと高い体が先ほどよりもぐんと小さく見えたほどだった

「伊世。俺は……君に謝らないといけない」

「何？ 急に……」

「それは——」

無垢な伊世のその言葉にまたしても吾妻の言葉が止まる

一つの言葉を紡ぐのにいつもの何倍もの苦労を滲ませるその顔の裏には何かがある——それを感じさせるような彼の態度だった。

「俺は君が思っているほど素晴らしい男なんかじゃない。本当は醜いくらい嫉妬に燃えていた…汚い男だった。だから——あの時先輩と君がくっついたのを知って……俺は怒り狂った。君たちの不幸さえ願ったほどに……」

「吾妻君……」

「ごめん、こんな事今言う事じゃないな——」

吾妻はそういうと苦し紛れな笑みを浮かべた

「あんなに嫉妬に燃えていたのは昔の話。今は君の主人があんな人生を送ってしまったことに強い同情……を憶えてる。そして今はあんな事を思っていた自分が本当に醜く感じて……」

吾妻の言葉は終始ぼそぼそと暗く呟くような声で、肝心の最後は弱々しく口ごもらせて聞こえなくなった。

齒に何か物がつまったような口ぶりは端から聞いているこちらでさえ苛つきを憶えるくらいだ

った。

「吾妻君が謝る話じゃないよ」

そんな彼を見かねて伊世は苦笑しながら言った。

「これがあの人の人生で、それに最後まで付き添ったのが私の人生。あなたが後悔するなんておかしいわ」

「でも——」

「あなたが私たちのことを恨んでいたのは昔の話。もう…それはそれでいいじゃない」

「——」

伊世のその言葉に吾妻はなにも言い返せないようだった。

だが遠くから覗くその表情は何故か苦渋に満ち、まともに伊世の目さえ見られない。
変だな——

そんな彼の横顔を見ながら、円は小さな違和感を持った。

「——行くぞ」

そんな円の横で涼は話の途中でいきなり席を立った。

「え……まだ途中だよ」

「もうこれ以上話は進まないよ」

涼は言葉少なにそう言うと足早に吾妻宅から出て行ってしまった。

円はそんな涼に小さな不満を持ちながらも、その後を追うしか出来なかった。

「ねえ、涼……涼ったら！」

人影のいない寂しい下町の路地を先へ先へと進む涼。

そんな彼を早足で追いかけてながら円は必死に呼びかけ続けた。

「何で話の途中で外に出ちゃったのよ——って、あんた聞いているの!？」

「うるせえな。ちゃんと聞こえてるよ」

「それなら理由を言って！ このままじゃ私納得しないんだからッ!!」

「——」

その言葉に早足だった彼の歩みがピタッと止まる。

そして短い沈黙を置いてから彼はため息混じりに言った。

「何時間粘ってもあのオッサンは本当のことなんて奥さんには言わないよ」

「どうして？」

「どうしてかはわからねえな」

涼の拍子抜けしそうな白旗宣言に円は思わずずっこけた。

「何よそれ……マジメに考えてんの？」

「マジメだよ。真面目に考えてるからわからないんだ」

そう言うと涼はもう一つ深くため息をつくと睨み付ける円からふっと目をそらした。

そして、ぼんやりと遠くの町並みを眺めながら一言一言噛みしめるように再び言った。

「あのオッサンは奥さんに言えないような大きな秘密を持っている。それは間違いないよ。だけど……その秘密がどの程度なのか。相楽峰雄の一生に関わるような大きな証言なのか——今はまだわからない」

「そんなあ」

その一言に円は間の抜けた声を出した。

「じゃあ、わざわざ人間界まで来ても無駄骨だったってこと？」

「馬鹿。だからすぐに諦めるなってさっき言っただろ」

涼はその一言にムツとした様子で円を睨み付けた

「いいか。俺たちは今日証拠を掴むためにやってきたんじゃないんだぞ。証拠になるかも知れない重要なヒントだけでも拾ったのはいい収穫の方だ」

「収穫ねえ……まだ吾妻俊幸の秘密もなにもわからないのに」

「それはお前の仕事だろ」

「——え？」

それは寝耳に水の一言だった。何も理解できない円は目をぱちくりしたままにやつく涼を見た。

「それどういう事？」

「そんなこともわかんねえのか。吾妻の秘密を暴くのは閻魔庁に帰って資料をひっくり返すお前の役目」

そういうと涼は鋭く伸びた爪で円を指差す。その憎たらしい笑みは後輩の円からみても癪に障るものだった。

「そんなの聞いてない！」

ぷうっと頬を膨らまして円は涼を睨み返す。

しかし涼はそんな彼女を軽く無視するようにまた歩みを進めだした。

「じゃ、そう言うことだから後は篋によろしくね～」

「って、待ちなさいよ！ こんな重要な仕事を新人の私に押しつける気!!」

「だって俺これから新たな亡者の護送任務があるもん。えっと確か今日は総合家電メーカーの名誉会長が老衰で死ぬ予定だったっけな？ いわゆるブルジョアって奴はわがままだからいやなんだよなあ……」

「そんなことで逃げれると思ってるの」

「でもお前はこれから閻魔庁帰ってもどうせ暇だろ」

「そりゃ、まあ……」

「じゃ、そういうこと。はい、解散！」

涼はそう言うと円の必死の制止を振り切り逃げるような早足でそそくさとその場を去っていった。

重大任務を押しつけられその場に取り残された円は路地に消える彼の姿を呆然と見送った後、何処にも向けられない怒りがカッと頭にきて顔が真っ赤に染まった。

そして狭くて低い東京の空に彼女はその怒りの全てをぶつけた。

「涼のバカーあッ!!」

12 弱い心

『いい加減にきなさいよ！！ 相楽さん！』

若い刑事は苛立ったように机をドンと叩いた。

煙草の煙がもやもやと立ち籠める手狭な取調室。

峰雄の目の前に立ちはだかるのは威勢のいい若い刑事に、それを後ろで傍観する煙草をくわえた壮年の刑事――

空気の停滞した取調室で彼らは揃って峰雄を威圧的に睨み付けていた。

『中村ヨネさんが何者かに殺された11月26日にあなたの姿が彼女宅で目撃されているんだぞ！』

『だから、俺はそんなばあさん知らないって言ってるだろう！』

『黙れ！！ 口答えをするんじゃない！』

若い刑事は威嚇するような声を上げまた乱暴に机を叩いた。

『そう言って居直ろうと思ってるのだろうが、はっきり言って無駄だ！ 俺たちはしっかりと証拠を掴んでいるんだ！』

『証拠？』

その言葉を聞いて峰雄は思わず鼻で笑った。

『馬鹿らしい……そのばあさんなんて見たことも聞いたこともないのに、証拠だって？ 笑っちゃうよ』

『へえ……随分余裕だな』

『当たり前だ！ 俺はやってないって言う自信があるんだ！』

『ほう……』

そう言うと、若い刑事は見下すように峰雄を見つめた。

——不思議だった。

いわれのない罪をなすりつけているはずの警察が自分より確実に優位に見えたのだ。

『相楽さん。言っておくけど警察は嘘なんかつきませんよ。何せ動きようもない証拠が現場に落ちていたんだから』

『え……？』

『あんた、最近どこかで自分の持ち物を落とさなかったか？——例えば、小銭入れとか……』

その言葉に峰雄はハッと息を呑む。彼にはその心当たりがぴたりとあったのだ。

『やっぱり……』

若い刑事は勝ち誇ったような笑みを浮かべビニール袋の中に入った一つの証拠物件を指し示した。

それは黒革の小銭入れだった。

『これが中村さん宅の居間に落ちていてね——最初は部屋を荒らされたときに床に落ちた中村さんの小銭入れだと思ったんだけど、一人暮らしの彼女なのにこの小銭入れはどう見ても男物なんだよね……』

刑事のその言葉と突きつけられた自分の小銭入れに峰雄の顔がどんどん青ざめていく。

——そんな、信じられない……

峰雄は嫌な予感を振り払うように顔を横に振るう。

そんなのどう考えたっておかしいじゃないか。行ったことも見たこともないばあさんの家にこの小銭入れがあるなんて——

『それでね、我々は考えましてね。この謎の小銭入れこそが犯人に繋がる物証だってね。それでこの小銭入れに付いた指紋を検出してみると——ずばり、あんたに突き当たったってワケさ』

決定的証拠に峰雄は反論の言葉さえ出てこなかった。

もちろん、俺は殺^やっていない。殺っていないのは確実に言えるのだけど、この証拠物件一つでうまく丸め込まれている。

その逆らえそうにない流れが徐々に強くなり自分を押し流そうとしていた。

『そんなの嘘だ……』

しばらくの沈黙の後、峰雄は声を震わせながら言った。

『この小銭入れが現場に落ちているなんて信じられない。でっち上げに決まってる!!』

『いい加減にして下さいよ』

若い刑事はため息を混じらせながら卑屈に笑った。

『さっきも言っただろ。警察は嘘などつかないって——むしろ、嘘をついているのはあんたの方じゃ?』

『うるさい! その手には乗らないぞ!』

そう言うと峰雄は刑事を睨み付け声を荒げた。

『あんたたちは俺を犯人に仕立て上げようとしているんだろ。そのためにこの小銭入れを引っ張り出して俺を脅しているんだ——』

『あまり警察を愚弄しないで欲しいな!』

峰雄の言葉が火を付けたのか、若い刑事はまた強く机を叩き峰雄を一瞬で黙らせた。

『いいですか。あんたがいくら自分の罪を否定しようがかまわないが、この証拠がある限りそれは虚しい遠吠えに過ぎない!』

『でも……!』

『それに、これ以上我々に楯突くのもあんたにとって後々不利に働くと思うけど？』

『え……？』

そう言うと峰雄はきょとんとした表情で刑事を見た。

刑事は口元に邪悪な笑みを浮かべながら恐るべき言葉を言った。

『この証拠がある限りあんたの罪はほぼ確定的と言ってもいいだろう。それ以上にあんたが罪を認めず我々に逆らうのは後々の裁判であんたに不利に働くって事だよ』

後々の裁判——その言葉を聞いて峰雄は背筋を凍り付かせた。

もうそんなところまで話が進んでいることを思い知らされた瞬間、殺ってないと確信している自分の信念が一気にぐらつき始めた。

『そんな……裁判だなんて——』

峰雄はかすれそうなほどの小さな声で一つ呟いた。

空気の淀んだ取調室。

長い間そこに監禁されているともう普通の思考回路なんてできなかった。

『どうですか、相楽さん』

揺れ始めた峰雄の心を見抜いたかのように、今まで傍観していた壮年の刑事がしわしわの顔をにゅっと覗かせた。

『これだけの証拠が揃っているんですからそろそろ罪を認めましょうよ』

『——』

峰雄は唇を噛んだまま顔を横に振った。

『ダメですか……』

壮年の刑事はため息混じりに漏らした。

『でも、ここであなたが罪を認めなくても、あなたは強盗殺人の罪で逮捕されるのは間違いありませんよ。それでもいいんですか？』

『やってもいない罪を認めるなんて……そんなことあり得ない』

『でも、解釈を少し変えてみませんか？』

『——え？』

そう言うと峰雄はハッと顔を上げた。

縋るように見上げた壮年の刑事は悪魔のような笑みを浮かべていた。

『あなたがやっていないと信じているなら我々はそうでも構いませんよ。でも、それを貫くとなればあなたはこれから相当苦難の道を歩まなければいけないことになりますね』

その意味深な言葉に峰雄は思わず眉をひそめた。

壮年の刑事は話をあまり理解できていない峰雄の表情を見て、さらに恐るべき言葉を突きつけた。

『結論から言いましょう。あなたは罪を素直に認めるべきです』

『え——!!』

その言葉に峰雄は一瞬言葉を失った。その言葉が信じられなくて仕方がなかったのだ。

『どうして……？ 何故そう言えるんだ？』

『その方があなたにとって楽な道だからですよ』

壮年の刑事は表情を変えず淡々と答えだした。

『考えてみて下さい。あなたがこのまま罪を認めなかったら、こんな苦しくてつらい尋問を延々続けなければならないのですよ。でも、あえて罪を認めて自白するのなら私たちもそれなりの態度であなたに接するつもりです』

壮年の刑事の言葉はまさに甘い飴。

ちらちらとそれを見せつけながら自分から自白を引き出そうとする聞き方だった

でもそうとはわかってはいても、苦しい尋問と異常な心理状態に曝された峰雄にはその小さな飴がとても魅力的にさえ見えた。

でも、やってもない罪を認めるなんてもっと嫌だ——そう思い、峰雄は思わず顔を横に振った。

『ならば、これを認めればここから出られると言ったらどうですか？』

その更に甘い飴の言葉に峰雄の顔が一瞬ふっと和らぐ。

思っちゃいけないとは解っているが次に差し出された強烈な飴が欲しくてたまらなかった。

『それ…本当ですか？』

困惑した表情を浮かべながら峰雄は壮年の刑事に聞いた。

『警察は嘘はつかないって言ったでしょう』

壮年の刑事はにやっと笑った。

『あなたがここで罪を認めればすぐにでもここから出してあげますよ。だから一つ認めてみてはいかがですか？』

最後の念押しのように突き出された飴に今すぐにでも飛びつきたい——

その裏には深い罠であるかもしれないけど、もうまともなことなど考えることさえできなかった。

『殺ったって言え！！』

若い刑事も最後の最後に恫喝のような声を上げて峰雄の自白を促す。

飴と鞭——

二人の刑事の絶妙のコンビネーションが峰雄の心理を更に追いつめていく。

もう人を殺めたとか殺めてないとかどうでもよかった。

早くこの苦しさから逃れられるのなら何をやってもいいとさえ思った。

『——すみません……』

峰雄は身体と声を震わせながら弱く唸った。

『私が……やりました』

* * *

「もうやめてくれッ！！」

スクリーンに広がる記憶の中の苦い尋問に峰雄は思わず悲鳴に似た声を上げた。

頭を抱え込み蹲るその身体は何かに取り憑かれたように震えていた。

「やっぱり、思い出したくもないか……」

筐はため息混じりにそう呟くとリモコンでプロジェクターの映像を止めた。

目を覆うような悲痛な尋問のシーンがいきなり暗転し、そしてスクリーンは闇と静寂に包まれた。

「思った通りだ。これがは君の心の傷の本元だったわけだな」

そう言う筐の後ろで、直は取調室の電気をつけた

やっとうす明かりがついた部屋で峰雄はただ身体を震わせぼろぼろと涙をこぼした。

「何で俺あんなところで罪を認めてしまったんだ？ どうしてワケも解らず吐いてしまったんだ

？ もしかしたらそこでずっと否定し続けていたらもっと違う結末があったかもしれないのに！」

潤みきった声ただ後悔の念ばかり吐き続ける峰雄の姿を見て、篁はただ呆れるばかりだった。

「死んだ後に生きていた時のことを後悔したって仕方ないだろ」

「でも、違うんだ！　すぐに出してくれるなんてとんでもない嘘だったよ。あれからワケも解らないまま自白を強要されて、ワケの解らないまま知らない罪が確定して——出してくれるどころか冷たいブタ箱に放り込まれたままだった！」

峰雄は子供のような地団駄を踏み、ただただ悔しがった。

「悔しいけど俺は警察にまんまと騙されたよ！　あそこで毅然と自白を拒否していればと思うと——もっと、違う人生があったんじゃないかと……」

「でも、それはただの結果論だろ」

篁の突き放すような冷たい言葉に峰雄はハッと我に返った。

怯えた眼でちらっと彼の顔を見ると彼はいつかのえげつない刑事たちとは違った哀れみの表情を浮かべて峰雄を見ていた。

「ある間違いを犯し思わぬ罪を被ったことも君の人生の一部。それを否定したら君が生きた人生そのものを否定しているのと同じだ」

「でも……」

「君はもう死んだんだ。あの時こうだったら——って言う議論ほど空虚なものはない」

篁の的確な指摘に峰雄は返す言葉さえ見当たらなかった。

確かにその通り——なんだけど、どうしても後味の悪い後悔は心の中にしつこく残っていた。

でも、彼の言葉以上の反論が見当たらず峰雄はピタッと押し黙るしかなかった。

「——でも、この状況じゃ映像を使った審理出来そうにありませんね」

直はノートパソコンの前に座るとそんな様子 of 峰雄をじろりと見下ろすと一言そう言う。

そんな高圧的な彼女の態度に峰雄は「すみません」と呟いた

「別に……あとは口頭で答えてくれればいい」

篁はそう言うとはらっと調書を開き、淡々と質問した。

「もう一度訊くけど、君はこの自白を完璧に偽りだと否定したいんだな」

「ああ……そうだ」

「あれは不本意ながら口にしたとっさの嘘だと認めるな」

「ああ！ この際だから認めてやるよ！」

小さな取調室に峰雄の遠吠えのような声が響き渡る。

「俺はなあ、この不本意な自白のせいであれから二〇年間一步もシャバに出られなかったんだよ！ だから言っただろう地獄に来た今だってずっと後悔している。そして、そんな後悔なんてやめろって言ったのはあんただろ！」

「そうだけど？」

篁は表情一つ変えずに調書に何かメモ書きしながら返事した。

「一体何なんだよ！ 一度、鎮火させた俺の後悔を再び燃え上がらせるなんて——俺を弄ぶのもいい加減にしろよ！」

「別に弄んでいるわけじゃありませんよね……」

直は意地悪な問いかけに、篁は「ああ…」と一言頷いた

「じゃあ何なんだ！」

「一言で言えば事実確認ですね」

「確認？」

「そう、あの時の君の自供が誠か偽りかって言うことがね」

無表情にさらりとそう言いかけた篁のその一言に峰雄は一瞬背筋が凍り付いた。

アッと口を塞いだときにはもう遅い。

この男は峰雄の生前のあら探しをする冥官であり、そして虚言、嘘、偽りは冥官たちにとって格好の批判材料なのだ。

それを知りながら思わず熱くなり自白の偽りを認めるなんて——地獄へ逝きたいといっているようなものじゃないか！

そう思った瞬間、峰雄は天を仰ぎ崩れるように椅子にもたれかかった。

「まあ、これが本当に誠か偽りかなど君の意見一つで決まる事じゃない。何せ君はひどい記憶喪失なんだからな」

そう言いつつもと同じ冷静な顔をしてまた調書に目を落とす篁を、峰雄はじろりと恨めしそうに睨みつけた。

「ともかく、審理を続けるけど——不本意ながらの自白を口にしたせいで君はあれから15年近く縄に縛られるハメになる。裁判に丸4年、そして刑が確定して刑務所で10年——」

それに、峰雄はふてながらもこくりと深く頷いた。

「君は結局、自白しながらも裁判でそれを翻して無罪を訴え戦った。つまり、この時君は自分はやっていないと断言できるくらいの自信があったんだな」

「多分……そうだと思う」

「多分？」

「よく解らないけど、俺……にかくその自白を取り下げたくて仕方なかったんだ。やってないって言う自信は——微妙だけど、人生最大の汚点を挽回しようと必死だったんだ」

「ほう……」

篁はそう唸ると、ちらっと峰雄の顔を窺った。

「でも、結果は散々だよ。不本意な形で口にした自白のせいであれよあれよと殺人犯になって、その時に否定したって何の効果もなかった…」

「最高裁まで争ったのに全て敗北——この結果のことだな」

その言葉聞いた瞬間、峰雄は顔を思わず顔を曇らせた後、重々しい口を開いた。

「裁判ではみんな俺のことを殺人者っていう色眼鏡で見て裁いていく。それがつらくてたまらなかった。そんな彼らの激しい追求に俺は何も言えないまま裁判が終わっていた……」

峰雄は弱々しくそう伝えると深いため息をつきまた貝のように黙り込んだ

ふっと脛に浮かぶのはあの時の裁判。

裁判官、検事、さらには弁護士や傍聴人まで自分を殺人者として見つめているかのようなあの視線。

槍のごとく体を貫いていくその視線に曝されながら、たった一人被告人席に立ったあの心細さが今更思い出したように峰雄の身体を駆け回った。

本当はこんな事思い出したくないのだけど、自分の頭の中の忘却の霧は徐々に晴れようとしている。それがいいのか悪いのか——今はよく解らなかった。

「わかった。話を変えよう」

そんな黙り込んだ峰雄を見かねて篁は機転を利かせた。

「そんなつらい裁判の最中に君は伊世と結婚しているね」

「はい……」

峰雄は憂いを浮かべたように俯きながら頷いた。

「あの時は正直驚いたよ。俺が逮捕された事でもう彼女とは終わったんだってずっと思っていたから……」

伏し目がちに閉じた峰雄の目に映っていたのはいつかの拘置所の面会室。

小さな部屋、固い椅子、白い目で睨み付ける監守——

声しか通らない穴の空いたアクリル板の向こうに彼女は愛おしい目で俺を見ていた

「彼女が面会室に現れたとき、俺は何かの幻じゃないかと思ったよ。でも、彼女は夢でも幻でもない伊世そのものだった。

『何で……？』

俺は嬉しさ半分、戸惑い半分の目で伊世を見た。

『何で俺なんかに会いに来たんだよ』

『何でって……会いたかったから——』

『会いたって言っても俺は自由のない身なんだぞ！』

思わず荒げてしまった俺の声に伊世は最初驚いたような表情を浮かべたが、すぐに彼女は天使のように微笑んで俺を見た。

『そんな今だからあなたを助けたいの』

『でも……俺なんてもう——忘れた方がいいよ』

思わず弱気になって漏らしてしまったその言葉。

それは、あの時追いつめられた俺が唯一取ってやれた伊世への思いやりだった。

『どうして？』

しかし、伊世は不思議な反応を返した。何も知らない無垢な子供のような目をして彼女は俺を

見つめ返したのだ。

『どうしてって……』

そんな伊世の反応に俺は一瞬口ごもった。

『だって、塀の外には自由な男がうじゃうじゃいるじゃないか……』

『別に、あなた以外の男には興味がないし——』

『そんな悠長なこと言っているのか!?!』

俺はまたそう声を荒げその場にいきり立つと、驚きと戸惑いの目で伊世を見下ろした。

『いいか！ 俺はいつここから出られるか解らない身なんだぞ！ 裁判だって勝てるかどうかだって——正直自信がないよ。こんな俺をお前はまだ捨てられないのか！』

『だってしょうがないじゃない！ 好きなんだから!!』

『え——？』

そう言われた瞬間、俺は目が点になった。

その言葉を理解するのに、あの時はとても時間がかかったような気がする。

『私、あなたのこと一生懸命忘れようと努力したんだよ。その方が幸せだって何度も自分に言い聞かせて何度も忘れようとしたんだよ。それでも——ダメなのよ!!』

そう言った瞬間、伊世の丸い目からほろりと涙がこぼれ落ちた。

『本当のことという、吾妻君からあなたのことなんか忘れて俺の所に戻って来いよって言われた。私も最初はそっちの方へと流されそうになったけど、やっぱり引っかかっていたのはあなただった』

『迷うことないよ』

俺は顔を俯きながら弱々しく呟いた。

『吾妻の元に行けばいい。それがお前にとって幸せなら——』

『バカ言わないで』

伊世は声を潤ませながら俺にきつく言った。

『もう、その話は断ったもの——もう、戻れないのは百の承知よ』

そう言うと伊世は一枚の紙を折れに差し出した。

婚姻届——薄っぺらなのに輝かしい光を放つその紙に俺は思わず息を呑んだ。

『これは——？』

『私、いつまでも——何年でも待つよ』

『そう言う問題じゃない！』

俺は差し出された面会台をドンと叩いた。

『俺が外に出られるなんて保証されたものじゃない……そんな俺を待ってたって——！』

『いいの、別に……』

伊世は弱々しながらも強く俺の言葉を遮った。

『私、たった一人でもいいからあなたのこと待ちたいの。あなたのたった一人の味方でいたい
の』

たった一人の味方でいたい——

孤独な戦いを続けていたあの時の俺にとってあの言葉はなによりもありがたかった。

俺は呆然と彼女の潤んだ瞳を見つめていると彼女は口元にふっと笑みを浮かべた。

そして俺と彼女を隔てる透明なアクリル板にそっと掌を当てた

——手を重ねてみて……

あの時、彼女はそんなこと口に出して言わなかったけど吸い込まれるような彼女の瞳を見てると自然に手が動いた。

冷たいアクリル板を隔てた向こうに彼女の掌がある。

そう思うと俺の掌にも彼女の鼓動と温かさが伝わってくるような気がした。

それが、俺はもう一人じゃないと思った瞬間だったね——」

峰雄は感慨深げに目を閉じ自然に今まで思い出せなかった過去を語った

不思議にもそれを思い出すのに傷害はなにもなく、それどころか何とも言えない幸福感が空っぽの心の中に染み渡っていく。

きっとそれだけ自分の人生の中で幸せを感じた一瞬だったのだろう。

「いい奥さんだな」

その言葉を聞いて峰雄はハッと顔を上げると、目の前には顔を和らげ口元に優しくそうな笑みを浮かべる篁。

「ええ……」

その顔を見て峰雄は思わず戸惑った。

鬼のような心の持ち主の彼が一瞬だけ本来の人間らしさを見せたことが意外でならなかったのだ。

「まあ、彼女との約束も虚しく結局この後は10年以上の刑務所暮らし。君にとってはさぞかし屈辱的な期間だったろう——」

「いや……そんなことはなかった」

その言葉に篁はぴくっと眉毛を上げ峰雄を見た。

「もちろん自分が人を殺めたなんてあの時だって認めてなかったけど、俺はとにかくここから出て伊世と静かに暮らしたいって言う気持ちの方が強かった。だからとにかくあそこにいたときは模範囚を貫いて、早くそこから出ることだけを考えてるようにしていた」

そう言いながらも峰雄の表情は晴れずがっくりと肩を落とした弱々しく呟いた。

「でも、やっとムシヨから出て、やっと伊世と二人静かに暮らせると思った矢先に俺はぽっくりと死んでしまったんだ」

峰雄はそう言うのと膝に置いた拳をギュッと握ると、また目から涙がこぼれ落ち握った手の甲に落ちて弾けた。

「彼女は俺を愛してしまったから、結局幸せになることが出来なかった——そう思うと俺はとんでもない男だどつくづく感じてしまう。だから俺がやった罪も認めなきゃいけないのかと思うことだってあるよ……」

「君はそれでいいのか？」

その言葉に峰雄ははっと顔を上げると、篁はまた人間らしい哀れんだ表情を浮かべて峰雄を見ていた。

「君には事件の時の記憶がさっぱりないんだろう。それなのにここで罪を易々と認めてもいいのか？」

「そう言われても……」

峰雄はその言葉に困惑を隠せなかった。

何せ、篁は自分の罪を洗い出し地獄へ送ろうとする冥官の一人だ。

そんな彼が何故今更になって峰雄を弁護するような言い方をするのか——峰雄にはさっぱり解らなかった。

「正直言うけど、事件当日の君の記憶はどうあがいても復活不能くらい失われているのは確か。このままこの罪を認めてしまうと君は地獄でそうと酷い日々を送るはめになるぞ」

「でも、それは仕方ないよ」

峰雄は今にも崩れそうな口調で呟いた。

「どうひっくり返しても事件のことを思い出せないって事は、俺は自分のことを弁護できないって事だろ。それなら素直に地獄へ行くのを受け入れた方が楽かも——」

「いい加減にしろ!! この弱虫！」

その瞬間、峰雄の弱音を断ち切るように篁は怒号を上げ机を強く叩いた。

「君はいつもそうだ！ 苦しみから逃れるために意ではない罪を認めて逃げようとするばかり——正直言って俺はそんな弱い人間が大嫌いだ!!」

初めて感情をむき出しにして怒り出す篁を見て峰雄は啞然とするばかりだった。

今まであれほど突き放した言葉ばかり口にした彼が急に説教じみた台詞を吐き出した事に峰雄は驚くことしかできなかった。

「もう一度聞くけど、君は本当にこの罪を認めてもいいんだな？ あの時と同じように目の前の苦しみから逃れるために自分を偽ってもいいって言うんだな？」

「だって、認めるしかないだろ！」

峰雄はついに声を荒げて反論した。

「あんたの言うとおりであったらあの時の俺の記憶はもう二度と戻らないんだろ。自分のことが信じられないし解らない俺がどうやってあんたみたいな冥官たちと戦っていくんだよ！」

峰雄の悲痛な叫び声は狭い取調室にやけに大きく響き渡る。

そして直後に訪れた重々しい沈黙。

篁は興奮した顔の峰雄をいつもの冷静な目でじっと見つめた後、何かを感じ取ったようにふっと顔を和らげた。

「俺はね——君と初めて顔を合わせたときから君が人を殺めたとは思えなかった」

「え……？」

峰雄はあまりにも意外な言葉に呆然と彼を見つめた。

「君には記憶はなくとも罪を犯していないという自信が漲っていたはず。その気持ちに蓋にするのは正直見ていられないんだ」

その言葉を聞いて峰雄ははっと目を丸くした。

篁は峰雄の全てを見抜き峰雄の気持ちの偽りに心を痛めていた事に峰雄はその時初めて気付いたのだ。

しかし、うれしいがおかしな話だ。自分を追い込む冥官である篁がこんな優しい言葉をかけるなんて――

「あんたは、冥官ですよね……」

峰雄は訝しげな表情を浮かべて篁に訊いた。

「俺たちみたいな死人を地獄に送るために存在するあんたがどうしてそんな慈悲をあたえよとするんだ？」

「慈悲だって？ 笑わせるな」

そう言うと篁は吹き出すように笑った。

「はっきり言うけど、本当なら資料に書いてあるとおりに君を裁いた方が楽に仕事が片づくし立場上そうすべきだとは思うよ」

「じゃあ、何で……」

「勘違いするな。君を弁護する気なんてさらさらない」

篁はぴしゃりとそう言いきったあとに、ふっと口元に笑みを浮かべた。

「でも、君の失われた記憶の謎を明かすって事に冥官としてのやり甲斐を感じているだけだ」

峰雄はその時の篁の目を見て、思わず啞然とした。

冷たい表情を終始崩さなかった篁がその瞬間、少年のように目を輝かせていた。

「でも、どうやって俺の失った記憶から真実を探り当てるんだ？」

それでも峰雄は怪訝そうな顔して聞き返す。

「ここは冥界だ」

しかし、それを聞いても篁は余裕を崩さなかった。

「君らの世界では非常識であり得ないことだって簡単にできるのがこの世界なんだよ」

妙に楽しそうにその言葉を言う篁を見て、峰雄は期待よりも不安の方が大きかった

——でも、彼は完璧な鬼じゃない。

幾分かの人間らしさが残っているからこそ、峰雄は彼に全てを賭けるしかなかった。

13 探求者たち

黒い空に相変わらずな稲光が光り、そして黒い地平線の向こうはうっすらと地獄の業火で赤く染まっている。

休憩室の窓から見える変わり映えのしない冥界の空と大地。

涼はそれを眺めながら深いため息をついた。

「で……お前俺の言った宿題やっておいたのか？」

「うん、この前怪しいって思った吾妻俊彦のことでしょ」

奥のベンチで円はおにぎりを頬張りながら一言言った。

「うーん、調べたというと——あの、膨大な資料室でしょ？ 閲覧を頼んでもなかなか時間がかかってさあ……」

「と言うことはまだっていうわけ……」

「そう言うことかな」

——コイツにはもっと仕事を真剣にする心構えが足りなさすぎる。

後ろで後輩円はお茶目な顔をしてゴメンと言っているのだろうけど、涼はそんな彼女を見ることさえ腹立たしく思えた。

どうしてこう最近の若い奴はこんなに無気力なんだろう。

コイツに頼んだ俺が馬鹿だった——と今更ながら涼は後悔した。

「でも、いいじゃん。私たちはあの亡者を弁護するために頑張ってるわけじゃないんだから」

「まあ…そうなんだけど」

「私たちは冥官よ資料に書いてあるとおりに裁いて地獄に送ればそれでいいの。それが常識じゃない」

「——」

確かに彼女の言い分も冥界のセオリーであり間違っているわけではない。

だけどそれでいいのか——涼は強い迷いを憶えていた。

「いいえ——そうでもないみたいよ」

休憩室そんな彼らの会話に音もなく割ってきたのは直だった

彼女はいつも以上に浮かない表情をして半ば愚痴に近い言葉を吐いた。

「篁さんの熱中癖も困ったものよね。謎が多い亡者であればあるほどのめり込んじゃって周りが見えなくなるんだもの」

「どうかしたんですか？」

「いいえ。ちょっと……ね」

直はベンチに腰掛け胸ポケットから煙草を取り出すとふてたような表情で火を付けた

そして、紫の煙を吐き出しながらじろっと円を見て一言聞いた。

「ねえ、円ちゃん。閻魔^{うち}庁の資料室って一体何年までこちらに来た亡者の資料をとっとしているのかしらね？」

「さあ…それは私に聞かれても……」

「まあ、せいぜい残っているって言っても十五年でしょ。それ以降は重要でない限り順を追って廃棄されると思うし——」

「おい、直……お前何が言いたいんだ」

「——」

涼のその一言に珍しく直はふて腐れた顔をして不満を吐露した。

「三課全員に下された仕事よ。とっくの昔——二六年前に亡くなった亡者の最後の生前調査票を後2週間で探すそうよ」

「26年前——って、えええーっ!! 嘘でしょ!?!」

直の言葉に激しく動転したのは新人の円だった。

「そんなの絶対ムリ!! ムリに決まってる! そんなもの残ってたら^{うち}閻魔^うの資料室とっくの昔にパンク状態じゃない!」

「それに相手はあの亡者が殺した相手とされる中村よねっていうおばあさんって……残ってるわけがないわ」

散々なことを言う女性陣を涼は冷めた目で見つめながらも、彼女たちが口ずさむ言い分がわからないワケではなかった。

全く篋もしっかりしているようで時々メチャクチャな命令を出すものだ。

26年前に亡くなった、名前さえ残っていないような小市民の老婆の記録——そんなものが残っているとしたらまさに奇跡。

整理が追いつかず雑然としているあの資料室ならとでも思っているのだろうが、やっぱり夢物語にしか見えない。

「ねえ、涼はどう思ってるの?」

「え……俺?」

「あんただってどう見たってこんな命令メチャクチャだと思うよね!」

円の泣き言に似たその言葉に涼は口を尖らせながらぼそぼそと話した。

「まあ、俺もそう思うけど——あいつらしい命令だとも思うけど?」

「篋さんらしいって?」

「また手抜きできないあいつの良い意味で悪い癖が出たなあって感じかな？」

「あら、涼君もたまにはいいことを言うじゃない」

そんな直の意地悪げな言葉に涼はムツとした表情を浮かべて言い返した。

「馬鹿言うなよ。あいつと俺はかれこれ一二〇〇年の仲。あいつを冥界に連れてきたのは俺なんだから！」

「でも今はそんな相手から顎で使われてるじゃない」

「うるせえ！それを言うな！」

涼は鋭い牙を見せながら直を威嚇した。

「とにかく、俺はお前らと違ってあいつとの付き合いに年季が入ってるんだ。何を考えているか何てお見通しだよ」

「あら、そう……」

そう言うと直と円は何か含んだような笑みをを見合わせると、悪だくみ女子たちは怖い連帯感を見せ始めた。

「じゃあ、涼君……篁さんに真意を聞いてきてくれるかしら？」

「えっ……」

「あ、それ私もさんせーい」

「ちょっ……待てよ！」

二人の女子の追隨を止めようと涼は唸った。

「何で俺がお前らの不満を篁にかけ合わなきゃならないんだ」

「それは……あれでしょ？」

そう言うと直は煙草の煙を吐き彼を見た。

「私たち何かよりあなたの方が篁さんとは長いんでしょ？」

——だからあなたが適任じゃない。そういう事よ

「女子ってなんて奴らだ」

涼は苦々しくそう吐くと大股で薄暗い廊下を歩いていく

とにかく涼は虫の居所が悪かった。

何故、後輩の代弁者として上司と交渉しなきゃいけないのか。

何故、後輩と上司の橋渡しを俺がしなければいけないのか——

先輩である自分がどうして損な役回りを演じなければいけないのかどうしても納得いかなかった。

——篁に文句が言いたかったら自分で言えばいいじゃないか！

何度も二人にそう説得したが彼女たちは篁とサシで勝負するのが怖いらしくそれを断固拒否し続けた。

だからといって自分がわざわざ出てきて彼らの橋渡しをしようとは思わないが、やっぱり先輩として上司と折り合いが悪い後輩は正直見てられない。

そんなお節介を直に見透かされたように、あれよあれよという間に交渉役に仕立て上げられてついにこんな事になってしまった。

まあ、女子どもが不満を漏らす気持ちも解る。

あるのかないのかさえも不明の資料を探し出せなんて言われたら誰でもふざけるなと思うのは当たり前だ。

でもその一方で、涼は徹底的に亡者の過去を洗いたい言う篁の気持ちも熟知していた。

そんな彼女たちが篁と解り合えれば一番いいのだろうけど、やはりここは自分が橋渡しになるしかなかった。

——人がいいな、俺……

涼はもう一つため息をついて、薄暗い廊下を進んでいく。

そしてある部屋の前で止まると、ふと青白い光の漏れる部屋の中を覗き込んだ。
薄暗いけど完璧な闇ではない視聴覚室。

その闇を薄めるプロジェクターの青白い光。

部屋いっぱいには張られた大きなスクリーンには彼の苦々しい思い出であるいつかの取調室の映像。

恫喝する刑事の怒鳴り声。反論する彼の弱々しい声。

彼の記憶の映像の真ん中で篁はじっとそれを食い入るように眺めていた。

近寄りがたいほどの鋭い眼光。

怖いほど黙り込んだままりモコンを操作する手。

映像は時折制止したり、巻き戻ったり、また制止したり——全神経を集中させるように篁はその映像を徹底的に検証していた。

涼はそんな篁を遠目に見て今回の仕事に対しての彼の意気込みと執念を見たような気がした。

——あのオッサンのどこに篁は火を付けられたのだろう？

涼はそう思うと首を傾げるしかなかった。

確かにちょっと特殊な亡者かもしれないけど、それ以上に篁は何かに惹かれているようだった。

その瞬間、映像がまたピタッと制止した。

「何しに来た？ 涼？」

篁は涼の方を振り返らずにそう訊く。相変わらず鬼顔負けの迫力だった。

「いや…別に——」

涼はそう口ごもりながらふと篁に用件を言おうか迷い始めた。

後輩たちの用件を先輩である自分が篁に伝える——ということに急に後ろめたさを感じたのだ。

「どうした？」

そう言うと篁はふっと涼の方を振り向いた。

「何か用があったんだろう？」

「そりゃ…まあ、そうだけど……」

「もしかして——」

篁は少し顔を和らげながら涼を見た。

「生意気な女子たちに泣きつかれて俺に文句言いに来たのか？」

篁のその言葉に涼は思わずうっと言葉を詰ませた。

凶星——というか、なんでコイツそれを知っているんだ？

「まあ、鬼女って言うのは大体あんな性格だからお前を使って反発してくるとは思っていたけど案の定だな」

「別に俺、アイツらに顎で使われているワケじゃないぞ」

涼は不満げに口を尖らせながら一言唸った。

「解ってるよ。それくらい」

そう言うと篁はまたスクリーンの方を向き、制止していた映像をまた流し始めた。

——何だか何もかもお見通しみたいだなあ……

涼は不機嫌そうに一つため息をつき、スクリーンの張られた薄暗い部屋に入った。

そして篁の横に来ると直と円に託された質問と自分の心の中の疑問を同時にぶつけた。

「なあ、あんたマジであんな命令出しちゃったの？」

「ああ」

「でも、そんなの実質的に無理じゃないかな？」

「そうかな」

「だって、たった二週間であんな広い資料室から一つの資料——それも26年前に亡くなった一
小市民の記録を探し出せなんて——あいつらじゃなくても反発しそうな命令だよ」

「俺はそうとは思わないよ」

篁は余裕の表情を浮かべて言った。

「聞いた話によると本来亡者の記録は15年保管が原則だけど、どうやら資料室の整理が追っ
かない状況でそれ以上古い資料も残っている可能性はゼロじゃない」

「それでも二週間って言うのは正直キツイ」

「無理だと思うか？」

「——」

その問いに涼は何も答えず、しばらくの間の後黙ったまま顔を俯けた。

「なあ、あんたってどうしてそこまであの亡者の空白にこだわるの？」

しばらくの沈黙の後のその問いに篁は変わらず映像のほうを眺めながら答えた。

「解るだろ。それくらい」

「ああ、解るよ。あんたが亡者の謎を解明したくていつもの悪い癖が出てるって事くらい」

そう言うと涼は更に言葉を続けた。

「俺は仕事に手抜きをしないあんたの姿勢は認めているし、むしろ見習いたいくらいだよ。だけど、俺……あいつらの気持ちも痛いほど解るんだ！」

その言葉に篁は黙って映像を見つめたまま涼の話に聞き入っている。

そんな篁の横顔を見つめながら涼は強い口調で言い放った。

「あいつらの言葉を代弁するワケじゃないけど、そこまで丁寧にする必要って本当にあるのかな？俺たちは亡者を裁いていく冥官だから既成事実だけを調べて裁いていけばそれだけでいいんじゃないかな？むしろ、あんたの丁寧さはあの亡者を助けたいような色が見えるって言われても仕方ないよ！」

涼のその言葉が薄暗い視聴覚室に響き渡る。

もちろん涼は篁が他人の情に流されることのない冥官だとは頭に入っていたけど、だからこそ相楽峰雄に対する篁の執着心がよく見えなかった。

「他人から見たらそう思われても仕方ないか……」

しかしその瞬間、篁は笑みを漏らして涼の方を振り向いた。

「でも、お前が知ってのとおり俺はそんな優しい人間じゃない」

「——それなら何で…」

「理由は簡単だよ」

その瞬間、篁の目が冷たく光った。

「あの亡者の罪は冤罪の可能性があるからだよ」

「え……？」

その言葉に涼は一瞬言葉を失った。

「それ、嘘だろ……」

「いや、俺が面談した限りではそんな印象を強く持ったね」

「でも、そんなのおかしいじゃん！」

涼は強い口調で篁に反論した。

「確かにあのオッサンは事件の記憶が抜け落ちたままこっちに来ちゃったけど、人を殺めたことは既成事実として閻魔^{ウチ}庁の資料に記されているんだよ。それなのにあんたは何よりも正確な資料よりもオッサンの嘆願の方を重要視しちゃうわけ？」

「別に俺は彼の嘆願を聞いてあげたワケじゃない」

篁は一つため息を混じらせながら言った。

「まあ、とにかくこの映像を見てごらん」

そう言うと篁はリモコンのボタンを押して制止を解いた。

再び流れ出す映像。

『お前がやったんだろ！』

『いい加減白状しろ！』

『あんたが言わないと延々この取り調べが続くぞ！』

スピーカーから響く刑事たちの怒号。そして、ドンと机を叩く音はどこか雷鳴が響き渡る音に似ていた。

映像だけでもびりびりと伝わる威圧感と緊張感。

そんな中で彼は刑事たちの恫喝に堪え忍びひたすら無実を訴えた。

『俺は何もやってません！』

『だから何度言わせたら解るんだ！』

『もう…お願いだから、解放してよ……』

その反論の言葉は時に力強く時に弱々しく繰り返される。

刑事たちの追求は彼にとって巨大なプレッシャーだったのだろうか。

映像は時折ノイズが入り徐々に不鮮明になっていった。

「どうして乱れるんだろう？」

涼はその映像を見ながらふとそう漏らした。

「答えは簡単さ」

篁はノイズが走った場面で画像を止めて言った。

「彼にとってこの拷問に近い取り調べは途方もないストレスに他ならなかったんだ」

「でも、それだけでこんなに記憶が乱れるもの？」

「彼は散々精神を痛めつけられた後に自白を強要され、その自白のせいで彼の意思に反したまま裁判となり最悪の結果が訪れる——彼にとってその全てが強いストレスにしか取れなかった——」

そう言うと篁は静かに目を閉じて言葉を続けた。

「これは俺の推理だけど、彼はそんなストレスに曝された日々を送るたびに記憶を失っていったんだと思うんだ。つまり、嫌なことを忘れたいという人間の本能が彼の嫌な記憶をズタズタに裂いていったって事になる」

「でも、それじゃあのオッサン…自分の無実を訴えるための事件当日の記憶まで無くしてることになる……」

「これも俺の推理の範囲内だけど、刑事たちに自白を強要された時に彼は人を殺めた気分を陥らせたのかもしれないね」

「でも、それだけで彼がもしかしたら白かもしれないって——大胆な推理だな……」

「考えてみれば彼は刑事たちに散々そそのかされて目先の苦しさを逃れるために自白を口にした。でも、それが偽りだとしたらどうする？」

「偽り？」

その言葉に涼は目を丸くして篁を見た。

「彼の人間界での裁判は彼の自白供述に基づいて罪を確定させたわけだから、それは全て間違っている事になる——」

「ちょっと待って！」

涼は慌てた様子で篁の推理を遮った。

「どうしてあんたはあのオッサンの自白が嘘だって言い切れるの？ 自分で吐いたワケなんだから正しいんじゃ——」

「その考えはうわべだけだね」

篁ははっきりとそう言いきった。

「何度も言うけど人間って言うのは弱いんだよ。周りからああだこうだ言われると自分の意志がぶれちゃうし、ちょっとしたストレスでボロボロに崩れる。今回の彼も同じようなものだよ」

そう言うと篁は一つため息をついてまた映像を眺めた。

「この刑事たちはうまい具合に彼の精神を痛めつけうまい具合に彼を崩している。普通ならこんな尋問から早く逃れたいと誰もが思うところだ」

「それで、あのオッサンは自白した——」

「俺はねこんな強烈な圧力を受けた状況で彼が正しい自白をできる事が疑わしくてならないんだ。むしろ俺には彼の心がこの刑事たちの支配下に置かれいいように操られているようにしか見えない」

その言葉に涼はハッと映像を見つめた。

時折雷が落ちるように叩かれる机。彼はその雷に怯える子供のように畏縮しきっている。

弱々しい声、震える手、乱れる記憶——

篁の推理を裏付けるように彼は完璧に自分を失っているようだった。

「なるほどね……」

涼はじっと映像を眺めながら一言唸った。

「それで、なおさらオッサンの記憶の空白が無視できなくなったってわけか」

「そう言うことだ」

篁は珍しく申し訳ない表情を小さく浮かべた。

「お前らにとっては俺のわがままに聞こえるかもしれないけど、俺は彼の謎を完全に解明するまで諦めきれないんだ」

「それは、了解済みだよ」

そう言うとき涼はにこっと憎めない笑顔を浮かべた。

「だって、あんたは謎があればあるほど燃える^{タチ}性質だからね」

「え……？」

篁は思いがけないような表情を浮かべ涼を見た。

「資料のことは任せろよ」

涼は席から立ち上がり篁を見た。

「最終審判まであと二週間だろ。全力上げて探し出してみせるよ——まあ、見つからなかったら勘弁だけだな」

涼の言葉が思いがけなかったのだろうか——

その頼もしい言葉に篁は嬉しさよりも困惑を隠せない様子だった。

「——お前、本当に納得してるのか？」

「何が？」

「さっきまでそんなの無理だって突っぱねてたのに——変わり方が急激すぎる」

「あれ？ 言わなかったかな……」

涼は意地悪そうな笑みを浮かべながら言った。

「無理だって言ったのは直や円であって俺はあんたがそれだけこだわる理由が知りたかっただけ。俺はあんたの理由に納得したからこの仕事を引き受けるんだ」

その言葉に篁は少し悔しそうな表情を浮かべる。

——アイツのことだ。そこまで読めなかったと悔やんでいるんだろう。

そう思うと涼はすこし篁に勝ったような気がして少し嬉しくなった。

「じゃ、そう言うことだから」

涼は満足げな表情を浮かべると視聴覚室を後にする。

そんな涼の後ろ姿を篁はずっと苦々しく見つめていたが、すぐにやられたなと言わんばかりの笑みを浮かべた。

「ねえ！ 本当に受け入れちゃったの？」

遙か地上で円は呆然と上を見上げて叫んだ。

「私思うんだけど、こんなの絶対に無理に決まってるよお！ ねえ！ 涼、聞いている！？」

「いんや、聞こえねえな」

二階ぶち抜きの高い本箱の一番上。

同じくらい高い脚立のてっぺんで涼はわざとそう言った。

その手は綺麗に本棚に並べられた資料を絶え間なく漁っていた。

「篁さんに何をそそのかされたのか知らないけど、何でこんな途方もない仕事を引き受ける気になったの！？」

円のその問いに遙か頭上の涼はわざと無視し一つ一つ資料を引っ張り出しては丁寧に中身を確認していた。

そんな黙々と作業を続ける涼を見上げて円は呆れたようなため息をついた。

——どうしちゃったんだろう……

涼の急な心変わりに円は困惑し、そして頭の中の計算が狂いに狂いだした。

本来なら涼が直接篁に無茶苦茶な命令を取り下げるように交渉してうまい具合にその話は無しになるとばかり思っていた。

それなのに、何があったのか涼は逆にその途方もない作業を受け入れてしまうなんて——

「ねえ、直さん！ 涼に何か言って！」

円はヒステリックにそう言うと隣で涼を呆れたように見上げる直に助け船を要求した。

「何かって……」

「だって、直さんもこの仕事には承伏できないでしょ」

「まあね——」

そう言うと直は一つため息をついた。

「でも篁さんの胸についた火が涼君に引火したってことでしょ。それは私にも止められないわ」

そう言うと直は諦めたような表情を浮かべたまま資料の壁へと近付いていき、黙ったまま涼の仕事に加勢しようとした

「そんなあ……さっきと態度が全然違うじゃん」

円は小さな声で思わずそう漏らすともう一度苦々しく頭上の涼を見上げた。

性になく資料探しに没頭する涼。そして、亡者の空白に異常なほど執着する篁——

何故だろうか、三課の人は仕事に熱中しすぎる人が多すぎる。

亡者なんて適当に裁いて適当に地獄に送ればいい——と入庁以来思いこんできた円にとってそんな彼らについて行けない部分があるのは否めない。

亡者のために一生懸命するなんて考えられない！ それとも、楽に仕事を進めようとする私が間違っているわけ——？

「円さんは手伝わないの？」

ふと背後から包み込むような声をかけられ円ははっと振り返った。

そこには大きな身体におっとりとした顔の先輩雅が立っていた。

「え——それは……」

雅の素直な問いに円は思わず戸惑った。

上司の命令にも逆らい、先輩の手伝いもしない自分が急に卑しく感じたからだろうか。

円はその問いに答えることなく縮こまることしかできなかった。

「——しかし、涼君は久々に気合いが入ってますね」

そんな円の様子を配慮してか雅はそれ以上追求せずに遙か頭上の涼を眩しそうな眼で見上げて言った。

「本来なら彼はあんながむしゃらに仕事をするタチじゃないとは思いますが、篁さんの炎がどうやら涼君にも燃え移った感じですね」

「——みんなそう言うね」

円は口を尖らせて一言呟いた。

その言葉に雅はすこし訝しげな表情を浮かべ円を見た。

「でも私には信じられないよ。亡者のためにあんなに一生懸命になれるなんて——」

「亡者の——ため？」

「だってそうじゃないですか。亡者が地獄へ逝こうがそれを免れようが私たちには関係ないじゃないですか。それなのにあの記憶がパーの亡者をどうにか救おうとしてあの二人があんなに一生懸命になれるなんて——絶対におかしいよ」

「円さん、それは大きな間違いです」

「え……？」

優しくも強い否定に円はハッと雅の方を振り向いた

雅は珍しく顔を曇らせ不快感をあらわにしていた。

「あの二人が亡者を救うために一生懸命になってるだって？ そんなの絶対にあり得ません。むしろ反対の意味で一生懸命になっていると思います」

「反対？」

「あの二人を含めてウチの課は完璧主義者が多い。この仕事を完璧にこなすために彼らは一生懸命になってるんだよ」

「完璧——主義？」

円はその言葉に首を傾げながらふと休憩室での涼の言葉を思い出した。

『また手抜きできないあいつの良い意味で悪い癖が出たなあって感じかな？』

よく考えてみると、雅も涼と似たようなことを言っている。

「書面どおり適当に亡者を裁いていけば君が思い描いているような楽に仕事ができる。そんなこと篁さんも涼君も十分解っているでしょう。でも、それ以上に無視できない事実を見つけたからには彼らは止められないですよ」

「でも、あの亡者の空白を埋めたってあの亡者の地獄逝きは止められないと思うけど……」

円のその言葉に雅はふっと笑顔を浮かべて答えた。

「僕たちの仕事はただ亡者を地獄へ送るだけじゃない。亡者に隠された真実を見抜き、それを具体的な形に示すことだって僕たち冥官の大切な仕事です」

「隠された真実？」

「彼らがあればほど一生懸命になれるのは飢えたように真実を追求しているからじゃないでしょうか——まあ、僕が思うにそれができない冥官は冥官として失格だとは思いますがね……」

「ふーん」

そう頷きながら、円はふと篁や涼と自分を比べていた。

どうにか楽しんで仕事をこなそうと思ってばかりの自分に比べてあの人たちはあまりにも正反対すぎる。

でも、それは亡者の為じゃなくて、ただ真実が知りたい探求者として一生懸命なんだ——

円はそんな彼らのことを面倒くさいと思う一方で、少し羨ましく少し格好良く思えた。

そして、どうしても仕事に一生懸命になれない自分を恥ずかしく思い始めていた。

「それにね、三課の完璧主義者は彼らの他にもう一人いるんですよ」

「え……？」

その一言に円はもう一回雅を振り返った。

雅は口元に笑みを浮かべてそびえ立つ本棚へとゆっくりと向かっていく。

「僕も彼らと似たようなものでね、困難な仕事ほど燃えるんです」

「でも、こんな広い資料室から昔の資料を探し出すなんて——」

「一人よりも二人、二人より三人、三人より四人で探した方が確率的には高いんじゃない？」

雅はそう言い残し、高くそそり立つ壁のような本棚に向かい例の資料を探し始めた。

また、仕事に夢中になれる男が一人円を置いて本棚へ——

円はぶすっと口を尖らせてそんな涼と雅を見つめた。

——こんな広くてこんなに高い本棚から本当に一つの資料を見つけられるのかしら？

それに関してはまだまだ半信半疑だけど、雅の言う事も解らないわけでもなかった。

一人より二人、二人より三人、三人より四人——

あと二週間しかないけど、四人力を合わせればもしかしたら間に合うかもしれない。

——仕方ないわよね……

円は深いため息をつくと思えたような笑みを浮かべた。

そして、二人とも掛かり切りになっているそびえ立つ本棚へと歩いていった。

14 姉弟冥官

冥界での日々は虚しいくらい早く過ぎていく。

今の峰雄にとって49日間で7回の審判は物足りないほど少なく極端に短く感じるほどだった。

もう少しだけ、落ち着いて自分を見つめたい

もう少しだけ、ごちゃごちゃの頭の中を整理したい。

そうすれば自分に被せられた罪を少しくらいは弁護できていたのかもしれない。

でも与えられた49日はそれを叶えるにはとにかく短すぎる。

肝心の事件の記憶は一向に思い出すことができないまま、落ち着いて自分を見つめるところか頭は逆にどんどん混乱していった42日間。

それはあまりにも虚しく風のように過ぎ去っていったのだ。

「こんな事で本当に大丈夫なのかな……」

厳つい刑務官の鬼に両脇を固められながら六回目の審判場へと向かう最中、峰雄はふとそんな不安を口にした。

「何が？」

そう言葉をかけたのは峰雄を先導するように前に行く涼だった。

彼に不安の一言を聞かれたと思った瞬間、峰雄は急いでその不安を呑み込もうとした。

「いや、別に——」

「どうせ後一週間で決まる自分の処遇を考えて不安になったんだろ」

「——」

悔しいけど、凶星だった。

「まあ、亡者って言うのは今の時期が一番不安を漏らすものだから仕方ないよ」

涼はへらへらと笑みを浮かべながらそう言ったが、今の峰雄に涼の緩んだ笑顔もふざけている態度に見えてしまい無性に腹立たしくなった

「——俺は本当に君の上司を信じていいのか？」

「はあ？」

その言葉に涼は眉をひそめながら峰雄を見た。

「だから、君の上司は本当に俺の無罪を証明してくれるのか！」

峰雄は苛立ちを露わにしながら涼にその言葉をぶつけた。

『君の失われた記憶の謎を明かすって事に冥官としてのやり甲斐を感じている……』

峰雄はあの時の篁の言葉が忘れられなく信じたくても未だに信じられずにいた。

しかし、その確認の言葉に返ってきた涼の反応は思わず啞然とするほどの高い笑い声だった。

「あはははは！ 何勘違いしてるの？」

「勘違い？」

「そうだよ。いつ俺たちがあんたの無罪を証明してあげるって言った？」

「それは——」

「その時、篁は無実を証明してやるなんて本当に言った？」

「——」

矢継ぎ早に出る涼の質問に、峰雄は沈黙せざるを得なかった。

「ったく……これだから人間は——」

涼は深いため息をついたあとギロツと峰雄を睨み付けた。

「はっきり言っていていい迷惑だからあんたの都合で俺たちの話を変えて欲しくないな」

「——すみません……」

「一言言っておくけど、俺たちはあんたの真実が知りたいだけで無実を証明する気なんてこれっぽっちもないよ」

「でも——俺、思うんだ」

峰雄は頭を垂れながら一言言った。

「あんたたちの調査次第で記憶のない俺の処遇が変わるような気がする」

その言葉に涼は否定も肯定もせずただ黙ったまままた足を進めだした。

しかし、その一瞬見せた顔は不思議と安心感を与える笑みを浮かべていた。

「あんた、今回の審判が今までと違うことは篋から聞いた？」

「え？」

「何だ、聞いてないのか……」

そう言うと涼は足を速めながら早口で説明しはじめた。

「守衛がついているから薄々気付いているかもしれないけど、今回は今まで五回の審判とはまるで比重が違う。むしろ閻魔庁で最も重視されるのは最後の二回の審判だと言ってもいい」

「はあ……」

——だからこんなごつい鬼がついてきてるのか……

峰雄はそう心で呟きながら横を固める刑務官の鬼を見上げた。

「でも、どこが違うんだ？」

「今まであんたは審判って言っても篁と一対一でしか喋っていないはず。でも、今回と次回だけは完璧な法廷形式で事が進むんだ」

「え……？」

その一言に、峰雄は驚きを隠せなかった。

「と言うことは、もう閻魔大王が出てくるのか？」

「まさか……真打ちは一番最後だよ」

涼は笑い声を混じられながら言葉を続けた。

「今回の六七審判は最終審判の骨子になる閻魔帳を取りまとめるために開かれる審判。だから、審判者も閻魔帳取りまとめの総責任者が担当するんだ」

最終審判の骨子だの、閻魔帳の取りまとめ総責任者だの——地上界顔負けのお役所言葉の連発に峰雄は思わず眉をひそめるしかできなかった。

「——よく解らないんだけど……」

「解らないならそれでいいさ」

涼は白い牙を見せて笑った。

「あんたはあの姉弟の質問に素直に答えるだけでいいんだ。簡単だろ」

「はあ……」

「でも、くれぐれもアイツらの前でヘマはするなよ。今回の審判は最終審判に直結してるからな」

そう言うと涼はある扉の前でピタッと足を止めた。

そして、バンとその観音開きの扉を開けそっと手を差し出しその中へと峰雄を誘った。

扉の向こうは不気味なほど薄暗い小法廷。

現世で緊迫した法廷の空気を嫌と言うほど嗅いだ峰雄でさえも異常だと思うくらいひっそりと静まりかえった室内。

そんな小法廷に峰雄は一瞬足を踏み入れるのをためらったが、がっしりとした刑務官に押されるように被告人席へとたどたどしく歩いていった。

その一点だけスポットライトが当たったような被告人席。

しかし、そこに立って感じるのはあの時と同じ張りつめた空気と凍てついた視線。

これは夢の中の法廷じゃない。正真正銘現実なんだ——

そんな何倍も冷たいと感じる空気の中、峰雄は俯きながら思わず生唾を呑み込んだ。

「相楽峰雄。顔を上げなさい」

上から降りかかる高圧的な声。

ハッと顔を上げるとそこにはスーツ姿の男女。

男の方はぎょろりとした目にぎらぎら光る牙、スキンヘッドの頭のにゅっと生えた黒い角——見るも恐ろしい羅刹の冥官。

そして、女の方は優しそうな瞳にふっくらとした唇、地にまで着きそうな長い髪——天女のような風貌の美しい冥官。

あまりにも対照的な二人の冥官が峰雄をじっと見下ろしていた。

「これからあなたの最終予備審理を始めます——よろしいですね」

美しい女神の冥官がそう告げた直後、羅刹のような男の冥官は先走ったようにいきなり机を叩いた。

「——貴様は現世で様々な悪行を犯した罪深き特A級被告人だ」

羅刹の冥官はギロツと峰雄を睨み付けながら威圧的に言った。

「実の弟に嫉妬とコンプレックスを抱き、彼から逃げるように故郷を去る——そして、自由に生きようと決めた大都会で社会の壁につまずき、ついには或る老婆を殺めてしまうと言う大罪を犯してしまった——大まかなところ貴様の罪はこれで間違いないな？」

峰雄はビクビクと縮こまりながらこくりと深く頷いた。

とにかく上から見下ろす羅刹の冥官が怖くて仕方がなかったのだ。

「だめですわね。央」

その瞬間、女神の冥官の優しい声が緊張しきった小法廷の空気を一瞬だけ和ませた。

「確かに人間は愚かですが、悪い部分ばかりあるわけではありませんわ。そうでしょ」

「いや、そうだけどね……鳴姉さん——」

「峰雄さん——でしたっけ？ 私には見えますのよ。あなたの善い部分が……」

「え……？」

その一言に峰雄はハッと顔を上げた。

今の峰雄にとってその一言は天から垂らされた蜘蛛の糸に見える言葉だった。

「あなたは……俺を救ってくれるのですか？」

「救うですって？」

その瞬間、女神の冥官は天使のような笑みを浮かべて笑った。

「私の前で亡者はみんなそう言いますわ。でも、勘違いしないで。私は仕事だからやっているだけですの」

「仕事——」

「そう、私はあなたの善を閻魔帳に記し、弟の央はあなたの罪を閻魔帳に記す。それが私たちの

仕事」

「そして、俺たちの作った閻魔帳が最終審判の時に閻魔王に献上され、これに基づき貴様は裁かれ最終的な処置が下されるのだよ」

姉の鳴に弟の央——あまりにも両極端な風貌の姉弟の冥官。

優しくも厳しく、美しくも恐ろしい二人の視線に曝されながら峰雄は気を引き締めるように背筋を伸ばした。

正真正銘、勝負の六七審判。

この二人の尋問をうまく切り抜ければ救いの道が開けるかもしれないのだ。

「ともかく、審判をはじめましょう」

そう言うと姉の鳴は峰雄のすぐ左に視線を反らした

「篁、まずあなたから言うことがありますか？」

その一言に峰雄の横を一つの大きな人影が横切る。

清潔に整えられた黒髪いつもどおり涼しい表情の人間出身の冥官小野篁がすっと峰雄の前に出ていた。

「審判の前にお二人に一言伝えたいことがあります」

彼は今までの審判とは比べものにならないほど低く凄みのある声で言った。

「被疑人相楽峰雄はほとんどの記憶を失った状態で冥土に足を踏み入れたという特異なケースの亡者です。今までの審判で8割方の記憶は復活したようなものですが、肝心の人を殺めた時の記憶だけは今でも——否、最終審判まで復活は無理でしょう」

「ほう……それほど酷い記憶喪失か」

そう言うと央は金色の瞳をぎらつかせて篁を睨んだ。

「貴様は誠も偽りも解らぬ亡者をこの六七審判にかけようと言うのか？」

「いいえ。俺には彼が嘘も誠も解らない状況だとは思わないですけどね」

そんな凄みのある視線も諸戸もせず篁はしれっとした表情で反論した。

「先ほども言ったように彼は事件以外の記憶はちゃんと存在している——つまり、五四年の内のほんの一瞬だけ記憶がない状態ですよ」

「だが、この男の一番の大罪はその部分ではないか」

「でも彼の罪はそれだけではないでしょう」

その一言に、恐ろしい顔をした央が一瞬口ごもる。

驚くべき事に篁は口だけで獄卒の鬼を黙らせているのだ。

「ここで一つ提案したいのですが、今回の審判は例の事件以外の罪のみの尋問にして頂きたいのです」

「でも、あなたそれで彼が救えるとお思いですか？」

鳴はその提案に困惑を隠せない表情を浮かべて篁に訊いた。

「それは？」

「私の目にはあなたの提案は彼の反論の機会を奪おうとしていような気がしてならないのですよ」

鳴のその一言に、峰雄はハッと篁の方を見たが、目の前にいる篁はいつもどおりのポーカーフェイスで対応した。

「では、あなた方は記憶さえまならない彼に尋問して真実が見いだせると思いますか？」

その逆の問いに優しい鳴も恐ろしい央もぴたりと黙り込む。

それは彼らにとっても答えようのない質問だったのだ。

「特例がそう易々と認められるほど閻魔庁は甘くないことを俺は十分解っていますよ。解っているから真実をとことん追求してみたい。それはあなた方だって一緒でしょう」
「でも、それだからと言ってこの件を後回しにするのは……」

「後回しにはしませんよ」

その言葉を言った瞬間、篁は口元に自信に満ちた笑みを浮かべた。

「この件のみ俺に全て任してくれば、なにも問題にはなりませんよ」

「だが、貴様……」

その一言に央は不信の目で篁を見た。

「記憶も記録も残ってない罪をどうやってまとめる気だ？」

「記憶には残らなくても記録に残らない罪なんてありませんよ」

それでも篁の自信は揺らぐことはなかった。

「俺に任せてくれれば必ず彼と事件の謎を解き明かして見せます。そして、俺が見つけた事こそ真実だって言わせてやりますよ」

——この人、どこからそんな自信が湧いて出てくるのだろう…

恐ろしい鬼たちの前で大口と取られかねない言葉を吐く篁を見て峰雄はふとそう思った。

最終審判まで後一週間、峰雄の記憶さえ蘇らない切迫した状況なのに峰雄の目に映る篁の姿は何故かとても生き活きと映っていたのだ。

「解りました」

そう言うと鳴は納得したように頷いた。

「そんなに自信があるのならあなたの提案を受け入れてみましょう」

「でも、姉さん……」

「大丈夫ですよ」

思わず口をはさみそうになった央を鳴は微笑みながら優しく宥めた。

「彼がこんなに自信を口にする時は何かを掴んでいるのでしょうか」

「——」

姉のその言葉に、央は一瞬何か言いたげな表情を浮かべたが、すぐに納得したように引き下がった。

「では、遅くなりましたが審判をはじめましょう」

篁はそう言うともた一步前を出て壇上の二人の冥官を見上げた。

「被疑者相楽峰雄は1951年8月25日埼玉の片田舎で生まれ、その4年後彼の母は彼の弟を生んで亡くなっています」

「そう、貴様はその弟に激しいジェラシーとコンプレックスを抱いていた」

最初に食いついてきたのは弟の央の方だった。

「母の命を奪ってまで生まれてきた憎々しい弟。そして、自分よりも利口で才能がある眩しいほどの弟。貴様は少なくとも弟が生まれてこなければ自分はずっと幸せだったと思っていたはずだな」

「それは……子供の時はよくそう思いましたよ」

央の放つ恐ろしいプレッシャーに押しつぶされそうになりながら峰雄は弱々しく答えた。

「でも、それは子供の時の邪な気持ちで、今はあの時を懐かしんでさえいます！」

「ほう、果たして邪で済まされることかな」

そう言うと央は口元に蔑んだような笑みを浮かべた。

「貴様、一度山に幼い弟を置き去りにしたことがあるな」

その一言に、峰雄ははっと顔を上げた。

それは幼い自分の起こした小さな悪戯だった。

「貴様は足を怪我した幼い弟を助けることもせず、そのまま寒空の山に置き去りにした。まあ子供だからいいものの一つ間違えば人殺しにだってなりかねない大罪だ」

「でも、あの時は幼かったから——」

「幼いから済むと言うほどここは甘くはない！」

央はそう言い捨てるどドンと壇上を叩いた。

「閻魔庁は亡者が生前犯した全ての罪を裁く義務がある。それがたとえ悪気を知らない幼子であろうとも例外はない！」

央は峰雄をばっさり斬り捨てる台詞を吐くと壇上に広げたノートにカリカリとペンを走らせた。

おそらく彼のノートには峰雄の罪という罪が書かれていく——そう思うと、峰雄の目の前は一気に真っ暗になった。

「それだけではない。貴様は家族から白眼視されていると思いきみ、まるで逃げるように故郷を去っていったな。貴様は長男でありながら家を捨て親族を捨てた——これも貴様の罪であろう！」

「それは、違う！」

その一言に、峰雄は思わず声を荒げた。

「確かに親父や弟から白眼視されていることは解っていたけど、俺は家族を捨てたつもりなんてこれっぽっちもない！故郷を去ったのは東京で大きな夢を掴みたいと思っていたからだ！」

「こんな片田舎で農業やるよりも東京に出て一山当てたい。こんなボロ屋を継ぐのは可愛がられている弟の佳彦で十分だ——貴様はそう思って故郷を出た」

「それは……」

「夢を追うのが悪いとは言わないが、貴様は後先のこと何も考えず自分勝手に町を出たのだろう。貴様、周りの迷惑と言うことを考えたことはあるか？」

「——」

央のドスの効いた問いに、峰雄は思わず沈黙した。

何故、今更田舎の家族の事など触れるのだろう。そんなこと、俺には……関係ないのに——

「まだ、親兄弟のありがたさが解らぬか……」

央はそういうとまた一つの罪を目の前のノートにカリカリと書いた。

「まあいい、それが解らなかったことこそが貴様の罪だ！」

「そんな……」

その冷たい言葉を聞いて峰雄は思わず肩をガクッと落とした。

峰雄は先ほどから央のペンばかり動いている事に焦りを感じていた。

一発逆転を狙ったはずの審判なのにこのままではそんなことを言っている場合じゃない。

「審判を続けますよ」

央に変わって峰雄に声をかけたのは優しそうな微笑みを浮かべた鳴だった。

「あなたは故郷を去り大都会東京に出ました。あなたはある建築会社に雇われいつか正社員として採用されることを夢見て額に汗して働いた——」

「夢が見ることが悪いんですか？」

「いいえ。そんなことは言ってませんわ」

懐疑的にそう訊く峰雄に対し鳴は眩いほどの美しい笑みを浮かべた。

「むしろあなたは夢を叶えるために最大限の努力を行った。学歴が足りないと思ったから定時制

高校に通ったし、過酷な労働にも必死に耐えたはず」

「でも、姉さん。彼は結局高校を卒業していないはずじゃ……」

「私は彼の結果を褒めているのではなく、彼の努力を褒めているのです」

鳴は弟の反論をびしゃりとはね除けるとやっと彼女は目の前のノートにカリカリとペンを走らせた。

央のノートが罪しか書かれないのであれば鳴のノートはきっと善のみしか書かれないはず——

そう思った瞬間、何とも言えない安堵の気持ちが峰雄の身体を駆け抜けていった。

「でも、央の言う通りあなたは高校を卒業できなかった」

「——はい……」

「それは、恋による三角関係が原因だったわけですね」

「——」

その問いに峰雄はついに沈黙した。

——これ以上罪のレッテルを貼られるのが嫌だったのだ。

「恐れることはありませんよ。私は過去の事実を言っているだけですから」

そんな峰雄を見て、鳴は口元に優しげな笑みを浮かべた。

「あなたは高校の同級生である相川伊世が好きで、それはあなたの後輩である吾妻俊幸も同じ事だった。でも、心優しいあなたは後輩に譲るように身を引き高校に行かなくなった」

——まさか、高校に行けなかったことさえも罪になるのだろうか……

そう思うと、峰雄はとにかく怖くて仕方がなかった。

一つの罪が自分の地獄行きを左右するこの審判——これ以上、弟の央のペンを走らせるわけに

はいかないと峰雄は強く思ったのだ。

「でも、真実は違いましたね」

「え？」

鳴の意外な言葉に峰雄ははっと顔を上げた。

「伊世が本当に好きだったのはあなただった。あなたはそれを気づかずに身を引いたのです」

「——」

その言葉に峰雄は何も言えなかった。

「確かにあなたは彼女の気持ちも知らず長らく彼女を傷つけた——それは小さな罪として数えてもいいでしょう」

そう言うと鳴は央に目で合図をし、央は黙ってノートに罪を記した。

「でも結果的にあなたは伊世の愛を知り伊世もあなたの愛を知った。そしてあなたは一生涯伊世を愛し続けましたね？」

「はい！」

その問いに峰雄はいつになく強い口調で頷いた。

「俺は、伊世のことしか愛せなかった！ 伊世をどうしても幸せにしたかった！ でも——こんな事になって結局彼女に報えなかったことが最大の後悔なんです！」

薄暗い小法廷の沈黙に峰雄のその甲高い声が響き渡る。

その瞬間、鳴も央も篁も一斉に峰雄へと視線を集中させた。

——なにか悪いことでも言ったのかな？

冥官たちのあまりの反応の激しさに峰雄は思わず息を呑んだが、次に返ってきたのは鳴の安堵の微笑みだった。

「久々ですわね。これほどの清廉潔白な愛は」

「そうだな……」

姉のその言葉に、あろう事かあの恐ろしい表情の央までもが口元に似合わない笑みを浮かべる。

「よいですか。峰雄さん」

鳴はそう言いながら自分のノートに善を書き記した。

「この冥界では嘘妄言は断罪すべき罪であります、誠なる真実は尊ぶべき善なのです」

「はあ……」

「あなたが奥さんに抱いた愛は私たちが見る限り汚れを知らない清らかな愛。ここではそんな愛が敬われ大きな善として扱われるのです」

鳴はどことなくゆっくりとした口調で峰雄にそう語りかける。

不思議なことに彼女の話だけは中に閉じこもった安堵を引き出し緊張しきった身体を和らげる。

そんな彼女のペンが進むたびに峰雄は僅かながらの希望を見出そうとしていた。

「でも、忘れるでない」

しかし、そんな峰雄を突き落とすように央は威圧的に言った。

「我々は嘘妄言だけは徹底的に叩き断罪する。一つの小さな嘘もここでは殺生に近い大きな罪として数えられるのだ」

「そんなことを言われても……」

「貴様、一人の老婆を殺めたあの事件はやっていないと今でも言い張っているらしいな——」

央の強いプレッシャーを含んだその問いに峰雄の身体は一気に畏縮する。

その瞬間、現世で裁かれた裁判が頭にふっと過ぎたのだ。

「ちょっと待って下さい！」

それを見て、隣で尋問を傍観していた篁が初めて口をはさむ。

「先ほども言いましたが、彼には事件の記憶がほとんど失われているのですよ！」

「でも、警察での自白の記憶は残っているのだから！」

央のその反論に初めて篁の口が止まる。

その瞬間、彼はすこし悔しそうな表情を浮かべた。

「——では、改めて訊く」

そう言うと、央は高圧的に峰雄を見下ろした。

「貴様は未だに事件は自らがやったと認めてはいないな」

「——はい……」

「でも、貴様は一度このことについて自白をしている！」

「——」

その問いに、峰雄は答えることが出来なかった。

どう答えても悪い方に転ぶことは目に見えていたからだ。

「どちらが誠でどちらが嘘でも、貴様は必ずどちらかを偽っていることは明確だ。これがどういう事か解るか！」

そう言うと央はびしっとペンで峰雄を指した。

「どちらが正しいか明確ではないが貴様は生前必ず大きな妄言を吐いた！ これは断罪すべき大

きな罪だ！」

高圧的な央の叫び声が小法廷に響いた瞬間、峰雄の身体は膝からガクッと崩れ落ちた。

そして耳に響くのは央のノートに走るやけに高いペンの音。

致命的な罪がそこに記された瞬間、峰雄の目の前は救いようのない闇に閉ざされた。

篁は小法廷の観音開きの扉を締めると、深いため息をついた。

「困ったものだな……」

篁は小さな声でそう呟くと顔を上げて廊下を歩き出した。

暗く長い廊下に足音を響かせながら篁は胸の中に去来した焦燥感と戦っていた。

最高位冥官である鳴と央の目の前であれほどの大口を叩いた後だから後悔しようもないが、今回は少し口が過ぎたかもしれない。

なにせ、まだ相楽峰雄の空白部分を埋める決定的な証拠が何も出てきていないのだ

廃棄ギリギリの26年前の資料がそんな簡単に出るわけもないが、さすがにあと一週間——そろそろ尻に火がついてきた気分だった。

そんな逸る気持ちを表すように足を速めようとしたその時だった。

「お待ちなさい。篁」

甲高くどこか高圧的な女の声に篁の足はピタッと止まる。

ふと振り向くと善と罪の姉弟鳴と央がゆっくりと近付いてきた

「何でしょうか——？」

「いえ、少し訊きたいことがありましてね——」

「貴様、先ほどの自信は一体何だ」

姉の鳴がその言葉を言う前に弟の央はっけんどんに篁に迫った。

「何だと言われても……」

「とぼけるでないぞ。この亡者上がりの角なし冥官が」

央は更にきつい口調で篁を責め立てた。

「貴様はあの亡者の按検は全て自分に任せろと言ったが、その根拠はどこにあるのだ」

「根拠……？」

「そうだ。決定的な証拠を掴んでいるとか、空白の謎をもう解き明かしているとか——」

「どうなのです。篁？」

一方の鳴はすこし心配そうな表情を浮かべて篁に訊いた。

「我々はあなたを信じていないわけではありませんが、進展状況くらいは知っておきたいのです。そうでないと我々も安心できませんからね——」

——なるほどな…

どうやらこの二人は先ほどの自信の裏側を知りたくてしょうがないらしい。

それを悟った瞬間、篁は涼しげな表情を明るく崩しアハハと笑い声を上げた。

「——何がおかしいのだ？」

目の前で大笑をする篁を見て央は訝しげにそう訊いた。

「いいえ。やはりあなた方の前では大口は叩けないと思ひましてね」

「——どういう事ですか？」

「単刀直入にいきますよ」

篁は眼鏡の奥の黒い眼を光らせ言った。

「今回の亡者について、記憶が完璧に欠落していた部分についての調査ですが——実はまだ何も進んでいません」

「何？」

その言葉を聞いて鳴も央も表情を曇らせた。

「26年前を記した資料が簡単に出てくるなんて無いなんて当たり前。俺はそう思って仕事に当たっていますけど？」

「そういう問題ではないだろう」

央は訝しげにそう言うとじろりと篁を睨んだ。

「貴様、あの亡者に残された時間が一週間しかないのは十分知っているな」

「それくらい解っていますよ」

「貴様はその一週間ですべてが解決できるとでも思っているのか？」

その一言に篁はびたりと沈黙した。

「篁……」

鳴は伏し目がちに篁を見つめるとゆっくりと語りかけるように言った。

「あなたも解っているかもしれませんが、我々が調べた限り彼にはあれ以外に決定的な罪もなければ目新しい善もありません」

「つまり、俺の調査が彼の行く末を決定づけるって言いたいんですね」

「ええ…」

鳴は眉をひそめながら更に言葉を続けた。

「我々冥官が彼の行き末を心配する義理はありませんが、あなたには彼の行き末を左右する責任があるのですよ」

「それくらい解ってますよ。これでも1200年間この仕事をやっていますから」

しかし、二人に迫られても篁は自信に満ちた表情を崩さなかった。

「言っておきますけど、俺はこの仕事に自信がないなんて一度も口にしませんよ」

「でも貴様、後一週間で何が出来るというのか？」

「一週間？ いろいろ出来ますよ」

そう言うと篁は口元に笑みを浮かべた。

「何千年も生きたあんたたちには一週間なんてほんの一瞬かもしれませんが、俺たち人間にとって一週間は短くも長くもなる不思議な時間。何もせずに過ごせば不毛に日は過ぎるけど、使いようにはいくらでも充実させることだって出来ますよ」

「だがなあ……」

篁のあまりの強い自信に、さすがの央も押され気味だった。

「あの広大な資料室から一つの資料を探し出すなど理論的には一週間では無理だと思うが——」

「そんなの、やって見なきゃ解らないだろ」

篁は吐き捨てるようにそう言った。

「大体あなた方に一週間以内に資料が見つからない、俺が仕事を全うできないなんて解る筋合いなんてないでしょう」

「それは——」

「それに、俺はやる前から無理って言われるのが一番嫌いでね、無理だ無理だと言われれば言わ

れるほどやる気が出る性分なんですよ」

彼のあまりの舌鋒の鋭さに央は悔しそうに篁を睨み付け、鳴は呆れ顔でため息をつく。

ついには百戦錬磨の彼らでさえ何も言えなくなっていたのだ。

「あと、一言付け加えますが」

篁はそんな二人に背を向けながら更に言った。

「俺が角のない人間出身だからって舐めてかからないで下さい。人間は追い込まれたときにこそ真の力を発揮できるものなのですから」

篁はそう言うとふっと風を切り暗い廊下を早足で歩き出す。

しかし、その顔には自信に漲った笑みが浮かんでいた。

「——姉さん、奴のことどう思う？」

残された央は姉鳴にふと訊いた。

「そうですね…彼は人を不快にさせるくらいの自信を振りまく節はありますわね」

「まったくだ」

「でも、そうとも言い切れませんよ」

姉の一言に、央はハッと彼女を見つめた。

「彼は一見自信過剰の天狗男に見えるけどそれは大きな間違い。彼の激しいまでの自信は自分を信じ、仲間を信じ、亡者自身までも強く信じている表れでしょう」

「——亡者自身とは？」

「彼は何も掴んでいないと言っていましたが心の中では何かを確信しているのでしょうか。あの亡者の空白の真実を…ね——」

15 逆転の足がかり

ぱらっと資料を開くと古いインクの匂いがぷんと漂う。

もう何度嗅いだか解らないその独特な匂い。

円はその匂いに酔っぱらいそうになりながらもその資料の中身に目をこらした。

しかし、その間にも彼女の席に餓鬼たちが次々と違う資料が運んでいる。

目の前に山のようにそびえ立つ資料の山に目を向けた瞬間、円は深いため息をついて一度開いた資料を封印するように閉じた。

——バツカみたい……

廃棄寸前の26年前の資料を探し始めてはや12日。相楽峰雄のご沙汰が決まる最終審判には一刻の猶予もない時期にさしかかっていた。

それなのに——

例の資料どころか手がかりになる記録一つも出てこない現実。そして、どんどん目に見えて迫ってくる期限。

先輩の涼や雅や直は今でも諦めずに必死こいて探しているけど、さすがにこんな切迫した時期にさしかかると円の胸の中に小さな諦めの気持ちが生まれはじめていた。

——だって26年前の一小市民の資料でしょ？　こんなに探しているんだから出てくるわけないわよ……

そう思った瞬間、円はバンと机を叩くとせわしなく資料を運び続ける餓鬼たちを睨み付けた。

「もう、無責任に運んでこないでよ！」

円はどこにも向けられない怒りを餓鬼たちに当たり散らした後そのまま席を立つ。

そして、治まらない怒りに素直になるように円はそびえ立つ本棚の方へとふらり歩いていった

その本棚に架かる脚立の一番上には涼が次から次へと資料を漁っていく。

真剣な表情で資料を吟味し鋭く赤い瞳で中身に食い入る――

涼にとっては崇高な目的が見えているのだろうけど、円にとっては宛のない作業にしか見えない彼の情熱。

円はそんな脚立の上の彼をじっと見上げると弱音を吐くように一言叫んだ。

「ねえ、もうやめようよ！」

いじらしいほど広い資料室に円の泣き言が虚しく響き渡ったが、それでも涼は彼女を無視するように作業の手を止めなかった。

「考えてみてよ。最終審判まであと一日しかないんだよ。それなのに手がかりなんて何一つ見つかってないんだよ！」

「だから？」

「だからって――」

涼の一言に円は一瞬口ごもって答えた。

「一体、私たちって何のために頑張ってるの？ 何のために有りもしない資料を這いずり回りながら探しているの？ その目的が私――さっぱり解らない！」

「有りもしないって――」

涼は作業する手を止めずに一言漏らした。

「まだ見つかってもないのに無いって決めつけるっておかしくねえか？」

「だって12日間ぶっ通しで探してるんだよ。もう廃棄されたか本棚の奥の奥に封印されているのかどっちかじゃない！」

円のその悲痛な叫びに、涼は沈黙し作業の手をピタッと止める。それをチャンスと見た円は更に攻勢を続けた。

「私、見えない目的のため頑張れるのなんて絶対無理だよ。資料だって絶対に期限内に見つかるわけない！ だから、こんな意味のない作業やめた方が——!!」

「何で無理だって決めつけるんだよッ！」

その瞬間、涼はキッと円を睨み付け一言言い放った

「俺だってさあ、本当に見つかるかどうか不安でしょうがないよ。でも、俺たちが諦めちゃ意味がないしダメなんだよ！」

「でも、もしここで見つかったとしても後一日しかないんだよ！」

「一日あればまとめられるよ」

「——誰が？」

「篁だよ」

涼のその一言に円は訝しげな表情を浮かべた。

「やっぱり無理だと思う…」

「いいや、大丈夫だよ」

涼の表情は自信に漲っていた。

「アイツは言ったよ。二週間のうち13日風潰しに探してダメならそれでいい。資料をまとめるのは一日あれば何とかなる——ってね」

「ホントかしら？」

「信じてねえのかよ」

「——」

その一言に円はピタッと黙り込んだ。

「仕方ねえな…上司を信じられないなんて」

涼はそう漏らすとまた本棚に向かい作業をはじめた。

「俺は思うけどこの仕事で最後に信じられるのは仲間だと思うよ。それが出来なくなったらもう
閻魔^{ここ}庁ではやっていけないだろ……」

「——そんなこと言われても……」

円は渋い顔をしてそう唸るとまた沈黙した。

確かに涼の言うことは間違っていないとは思いますが、実質的に無理にしか見えないこの作業だけは円は到底信じられなかった。

「——やっぱり、涼はお人好しだよ」

「はあ？」

「だって、最終審判まであと一日もないんだよ！ もし有りもしない資料が見つかったとしても、絶対に間に合うわけない——！」

円がそう言った瞬間、遙か頭上から分厚い本が円の頭めがけて降ってきた。

ギョッとしてそれをかわした次の瞬間、雷のような声が広い資料室に響いた。

「だから無理だって誰が決めたんだよ！！」

ハッと上を見上げるとそこには涼が怒りを露わにして睨み付けている。

そして、彼は本棚に並べられた資料を手当たり次第に引っ張り出しては円に投げつけていった。

「無理だって決めつけてるのはテメエの経験不足の脳みそだろ！ そんなペエペエの新人が無理だとかできっこないとか解ったこと言うんじゃないよ！」

「じゃあ、涼はここで逆転できると思ってるの!!」

「それは——」

涼は一瞬自信なさげに呟いたがすぐに忿怒の表情に変え円を睨み返した。

「そんなことやって見なきゃ解んねえだろ！ バカ」

「——本当は自信ないんじゃないの？」

「うるせえよ！」

そう言うともた涼は円に向かって一つの資料を投げた。

ひゅっと風を切って円めがけて落ちる資料。

それは、見事に彼女の額に命中し、乾いた音を出して地面へ落ちた。

「いったぁッ……！」

円は思わず額に手を当てると負けず劣らず恐ろしい顔をして涼を見上げた。

「ふざけんじゃないわ！ 本当に当たったじゃん！」

「それはお前がのろまだからじゃねえの？」

「なんですってえ！」

「ちょっとやめなさいよ。二人とも」

涼と円の諍いを見かねて雅がその間に入る。

「今は喧嘩をしている場合ではないでしょう。だから二人とも仕事に戻りなさい——」

「もう嫌！ こんな地味で苦勞ばっかりの三課なんて！」

「勉強が足りないね。新人はそういう道を歩くんだ」

そう言うともた涼は鼻で円を笑った。

「何がよ！ 未だに外回りから卒業できない劣等生冥官が！」

円はそう言うと涼の乗っている脚立を思い切り蹴った。

すると、ゆらりと脚立が大きく揺れ涼は大きくバランスを崩した。

「——バカッ！ 何しやがるんだ！」

涼は脚立の脚にしがみつくと円を迫力のない目で睨み付けた。

「もう、私こんな仕事やってられないしこんな仕事ばかりの課にも居たくない！ 即刻異動届出してやるッ！！」

「だから！ やめなさいって——！」

「じゃあ、やめれば。私たちは止めないわ」

「って、直さん……こんな時に火に油注がなくても……ッ！」

その様子を遠巻きに見ていた直の心ない一言を雅は青い顔をして止めにかかった。

しかし、そんなことをしなくても円の心はもう決まっていた。

「そんなこと、解ってるわよ！」

そう言うと円はもう一度涼の脚立を蹴り飛ばし、彼に背を向ける。

その衝撃で不安定に揺れていた脚立は更にぐらぐらと大きく揺れた。

「だからッ！ その攻撃はッ——！！」

かろうじて脚立にしがみついていた涼の身体はその瞬間、脚立から振り落とされる。

ズシンと資料室に響き渡る大音響。

それと同時にバラバラと降り注ぐ資料の束——

雅はその瞬間、顔を覆い諦めたようなため息をついた。

「——くそっ！ もう我慢できねえ！！」

舞い上がる埃の真ん中で涼はべたっと尻もちをつき一言吐き捨てた。

そしてその瞬間、涼の表情はみるみる怒りに染まり衝動に任せるように痛む身体を立ち上がらせた。

「この野郎！ よくもやってくれたな！！」

涼はキッと円を睨み付け今にも彼女に食ってかかろうと足を踏み出そうとした。

しかし、その眼差しの先の円は背を向けたままぴたりと足を止めていた。

無惨なほど床に散らばった資料を見下ろす彼女の眼差し。

彼女は床に落ちたある資料をすっと拾い上げ、パンパンと埃をはたきながらじっと見つめた。

「なんだよ……やめたいんならさっさと出て行けばいいじゃないか——」

その場をなかなか去らない円を見て、涼は苛ついたようにそう言い放った。

しかしその瞬間、状況を察知した直は涼を静かに制止した。

「馬鹿ね。ちょっと、黙って見ていなさい」

「はあ？」

涼は何が何だかさっぱり解らなかった。

でも、脚立を蹴り飛ばし涼を振り落とした円に次の瞬間、何かが起きていたのだ。

「1981年——」

円は黒い表紙に金抜きで書かれたその文字を見て一言呟いた。

そして、吸い込まれるようにその資料を開くとパラパラと中身を確認する。

「どうしよう……」

円は一言そう呟くとの動揺したように一頁ずつめくる。そして、めくるたび円はどんだんのめり込み興奮さえ見せ始めた。

「もしかして、探している資料ってこれかもしれない——」

「え——？」

「だって、1981年の中村よねの記録——そして、巻末には例の事件のことも包み隠さず記されている——やっぱり、これが探していた資料よ！」

それを最後まで聞かずに涼は円の手から資料を乱暴に奪い取る。

そして一頁ずつ食い入るような目で見つめ、やはり円と同じように徐々に興奮を隠せなくなっていく。

「お前……これ、どこで見つけたんだ？」

「え？」

「だから！ お前どこからこの資料を探し出したんだよ！」

「気付いてないの？」

そう言うと円は口をへの字に曲げて涼を見た。

「これ、涼が手当たり次第に私にぶつけてた資料の一つなんだけど——」

円のその言葉を遮るように彼女の身体は何かふわっと持ち上げられる。

ハッと円は下を見上げると先ほどまで怒りを露わにしていた涼が彼女にギュッと抱きしめていた。

「でかしたぞ！ 円！」

涼は円の身体を抱きしめるとぐるりと一周回した。

その顔には先ほどの怒りの影は消え去り明るい笑顔が満開に咲いていた。

そんな涼の顔を見て円は釈然としない表情を浮かべた。

——何よ。さっきとは態度が全然違うじゃない……

だが、涼の喜びは更に大きくなり円を放すと飛び跳ねながらまた笑顔を浮かべた

「よーし！ これさえ見つければ俺たちが勝ったようなものだ！」

「でも後一日しか——」

「じゃ、俺この資料を篋に渡してくるわ」

「えっ！ ちょっと待って——」

円の話聞いてか聞かずか涼は資料を抱きかかえたまま足早にその場を後にする。

その足取りもどこか軽やかで何だか楽しそうだった。

「——何よ……あの変わり身の速さは」

そんな涼の後ろ姿を眺めながら円はため息混じりにそう言った。

しかし、その円を眺めている雅と直の表情は二人ともどこことなくにたにたと緩んでいた。

「——どうしたの？」

「いや……」

そう言うと雅は臭く咳払いをした。

「円ちゃん。結構やるじゃない」

「なんだかんだ言って責任感があるんだなあって」

「え？」

「君、異動届出すんじゃないの？」

雅のその一言に円は顔をカッと赤く染めた。

「それは……いいんです！」

「そんな強がらなくてもいいじゃない。どうせ出す気なんてさらさらなかったんでしょに」

素直になれない円を見て直は呆れたようにふっと笑みを浮かべた

なんだか二人に全てを見透かされて、円はふて腐れたように頬を膨らませたがすぐに吹き出したような笑顔になる。

それは悔しいくらいの凶星だったけど、その方がかえって嬉しかった。

しんと静まった館内。ぽつぽつと灯った非常灯の灯り。

ここは昼と夜の区別もつかない冥界だけど、営業時間外の閻魔庁は眠りについているように薄暗く静かだった。

そんな闇と静寂が支配する館内にただ一つほのかに光の漏れる部屋。

そして、微かに漏れるキーボードを叩く軽やかな音。

眠りついた館内の中、生前特捜部三課だけ唯一活気づいているような息づかい。

そんなほのかに灯る光の中、篁はノートパソコンに向かい閻魔帳の最終取りまとめ作業に入っていた。

カタカタとキーボードの上で流れるように踊る手。

青白いディスプレイを見つめる射抜くような目。

残された時間が少ないことわかってはいるが、篁はこの仕事を期限内に片づけられる自信があった。

幸いなことに相楽峰雄の記憶の空白の鍵のほとんどは見つかった資料に書かれていた。

もちろん、今まで誰も知り得なかった新たな事実や、誠と思われた現実が虚無だったことも包み隠さず記されていた。

その見つかった真実を取りまとめるのはそんな難しい作業ではないがそれにもう一つスパイスを加えたい――

篁はキーボードを叩く手を止め机の上に伏せてあった一枚の写真を取り上げた。

こざっぱりとしたスーツを着た中年の男が写った写真――

じっと鋭い目でその写真を見つめながら篁はある考えが頭の中に浮かんでいた。

「よう、仕事進んでる？」

ふと、その少年っぽい声に篁は顔を上げると、そこには憎めない笑みを浮かべた涼が立っていた。

「まあな」

そう言うと篁は写真をまた机の上に伏せた。

「まとめるだけなら簡単だしそんなに時間はかからないとは思うけどね――」

篁はそう言うと浮かぬ表情してまた手を組んだ。

「――どうしたんだよ」

涼は不思議そうな表情を浮かべて篁を見た。

「なんだか迷ってばかりでいつものあんたらしくないよな。何かあったのか？」

「いや——」

そう言うと篁は深いため息をついた。

「彼の空白の真実は大分見えてきたんだけど、見えれば見えるほど俺の責任が大きくなってきたなと思ってね……」

「責任？」

「俺は彼の命運を握っている。俺の裁量一つで彼は救われるか否かが別れてしまう——そう思うと責任重大だよ」

「へえ……それならますますあんたらしくないや」

涼は小さな笑みを浮かべながら言った。

「たかが亡者の行く末じゃないか。それに一番クールになれるのがあんたじゃないの？」

「随分気楽なこと言ってくれるな」

篁はそう言うと呆れたような笑みを浮かべた。

「俺もこの資料を開く前は彼の行く末など頭の片端にもなかったよ。でも、真実が徐々に見えだしたとたん、彼をどうにかしていい処遇に持っていきたいと思ったのも事実だ」

「え……？」

「結論から言うよ」

そう言うと篁は真っ直ぐ前を見た。

「彼は間違いなくシロだ」

その一言に涼は思わず深く息を呑む。

その顔は信じられないと表情だけで言っているようだった。

「でも、残念ながら彼はこのまま最終審判にかけられてしまうと確実に罪を裁断されて地獄へ墮とされるのは間違いないだろう。俺がこの資料を取りまとめたくらいでそれをひっくり返すには少し弱い」

「じゃあ……どうするんだ？」

涼は訝しげにそう訊いた

「今までの流れをそっくりそのままひっくり返す——それには強い印象を残す新たな証拠が欲しいところだがちょっと時間的に厳しいかな」

「まあ、そうだろうな……」

「そこでだな。涼」

そう言うと篁は涼にあの写真を差し出した。

「時間が時間だからギリギリの仕事になると思うけど——最終審判までに彼を冥界に召喚して欲しいんだ」

「今から？」

涼はそう言うと差し出された写真を取り上げじっと見た瞬間、驚いたように顔を上げた。

「コイツが——？」

「そうだ」

篁のその一言に涼は息を呑んでその写真を食い入るように見る。その人物に心当たりがあったのだ。

「お前の報告書も読んだけど、読めば読むたびに彼の存在が怪しく思えてきてね——もう直接問いただした方が早いかなと思ってね……」

「でも、このオッサンまだ定められた寿命は先だと思うけど——」

「最終審判の時だけ呼びよせればいい。早く言えば証人だ」

「証人——」

そう言うと涼はまた写真に目を落とした。

告げられた命令があまりにも唐突過ぎるのか、彼の顔には困惑と動揺が強く見え隠れしていた。

「いいか。涼」

そんな彼の顔を見て篁は静かに諭すようにゆっくりと言った。

「この仕事の成功の鍵はお前の呼ぶこの男にかかっている」

「——え？」

「この男が審判の場に立たない限りおそらく本当の真実は裁けない——俺はそう思っているよ」

そう言うと篁は深くため息をついてふと眼鏡を外した。

「それにね、俺は別に彼を救いたいからこんなに執着しているわけじゃない。ただ、閻魔庁が人間と同じ過ちを繰り返す事がどうしても耐えられないんだ」

すっと真っ直ぐ前を見つめる鋭い黒い瞳。

その目の中には微かだが怒りの色が見え隠れしていた。

「あんたがそんなに真実を迫りかけるのは、もともと人間として生まれて人間の愚かさや不完全さを知り得ているから？」

涼はそんな篁を見てそんな質問を投げかけた

「それもあるかもな」

篁はそう言うと口元に小さな笑みを浮かべた。

「俺も人間界での体験があるからよく解るけど、人が人を裁くってことには限界がある。それは

不完全な人間だから仕方がない話かもしれない。それだから、俺たち閻魔庁は人間にとっての最後の審判の場で本当の真実を裁くべきだと思うんだ」

そう言うと篁はまた眼鏡を着け直し、また言葉を続けた。

「それに人間界の裁判と俺たちの審判が同じ次元だったら——何だか悔しいと思うだろ」

「そりゃ……まあね」

そう言った瞬間、涼の顔に再び憎めない笑顔が戻る

。「あんたはよく冥界にしかできない裁きがあるって言っていたけど、こんな複雑があったなんてな——人間って言うものは意外と深いものだな」

「当たり前だ」

その言葉に食いつくように篁は笑みを浮かべた。

「不完全で邪念ばかりの人間だけど、俺は基本的に彼らのことは愛しているよ。少なくとも冥界の鬼どもよりかは付き合い易いあいてだったな」

「なんだよ、それ……」

その言葉に涼は不満げにそう漏らした。

しかし、そう言いながらも涼は受け取った写真をコートの内ポケットに入れていた。

「——まあ、いいや。上司の命令には逆らえないしね」

そう言うと涼はくるっと踵を返し螢火が灯ったような薄暗い部屋を去っていく。

そして出口にさしかかったとき彼はふと足を止めて言った。

「証人なら任せときなよ。絶対に最終審判には間に合わせてみせる」

「すまん。いろいろ言いつけて」

「忘れたのか？」

そう言うと涼は篁の方を振り返りまた少年っぽい笑顔を浮かべた。

「俺は馬鹿みたいに真実にこだわるあんたに惚れて今まで付いてきたんだ。ここまで来てあんたに加勢しないのはあんたの部下として失格だろ」

涼はそう言い残すと風のように部屋を去っていく。

そんな涼を見て、篁は一瞬呆然と見送ってしまったが、すぐに彼の口元にも笑顔が浮かんだ。

その瞬間、彼は確信したのかもしれない。

明日の最後の審判、奇跡の大逆転が必ず起きると――

怖いくらいしんと静まりかえった控え室。

脇を固めるように無表情で監視する鬼の刑務官が二人。

肌に冷たい感触しか与えないベンチに深く座り峰雄は最後のご沙汰を告げられる時を待っていた。

とにかく冷たい沈黙が長く続くたびに麻痺に近い緊張はどんどん増していき、それと同時に心の中に混じるのはいよいよの恐怖という苦み。

——こんな沈黙もう耐えられない！

膝に置いた拳をギュッと握りしめて峰雄は心の中でそう叫んだ。

凍えるような沈黙と同時に降り注ぐ鬼の刑務官の冷たい視線に恐怖と緊張が混じり合う何とも言えない気持ち悪さが口の中に広がっていく。

出来ることならここから逃げたいのはやまやまだけど、そんなこと許されるはずもない。

峰雄は諦めたようにため息をつく現実を受け止めるようにしっかりと前を見た。

——逃げても無駄なのは解っている。今日告げられるご沙汰一つで自分の全てが決まるんだ。

その重大な決定から逃げられないのは目に見えて解っている——解らなきゃならないんだ！

峰雄はそう心の中で強く呟きながら一生懸命沸き上がる恐怖を薄めようとした。

そうでもしないと気がおかしくなりそうで仕方がなかった。

早くその時が来て欲しくはないけどこの沈黙は耐えられない。

二重の不安が峰雄を襲いかけていたその時外から靴音が響き渡る。

コツンコツンと徐々に近づく高圧的に聞こえる靴音。

そして、その音がピタッと止まった瞬間、控え室の扉がガチャッと開いた。

瞬間、刑務官の鬼たちがぴしっと敬礼する。

そして、その扉から現れたのは篁だった。

「楽にすればいい」

彼は刑務官の鬼たちにそう一言声をかけると真っ直ぐに峰雄の元に歩み寄った。

そして、ベンチに縮こまる峰雄を高いところから見下ろした。

「あの……」

峰雄はそんな篁の顔を不安げに見上げて言った。

「もしかして……もう『その時』が来てしまったの？」

「いや……」

そう言うと篁は厳しい顔を和らげた。

「もう少し時間があるから、ちょっと君と話をしておこうと思ってね」

——不思議だった。

あれほど厳しい表情と厳しい追求で散々自分を追いつめていった男なのに今の彼は今まで見たこともない穏やかな表情を浮かべていた。

そんな彼に峰雄はただただ困惑するのみだった。

「君はこの後の最終審判が不安かい？」

篁は峰雄にそう訊きながら彼の横に腰を下ろした。

「え？」

「不安なのは当たり前だよな。俺もこの裁きを受ける時はとにかく不安だった」

その言葉を聞いて峰雄は驚いた様子で篁を見た。

「あんたも——それを受けたのか？」

「当たり前だろ。俺も昔は罪深き人間の一人だったのだから」

そう言うと篁は小さな笑みを浮かべた。

「まあ俺の時は——とにかく特殊な環境だったからあまり参考にはならないかもしれないけど、下される裁きは裁きとして受け止めるのが一番楽なしのぎ方だと思うよ」

「あんたも裁きを下されたのか？」

その問いに篁は少し物憂げな表情を浮かべた

「今もその裁きに服しているよ」

「——え？」

「未来永劫こうして君たち亡者を裁く事が俺に課せられた量刑なんだよ」

そのことを聞いた峰雄は思わずハッと息を呑んだ。

彼は1200年前の世を生き、その後地獄ですっと同族の人間たちを裁き続ける——それは彼にとって永遠に続く苦しみであったはず。

そう思うと、急に今まで自分を散々追いつめてきた篁がとても不憫にさえ感じた。

「まあ、俺の話は置いといて——」

そう言うと篁はすっと峰雄へと視線を移した。

「君だって今言いようのない恐怖と不安と緊張で潰されそうなんだろう」

その一言に、峰雄は硬い表情を浮かべ一瞬沈黙した。

しかし、その沈黙は長く続かずすぐに声を震わせて気持ちを吐き出した。

「やっぱり、地獄逝きは怖いよ……」

そう言った瞬間、彼の顔に恐怖が一気に広がった。

「まだ、俺が過去に人を殺めたことさえ信じられないし思い出せないのに、それが一人歩きして裁かれるなんて怖くて仕方がないよ！ そして、その罪に対して何も出来ない自分が悔しくて、悔しくて——」

峰雄はそれ以上の言葉につまり自分の気持ちをさらけ出すように嗚咽した。

それは冥界に来て初めての激白だった。

そしてその瞬間、峰雄はわけもわからず皺の多い目から涙がポロポロとこぼれた。

「嫌だぁ……ワケの解らない地獄逝きなんて絶対に嫌だぁ……」

まるで子供のように、峰雄はただただ泣き崩れる。

それは冥官たちから見れば愚かな亡者の遠吠えにしか見えないだろうけど、それでも沸き上がる恐怖を吐き出さないとやっていけなかった。

「いいよ。今は泣き叫んで気を紛らわせればいい」

しかし、そんな峰雄を見る篁の態度は驚くほど穏和で優しかった。

「君が今まで体験したことのない恐怖と戦っている事は俺が一番よく解っている。だから今は好きなだけ泣けばいい」

「でも、あんたは俺みたいな甘ったれた人間が大嫌いだって——」

「嫌いだよ。今でもひっぱたきたいくらいだ」

その言葉に峰雄ははっと顔を上げる。しかし、篁はじっと前を見て言葉を続けた。

「でも、人間って本質はみんな自分に甘いし、どうしようもない困難を目の当たりにしたとき初めて弱さをさらけ出すものだと言は割切ってるよ」

そう言うと篁は峰雄に顔を合わせずにずっと白いハンカチを差し出した

そんな些細な優しさを見せる彼は少し照れくさそうだった。

「どうして？」

峰雄はおずおずとその白いハンカチを受け取りながら訊いた。

「どうして、今日のアなたはそんなに優しくしてくれるんだ？」

「別に、いつもと変わらないつもりだけど？」

そう言うと篁はふっと笑みを浮かべた。

「多分、今日の俺が優しいと思えるのは冥界があまりにも冷淡だからじゃないかな。そんな世界だとほんの小さな優しさが何倍も大きく見えるからね……」

その一言に、また峰雄の目頭は熱くなる。

思わずこぼれそうになった涙を峰雄は受け取ったハンカチで拭い、そしてかみ殺すように言った。

「——ありがとう……」

「別に感謝される覚えはないけどな」

篁はそう言い残すと、ずっと冷たいベンチから立ち上がった。

「あと最後に、今日の最終審判当たって君に二三注意してもらいたい点がある」

「はい？」

その言葉に峰雄はハッと頭を上げる。

もう目の前の篁は温かな人の顔ではなく冷たい冥官の顔をしていた。

「一つは閻魔王についてだが——」

「どんなお方なのですか？」

篁の話を守るように、峰雄は俯きながらそう訊いた。

「見てみたら解るよ」

その問いに答える篁の口元には笑みが浮かんでいた。

「少なくとも、君たちが現世で想像する閻魔王からは大分かけ離れたお方だと思うよ」

「へえ……」

そんなこと言われても、今の峰雄には閻魔王は大きな冠をかぶり真っ赤な顔で忿怒し雷を落としながら人を裁くイメージしか浮かばない。それよりも大分かけ離れたとはどういう事なのか——想像さえつかない話だった。

「それでだな……」

篁は咳払いしながら話を続ける。

「閻魔王はとにかく曖昧が嫌いなお方ね……『解らない』『記憶にない』という言葉はあの方の逆鱗に触れるのと同じだ」

「え……」

その言葉に、峰雄の顔は一瞬凍り付く。

その当時の記憶のない峰雄に道が残されていないのは明白だったのだ。

「知っての通り、君の現在の記憶能力では自分への弁護どころか、愚かな答えで閻魔王を下手に憤慨させてしまうことだってある。そこでだな——」

そう言うと篁は涼しげな視線を峰雄に向けた

「君は明確かつ最小限にあのお方の質問に答える、攻略法はこれだけしかない」

「そんな……」

その一言に、峰雄は絶望したように口を開いた。

「このまま普通に答えて終わったら、それこそ俺の無罪は証明できないってことじゃないか！
それじゃあ——地獄は确实じゃないか……」

「無駄に喋って閻魔王を怒らせても地獄行きは変わらない」

「でも、それじゃあ——！」

「いいか、これは君にとって正真正銘最後の裁判なんだ！」

冷たく静まりかえった控え室に篋のその言葉がびんと響き渡る。

「確かに君は現世の裁判では有罪と判断されて罪に服した。でも君が言うとおりの人が人に下した
限りなく疑わしい罪で間違いだったかもしれない！」

「間違い……」

「この最終審判は不完全な人間が下す裁きじゃなく、真実の目を持った『神』である閻魔王が直
々に下す裁きなんだ。だから——人間界で否と言われたことの真逆の裁きだって当然あり得る
んだ」

「真逆？」

「人間界で全ての裁判に負け続けているからって、この最後の審判が負けだって決まったわけじ
ゃない」

「でも。そんなの無理だよ」

峰雄は居ても立ってもいられず篋にそう漏らした。

「記憶がなくて曖昧な答えしかできない。閻魔王が怖くて自分の弁護も出来ない。ただ言われた
ことに短く答えるだけの俺にそんな逆転出来るはずが——」

「逆転なんかじゃないよ」

そう言うと篁はにっと笑った。

「君に隠された真実が解きあかすだけ。それだけで審判はいくらでもひっくり返せる」

コツン、コツン――

暗くつるつるとしたその場へと続く廊下に複数の靴音が響き渡る。

周りを囲むのは巨人のような身体を揺らし表情のなく歩く刑務官の鬼ふたり。

そして彼らが導くままに峰雄はそのつるつるとした廊下を踏みしめていった。

その場が徐々に近付くたび峰雄の身体は恐怖と不安が強く支配していく。

しかし、それとは別の意識で逃げては駄目だという覚悟も知らぬ間に働いていく。

緊張、恐怖、不安、覚悟、観念――

峰雄の中でいろんな感情が入り交じり、それが一歩ずつ峰雄を動かしていく。

ただ真っ直ぐ、自分の全てが決まるその場へ。

逃げることもなく、わめくこともなく、静かにその場へ、その場へ――

やがて吸い込まれるような目の前に大きな禍々しい扉が見えてくる。

きっとあの向こうには想像も出来ない世界が待っているに違いない。

ずっとその前に立てばもう恐怖や緊張は薄れ覚悟の境地に入り始めた。

もう、どうにでもなれ――

そう吐き捨てるようにそう思った瞬間、その場に誘うように扉が重々しく開いた。

眩いほどのその場の光。

それに目を細めながらもまた一步一步その場へと足を踏み入れた。

目の前には鋭い目をした冥官たちが居並び、二階の傍聴席でも鬼たちでいっぱいになっている

今まで体験したことのない広大な法廷。

肌を刺すような緊張感は更に高まったけど、でも峰雄にはもう何も感じられなくなっていた

そして、広い法廷をゆっくりと横切り峰雄は断崖絶壁のような被告人席へと昇っていく。

天まで届こうかというその場所に立つと、それ以上に高く大きな台が目の前に迫っている。

——おそらく、あの場所に閻魔王が立ち裁きを下すのだろう。

峰雄の中にまたなりを潜めていた不安と恐怖が復活し影を落とし始めた瞬間、広大な法廷に甲高い小槌を振り下ろす音が響き渡った。

「皆の者、静粛に」

あの姉弟冥官の弟の方である央が小槌を振り下ろしながら威圧的な声を出し、周りのざわめきを制する。

その言葉に反応するように周りの傍聴人たちのざわめきは徐々に静まった

「これから特A級被告人相楽峰雄の最終審判を執り行うに辺り、我が閻魔庁長官であらせられる閻魔王様をご入廷される。皆の者ご起立を——」

央がそう言った瞬間、居並ぶ冥官たちや傍聴人たちがザッと起立し、皆あの威圧的に大きな台の向こうのヴェールへと注目していった。

心臓の鼓動のように鳴り響く太鼓の音。

そしてそれと同時にジャーンと鳴り響く銅鑼の音。

何重にも折り重なったヴェールが一つずつほぐれていき徐々に彼の輪郭が浮かんでいく。

そして最後の薄いヴェールが剥がれた瞬間、峰雄は閻魔王の表情にアッと驚いた。

すらりとした細身の身体。優雅に着こなした唐衣。頭には冠を載せ、口ひげは綺麗に整えられてスマート——明らかに別次元の神聖さを纏ったその姿。

なんて穏やかな表情なのだろう——

初めて対面する閻魔王の顔を見て峰雄は呆然とその姿をしたから仰ぎ見た

そこには現世で思っていた赤ら顔で憤怒した鬼神の姿は見受けられない。なんとも涼やかな顔をした聖人のような美男子だった。

そんな峰雄をよそに閻魔王は装飾が施された椅子に優雅に座るとすっと手を出し傍聴人たちに着席を求めた。

その合図に忠実になるように冥官や傍聴人たちは一斉に着席し、また法廷に沈黙が訪れた。

「被告人、名を名乗れ」

閻魔王は真下の被告人席に立つ峰雄をじっと見下ろし持った笏をすっこのど元に突きつける。

その瞬間、彼の穏やかな顔からギラリと鋭い視線が放たれ峰雄の身体を射抜いた。

「さ、相楽峰雄です……」

峰雄はその視線と突きつけられた笏に怯え震えた声で小さくそう答えた。

見た目が優しいから何とかかなると言う話ではない。閻魔王は閻魔王でありその事実はなにも変わらないのだ——

「これからおぬしが現世で行った罪と善を陳述する。意義があったら申されよ」

閻魔王は威圧的にそう言うと、隣に座った姉の鳴の方をちらっと見て合図を送った。

それに反応するように鳴はすっと席を立ち、ぱらっと陳述書を開いた。

「特A級被告人相楽峰雄、1951年8月25日生まれの享年54歳2ヶ月9日。生まれは埼玉の片田舎に生まれ、母親を速くに亡くしています。やがて母の忘れ形見のように可愛がられる弟に激しい劣等感と嫉妬を抱き、山に置き去りにするなど冷たく当たった事実があります」

「ほう、山に——ねえ」

そう言うと閻魔王は形のいい顎を触りながら峰雄を見下ろした。

「そなた、その時弟など死んでもいいと思ったのであろう」

「いいえ！ そんなことは——」

「では！ 何故齢いくばくもない弟を山へ置き去りにしたのだ！」

閻魔王の鋭い指摘に峰雄は絶句せざるをえなかった。

峰雄はガクッと肩を落とし沈み込むようにうなだれるしかなかった。

「まあ、おぬし自身も子供であったから心に湧いた悪戯心だったとも言えるが、そなたがその時重い罪を負ったのは間違いあるまい」

そう言うと閻魔王はまた持った笏を峰雄ののど元に突きつけた。

「さあ、はっきり言うのだ！ そなたはその罪を認めるか否かを！」

閻魔王のその追及に触発されるように周りを取り囲む冥官たちも「罪を認めろ！ 認めろ！」と野次を飛ばしてきた。

最終審判独特の殺伐とした空気がさらに峰雄の神経を痛め尋常じゃない精神状態へと追い込んでいく。

そして、ついに峰雄はその言葉を口にした。

「罪を……認めます！」

本当は認めたいなんて思わない。思わないけど周りの空気がそれを促す。

峰雄はそんな空気に流される自分が急に悔しく思えてならなかった

「——陳述を続けろ」

その言葉に満足したように、閻魔王は笑みを浮かべて鳴に合図を与える。

それを見て、鳴はまた感情なく陳述書を語り出した。

「それ以来、彼は弟や父親とそりが合わなくなり、中学卒業を機に逃げるように故郷を去りました」

「逃げるようにな？」

「はい。彼は故郷を捨てると同時に自分の夢を追うことを選んだのです」

「ほう…」

閻魔王はそう唸ると、蔑んだ目で峰雄を見た

「でも、大都会に出ても一山も当てられなかった——と言うわけだな」

尋問がその通りなのか、それとも質問に悪意を感じたのか、峰雄は何も答える事が出来なかった。

「でも彼は東京に出たことで生涯の伴侶である伊世と出会うことになりまして、全くの無収穫だったわけではありませんよ」

「ほう」

「彼は、彼女の恋心こそ最初は解りませんでした、それを解った瞬間彼は彼女を生涯愛そう、生涯幸せにしようと何とか努力はしたですよ」

「——でも、一山当てると言う夢も彼女を幸せにすると言う夢も結局は適わなかったか」

そう言うと閻魔王はまた蔑んだように峰雄を見下ろした。

「その通りです。閻魔王様」

鳴は陳述書の頁をぱらっとめくると深刻な顔をして述べた。

「ここからは例の事件の話へと突入していきますが——」

「この男にはそのとき記憶が欠落しているというのだろう」

閻魔王は鳴の言葉の詰まりを埋めるように一言そう言った。

その瞬間、周りの冥官たちがざわざわと騒ぎ出しお互いに顔を見合わせ始めた。

「記憶がないなどもってのほかではないか」

「それでは審判ができません」

冥官たちは口々にそう言い、わかに法廷は騒がしくなる。

しかし、その瞬間あの小槌が振り下ろされ威圧的な音が法廷に響き渡った。

「皆の者、ご静粛に！」

中央の音が張りつめたように響くとまた法廷は殺伐とした沈黙に閉ざされる。

そして冥官や傍聴人たちの視線は一気に峰雄へと集中した。

「記憶が欠落していると言うことは仕方がない話だが、審理は審理で進めなくてはならぬ。解るな」

閻魔王はじっと峰雄を見下ろしながらそう諭す。その言葉に峰雄は黙ったまま頷くしかできなかった。

「まず訊きたいのが、そなたは一度人間界の警察で尋問されたとき罪を潔く認めているが、裁判では一転して無実を訴え始める。そして死後、我々の元に来ても罪を否認し続ける——」

そう言うと閻魔王はギラリと目を光らせて恐るべき質問を峰雄に突きつけた。

「そなた、本当のところどの告白が誠なのか？」

やはりと言うべきか閻魔王は峰雄の過去の両舌の真意を詳しく聞き出してきた。

それは了解済みだったはずだったが、やはり記憶が曖昧な点を聞かれると頭の中が混乱してしまう。

峰雄は怯えたようにおどおどと閻魔王を見上げると、声を震わせ小さな声で答えた。

「私は……やってません」

「何故そういえる？」

「それは——」

閻魔王の矢継ぎ早に来る質問に、峰雄の言葉は完璧に詰まる。

よく考えてみるとやってないという決定的な自信なんてないのが本音だ。でも人を殺めた覚えもないから否定せざるを得なかった。

「先の審判でも触れたはずだが、おぬしのその二枚舌はどちらかを偽っているのは明白なのだぞ」

「でも、俺は人を殺した覚えなど——」

「黙れ！」

その瞬間、今まで涼やかな表情を浮かべていた閻魔王の顔が一気に変わる。

つり上がる目、むき出す牙、カッと赤くなる顔——

時折口から小さな青い炎を出し、自分が知っている閻魔王そのものの表情になっていた。

「よいか。おぬしは一度罪を認めしばらくしてそれを覆した。妄言という罪はこの世界では殺生と並ぶ大罪であるぞ！」

「でも、仕方がなかったんです！」

その瞬間、峰雄は我を忘れて弁明した。

「俺はあの時、拷問に近い取り調べや裁判の繰り返しで頭の中がおかしくなっていて、そこから逃げたいが為に嘘を言ったかもしれない！ でもそれって仕方ない話じゃないでしょうか？」

「何が仕方がないだ！」

そう言いながら閻魔王はふんと鼻で笑った。

「私はいくつもの心の弱い人間どもを裁いてきたが、現実から逃れるために嘘をつく人間ほど愚かで醜いものはない。そして、それを仕方ないと片づける人間などもってのほかだ！」

そう言うと閻魔王はすっと笏を峰雄に突きつけて言った。

「もし仮に、おぬしが冤罪であったとしても、妄言の罪を犯したことは変わらぬ事実だ！」

「そんな……」

峰雄は力なくそう唸ると、がっくり肩を落とした。

愚かな答えで閻魔王を下手に憤慨させてしまうことだってある——峰雄の脳裏に篁が言った言葉がその瞬間ふっと過ぎる。

まさに今の自分は弁明すればするほど地獄へと近づいているようなものだ。

「それにおぬしは未だに果てしなく黒に近い灰色なのだ。もしかしたらその手で人を殺めたかもしれぬ」

閻魔王はそう言うと口元に邪悪な笑みを浮かべ峰雄を見下ろした

「それは、絶対にやってません！！」

「なぜ、そう言いきれる？」

「え…」

「記憶も曖昧のくせにどうしてそう断定できるのだ？」

閻魔王のその問いに、峰雄は絶句するしかなかった。

そう、やったと言う明確な記憶もなければやってないと言う自信もない。

今の峰雄という存在自体が閻魔王が一番嫌う曖昧そのものだったのだ。

「もしや、おぬし……いつかの人間界での失敗のように罪から逃れようとまた嘘を重ねてはおらぬか？」

「そんな……滅相もない！」

峰雄は悲鳴に近い声を上げてまた下手な弁明を繰り返した。

「確かに俺には事件の記憶がありません。そんな俺が事件のことについて弁明するのは説得力に欠けるかもしれない。でも——俺は嘘をついているつもりもないし、本当の気持ちだけをさらけ出しているつもりです！」

「でも、それは記憶がないから言える話であろう」

閻魔王のその一言に、周りを取り囲む冥官たちも歩調を合わせて野次を飛ばす。

「記憶がないで通すな！」

「卑怯な人間め…冥界をなめるでない！」

あちこちから飛ぶどすの効いた声とそれを静粛する甲高い小槌の音。

——何だよ、冥界も人間界も同じじゃないか……

そんな周りの状況を見て峰雄は絶望しそうになったその時だった。

「閻魔王」

ざわめく冥官たちの間からずっと長い手が上がる。

その瞬間、初めて篁は法廷で発言した。

「彼の記憶の空白について発言を求めたいのですが……」

その一言に居並ぶ冥官たちや傍聴人たちがまた一層どよめく。

それを沈めさせるように央はさらに小槌を振り下ろし「静粛に！」と言い放った。

「どうでしょう。閻魔王様……」

鳴はそんな篁の様子を見て閻魔王に指示を仰いだ。

だが、閻魔王は気にしない様子で前に一步出た篁に話しかけた。

「篁。おぬしはこの亡者の空白に徹底的にこだわっていたようだが、結局おぬしは本人さえ知り得ない真実にたどり着けたのか？」

「ええ……」

その問いに篁は自信に満ちた笑みを浮かべた。

「記憶と共に消え去る事件などあり得ませんからね……」

彼のその表情に閻魔王は初めて興味を抱いたように発言を続けさせろと手をずっと挙げて合図する。

その合図と共に、法廷にいる冥官たちの視線は一気に篁へと移っていった。

「皆さんも知っての通り、彼はこの閻魔庁に足を踏み入れたときから記憶の欠落した特異な亡者でした。そして、今でも事件の間の記憶は完璧に失っており、このままいつものように尋問すれば真実をうやむやにならざるを得ないでしょう」

「では、どうするのだ！ この者は裁けないとでも言いたいのか！」

一人の冥官が篁に異議を申し立てるようにそう叫んだが、篁は気にする様子もなく淡々と言葉を続けた。

「我々の使命は亡者に隠された真実のみを裁き、閻魔王に最も正しい判断を仰いでもらう事です。それが出来なければ彼に所詮冥界も人間の裁判と同じと舐められてしまいますからね」

そう言うとき、篁は峰雄の顔をちらっと見た。

その瞬間、峰雄には彼がほんの小さな笑みを浮かべたような気がした。

「面白いことを言う男じゃ」

閻魔王は篁の言葉を聞いて豪快に笑うと次の瞬間、ぎらっと目を光らせ彼を睨み付けた。

「では、おぬしは私に正しい判断が出来るくらいの強い真実を掴んだと言うわけだな」

「俺も閻魔王が判断を誤るのは正直見たくありませんからね」

そう言うとき、篁は眼鏡をくいと上げ閻魔王を見上げた。

「このまま書かれた資料通り裁けば簡単ですがおそらく真実にはたどり着けない。それではあなたの気高いプライドが許さないでしょう」

「ふん。生意気なことを……」

そう言う閻魔王だが、口元には笑みさえも浮かんでいる。

「では、その私を納得させる真実を見せるがいい！」

閻魔王のその強い力のこもった声は法廷中に響き、そしてそれは篁への視線の集中として返ってくる。

しかし、今の彼にとってそれは心地よいようにさえ峰雄の目に写った

「亡者、相楽峰雄よ」

篁は強い口調でそう言うとき、キッと峰雄を睨み付けた。

「今からあの事件の日のことを覚えているところまで言って欲しい」

「え……？」

「解らないところは解らないで構わない。だが記憶がなくなるギリギリまで思い出して欲しい」

篁の急な質問に、峰雄は驚きを隠せなかった。

でも、彼は鋭い目で峰雄を見ているが口元はうっすらと優しい笑みを浮かべており、それを見たたん峰雄は篁に全てを委ねる決意をした。

「あの日——人間界でも何度も証言したけど、本当に俺の中ではただ過ぎ去っていった一日の一つとしか認識がないと言うのが本音です。だからあの日誰と会って誰と喋って誰と何をしたかなど——詳しいことはよく覚えていません」

そう言いながら峰雄は必死に自分の頭にある空の引き出しを漁り始める。

何でもいいから手がかりは残ってはいないか。何でもいいから思い当たる記憶はないか。

峰雄は丁寧にその日のことを振り返りながら静かに口を開いた

「ただ…あの日、俺は多分小銭入れを職場でなくした——と思うんです」

「後に殺人の物的証拠として抑えられるあの黒革の小銭入れだな」

「でも、俺は俺が殺したとされる婆さんの家でそれをなくしたのは絶対にあり得ません！ 何故なら——俺が小銭入れをなくした事を知ったのは昼休みだったから…」

その一言に法廷が一瞬どよめいた。

冥官たちは揃ったように資料をめくり語られる事実と照らし合わせ微妙に食い違う二つの話に驚嘆し始めた。

「何故、そういえるのだ？」

篁は低く凄みのある声で峰雄に問うが、峰雄は迷うことなく明確に答える。

「あの日の昼休み、俺は煙草を買おうとしたらいつも上着のポケットに入れているはずの小銭入れがなかった。だから多分昼休みの前になくなったんだと思う」

「では昼の時点で君の手元には小銭入れはなかったということだな」

「はい…」

その一言を聞いて、篁は閻魔王の方を振り向き高々と訴えた。

「彼が殺したはずの老婆の死亡推定時刻は午後7時12分。その場に落ちていたのが彼の小銭入れというのは彼の話を書く限りでは矛盾点ばかりだと思いませんか！」

「ちょっと待て！」

それに異議を唱えるようにすっと手を挙げたのは水牛の角に金色の目の冥官。

そう、閻魔庁に来て初めての研修会で荒くれの亡者たちを一喝していた生前特捜部一課の牛頭だった。

「先ほどから黙って聞いていればおかしい誘導尋問ばかりしおって——貴様は最終審判を汚す気か！」

その一言に、一度なりを潜めていた冥官たちの野次が一気に高まる。

その力を借りるように牛頭は更に篁を責め立てた。

「この亡者は衆知の通り記憶が曖昧でさらには心が弱く愚かだ。そんな虚弱な亡者なら小野審議官の腕なら一撃で手玉に取れるのではないかな？」

その瞬間、法廷中は「そうだ！ そうだ！」の大合唱が起きた。

また流れは悪い方へと流れ出そうとしたその時、篁はいつも通り涼やかな表情を浮かべて反論した。

「俺にしてみればその考えが愚かだと思えますね」

「何…」

その言葉を聞いた瞬間、牛頭の表情が一気に引きつったが、篁はお構いなしに言葉を続けた。

「あなたは彼が記憶も曖昧だと仰いましたが、そんな彼に誘導尋問を仕掛けたって真実なんて導かれるわけありませんよ」

「しかし、この男は事件そのものは覚えていないのだろう」

「そうですが？」

牛頭の反論に篁はしれっとした表情で答えた。

「ならば、その証言はかなり疑問を持たざるを得ないと私は思うが——小野審議官はどうお思いか？」

牛頭のその問いに冥官たちの目が篁へと注目する。

しかし、その篁の答えは驚くべきものだった。

「その通りですよ。牛頭審議官」

篁はあまりにもあっさりとして非を認めた事にまた法廷中がざわざわと騒ぎ出したが、それを気にすることなく篁はさらに言葉を続けた。

「今の彼からどんなに有力な証言を引き出したって何の効力もない。それは誰の目にも明らかな事実です」

「つまり、無駄だと認めるのだな」

「無駄ではありませんよ」

そう言うと篁は口元に不敵な笑みを浮かべた。

「確かに今は何の効力もない弱い証言ではありますが、全くの無駄だとは思わない方がいいですね。何せこれからこの証言が最も重要になってきますから——」

篁はそう言うと閻魔王の前に出ると、彼の顔を見上げた。

「——閻魔王。ここで証人の入廷を許可して頂きたいのですが……」

「証人とな……？」

その言葉は周りの冥官たちならずとも、閻魔王や鳴と央の姉弟、そして峰雄まで困惑させた。

予期しない篁の提言に法廷はさらに慌ただしくなりざわめいた。

「その証人とは何者じゃ？」

閻魔王はその提言に食いつくように身を乗り出して問うた。

篁は自信満々に言い放った。

「彼の空白の全てを知りうる人物です」

その言葉に一番驚いたのは周りの冥官たちではなく峰雄本人だった。

一体、記憶の空白を知る人物って誰だ？

鬼なのか、人間なのか、もしかしたらものすごく近い人間——？

いろいろ考えたけどその人物の痕跡一つ峰雄は思い出すことが出来なかった。

「ほう……面白いのう」

篁のその自信に満ちた言葉を聞いて閻魔王は整えられた髭を触りながら興味深げな笑みを浮かべた。

そして、すっと持った笏を突き出すと威厳に満ちた声で言い放った

「証人の入廷を許す！」

その言葉が響き渡った瞬間、法廷の最後方の扉がそれに反応するように勢いよく開き冥官たちの目はその開いた扉へとすばやく移動する。

そして、その扉から出てきたのは一人の人間だった。

ノータイのスーツに白髪交じりの薄い頭。年は五十前後、すこし小綺麗で社会的地位の高そうな雰囲気だ。

だが、まだこの場に來たばかりであるのか、立ちほだかる閻魔王と居並ぶ冥官を前にして彼はガクガクと足を震わせ完璧に怯えきっていた。

「ほら、さっさと進めよ」

そんな男を急かすように少年の鬼涼は彼の背中を小突く。

どうやら『証人』を連れてきたのは彼なのだろう

「これは夢なんだろう！」

彼は恐怖に顔を歪めながら思わずその場で涼に泣きついた。

「なあ、何のために俺を地獄なんかに入れてこられたんだ！ 俺、死んだなんて認めない——！」

「うるせえな！ さっさと行けって言っただろ！」

涼は鬼らしく牙をむきだしてそう怒鳴ると、すっと手を彼に向けてかざした。

その瞬間、彼は見えない力に押されるように意に反して法廷の真ん中へと足を速めた。

刺すような冥官たちの鋭い視線。

その視線を避けるように俯き加減に歩く彼。

まるで自分と同じような立場にいる彼の姿を見て峰雄は少しだけ同情を覚えた。

やがて、閻魔王の前に突き出されるように躍り出た彼は怯えたようにきょろきょろと周りを見回す。

周りは恐ろしい顔をした鬼ばかり。

ただ例外は被告人の峰雄と人間出身の冥官小野篁くらいだろう。

「証人よ。名を名乗れ」

閻魔王は笏を彼に突きつけ威圧的に一言尋ねたが、その問いに彼は動揺を隠しきれない様子で一言尋ね返した。

「証人って……俺のことですか？」

「他に誰がおるのだ！」

その言葉に閻魔王はまた顔を赤らめて激昂する。

その瞬間、法廷に一筋の稲光のような緊張が走った。

「私はこの閻魔庁の長の閻魔王であるぞ！ 貴様ごときの愚かな人間に指図される筋合いはない！」

閻魔王の逆鱗に触れた証人の彼はその瞬間、激しく狼狽し震え上がった。

そして恐怖に満ちた声で「すみません！ 私が愚かでした！」と叫び、頭を垂れた。

「証人、早く名を名乗りたまえ」

惨めなほど怯えた彼を見下ろしながら央は冷やかに尋ねた。

——もう彼には名乗るしか道はなかった

「俺の名前は——吾妻…俊幸です！」

吾妻俊幸——

その名前に一番驚きを隠せなかったのは他でもない被告人の峰雄であった

事件が起きるまで目をかけていた職場の後輩。そして、妻が昔付き合っていた男——

「あの……」

吾妻は小さく頭を上げると赤い顔の閻魔王を見上げた

。

「差し出がましい質問をいたしますが……何故、私は地獄に堕ちたのでしょうか？」

「証人さ」

その瞬間、篁の声が張りつめたように響き渡る。

「君は被告人相楽峰雄の記憶を埋める鍵として閻魔庁に召喚されてきた証人だ」

「相楽……峰雄？」

そう言うと吾妻はうろたえながら被告人席の峰雄の顔を見た。

「まさか……相楽先輩の裁きの場なのか？」

「その通りだ」

「そんな——」

吾妻はその言葉を残すと急に動揺したように目を伏せた。

それは、何か心に秘めた恐ろしい事実を必死に隠そうとする様子が見て取れた。

「君はやっぱり何かを隠しているね」

篁はそんな吾妻の表情を見切ったように一言そう言ったが、吾妻は何も答えず俯くばかりだった。

「君が彼の前で当の事実を打ち明けるのは正直難しい選択だってことは重々知っている。でも、君の否で彼が地獄に落ちることは君の将来にとってもよくないと思うけどね」

「そんなこと…知ったこっちゃない」

吾妻は吐き捨てるようにそう言った。

「先輩の無実を証明するために何故俺が使われなきゃいけないんだ。何故俺がわざわざ地獄まで来てこんなはめにならなきゃいけないんだ。俺は——そんなお人好しにはなれない！」

「わがママを言うな！ 子供ではないだろう！」

その瞬間、篁は激しく激昂し吾妻を叱責した。

「ここは閻魔庁の法廷なんだぞ！ 君たちみたいな人間たちがわがままで証言を拒否出来るような場ではないんだ！」

「でも……」

「これ以上この場で閻魔王を怒らせたならこれから君の行く末も危うくなると思うがそれでもいいのか？」

その言葉を聞いて吾妻はハッと閻魔王の顔色を窺うと、閻魔王は顔を赤く忿怒させ金色の瞳を光らせて吾妻を睨み付けていた。

その表情を見て吾妻はひっと声にならない恐怖の声を上げると、怯えたように身体を震わせた。

——そう、もう彼に残された道は証言するほかはなかったのだ。

「証人、吾妻俊幸よ。これから君は真実のみを証言しなさい」

篁は先ほどの激昂が嘘のように冷ややかな口調で彼に告げた

「万が一、嘘偽りを言えば君の大きな罪として加算され後々により深い地獄へ追いやる可能性があるので注意してもらいたい」

「——はい……」

吾妻は観念したように小さな声で一言返事する。

そんな彼をちらっと見た後、篁は淡々と彼に尋問しだした

「君は11月26日のあの日、どのように過ごしたのか？」

「どのようにって…普通ですよ」

吾妻は憮然とした表情を浮かべて一言言った。

「昼間は現場で働いて、その日は早番だったから夜は早く切り上げて帰れたんだ。それから——家で一人過ごしていたと思うけど——？」

「普通に——ね」

そう言うと篁は眼鏡をくいと上げて吾妻を見た。

「ならば、君はその日先輩である相楽峰雄におかしな点はみられなかったかい？」

「おかしな点って言っても——二六年前の話覚えてなんかないよ」

「そうかな？ 君にとってこの日は生涯忘れられない一日になったと思うけど？」

篁はそう言うと口元に自信を満ちた笑みを浮かべたが、吾妻はとぼけたように首をひねった。

「どういうことだか——」

「あんまり閻魔庁を舐めて欲しくないって言っているんだ」

強い口調でそう言い放つと篁は、すっと一つの資料を高々と掲げた。

「いいですか、これは1979年11月26日——中村よねの最期の生前の記憶をまとめたものです」

「え…？」

その資料の登場に動揺したのは吾妻だけではなく峰雄も同じだった。

篁の言っていた閻魔庁にしかできない非常識であり得ないこと——それがこの資料の存在なのだと思ったとき足が震えて崩れそうになった。

「ほう、やはりそれを見つけてきたか…」

閻魔王はその資料を見て満足げな笑みを浮かべた。

そして篁は何かの合図を出すように手を差し出すと、当たりの証明はゆっくりと落ちていき一筋の青白い光りがふわりと白壁を照らす。

いつの間にか広大な法廷の上半分が巨大なスクリーンになり、その時を映し出していたのだ。

「その日、被害者中村よねはニュース番組を見ながら夕食を取っていた。時間は午後七時頃。事件の起きる一二分前くらいだった——」

無音の映像の老婆は色あせたテレビに釘付けになりながらご飯を頬張る。

それはこの後起きる悲劇など微塵も感じさせない、何気ない日常の風景。

しかし、その瞬間は突如彼女に訪れる。

その瞬間、映像の彼女はもたもたと立ち上がり玄関の方へとよたよたと歩いていく。

時々ノイズの走る荒れた映像。

ゆらゆらとどンドン近付いていく玄関。

映像は無音だけど、「どちら様？」と彼女は言ったのだろう。一瞬彼女の動きが止まりそしてつっかけに足をいれた。

そして、しわくちゃの手が玄関扉にかかった瞬間、凶らずも玄関扉は別の力で勢いよく開いてしまった

老婆はじっ玄関扉の向こうの一人の若い男をじっと見つめる。

夜の闇が男の顔を隠していて表情こそ伺えないがその立ち姿には明白な狂気が渦巻いている。

老婆が身の危険を感じ一歩足を引いたそのとき、男は目をギラリと光らせてその大きく逞しい手で老婆の口を塞いだ。

老婆の小さく皺だらけの目がカッと開かれた時にはもう男の毒牙が彼女ののど元を締め付けていた。

しかしその最期の瞬間、彼女は男の姿を目に焼き付けた。

若々しく逞しい若者。狂気めいた表情。そして右手首に入った蝶のような痣——

それが被害者中村よねの最期だった。

その瞬間、画面は一面のノイズへと一変した。

「あれが——あの婆さんを殺した犯人……」

峰雄はそのノイズを見ながらぼつりとそう漏らした。

そしてその瞬間、驚きと震えが同時に彼を襲った。

「これを見ておわかりでしょう」

徐々に明るくなる法廷に篁の凄みのある声が響き渡る。

「犯人にはそれを証明する決定的な証拠がこの右手首にある。ここに蝶のような黒い痣がね」

篁のその言葉を待たずに、鬼の刑務官が峰雄を取り囲むと彼の右手首を乱暴に掴み一言言った

「痣はどこにも見当たりません」

「何？」

その言葉に閻魔王は身を乗り出した。

「それは間違いないのだな？」

「はい——痣など何一つない手首です」

その一言に周りの取り囲む冥官たちが驚きを隠せないようにざわめいた。

まだ、その事実が信じられないように彼らは資料を見直し驚嘆の声を上げるばかりだった。

「彼の身体的特徴は閻魔庁召喚直後に写された写真にて確認済みで、この通り右手首には痣一つ見当たりません！」

篁はそう言うと高々と裸で写された峰雄の写真を掲げた瞬間、周りの冥官たちから初めて感心の唸り声が上がった。

「ほう……面白い」

閻魔王は舐めるような目で峰雄の写真を見つめながらそう唸った。

「これが、おぬしの言う空白の真実と言うわけか——」

「いいえ。これだけではまだまだ弱いですよ」

そう言うと篁はすっと証人吾妻俊幸を指差した。

次の瞬間、吾妻は狼狽えたように後ずさりした。

「——彼の手首を調べて下さい」

その言葉に反応するように巨人のような鬼の刑務官たちが真っ直ぐに吾妻の方へと進んでいく。

鬼たちのその様子を見て吾妻は今にも逃げだそうと振り返ったが、その目の前には牙を見せながら憎めない笑顔を浮かべる涼が立っていた。

「逃げてても無駄だ」

涼はそう言うと怯える吾妻向かい指を差しだした。

その瞬間、涼の力に操られた彼の身体は意に反して綺麗に方向転換し観念したかのように刑務官の前で岩のように固まってしまった。

逃げることの出来ない吾妻を鬼の刑務官は峰雄と同じように取り囲む

そして、彼の右手首を乱暴に掴みただ一点そこを見つめた。

「あります……」

鬼の刑務官はため息混じりにそう言うと、閻魔王に見せつけるように彼の手首を高々と持ち上げる

吾妻の右手首にはあの蝶のような黒い痣がくっきりと浮かんでいた。

「彼に痣があります！ ビデオに映っていたあの痣です！」

「なんと……！」

その言葉に閻魔王ならずともその他の冥官までもため息に似た唸り声を上げる。

そして、被告人である峰雄は自分の空白に深く関わった吾妻を呆然と見つめた。

そんなこと、到底信じられない。あの映像の犯人と思われる人物が後輩の吾妻だなんて——

「ごらんの通りですよ。閻魔王」

そう言うとき、篁は閻魔王に向かい勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「なぜ彼にあの映像の痣があるのか——理由は一つですよ」

「おぬしはこの者が真犯人だと言いたいのか」

その言葉に篁は何も言わなかったが、彼の浮かべる自信に満ちた笑みが全てを物語っていた。

しかし納得いかないのは証人である吾妻であった。

彼は悔しそうに唇を噛みしめながら篁を睨み付けて叫んだ。

「ああ、確かに俺にはここに痣があるよ！」

吾妻は堂々と痣を見せびらかせて言葉を続けた。

「でもなあ、それだけで俺を真犯人って決めつけるのはどうかな？ ここに痣があるヤツなんてどこにでもいるし、もう26年前の事件なんだから証拠だって満足に残ってないんだろ！」

必死に反論する吾妻を見て、峰雄は彼が閻魔庁の真の恐ろしさをまだ何も知らないように見えた。

ここは亡者生者の記録が全て集まりしっかり保管されている恐るべき場所。

記録が残っている限りどんなものだって証拠として残っていることを彼は何も知らないのだ。

「そんなに証拠が見たいか？」

篁はそう言うと、鬼にも負けない鋭い目で吾妻を睨み付ける。

そしてその手には小さな黒い小銭入れが握られていた。

「それは……」

その小銭入れを見て思わず声を上げたのは峰雄の方だった。

間違いなくそれはあの日あの時になくし、老婆の家で見つかり、峰雄を追いつめる材料になった自分の小銭入れだった。

「君はこの小銭入れに見覚えがあるだろう？」

篁のその問いに、吾妻はふて腐れたように目をそらした。

その反応に、篁は何かを掴んだように自信に満ちた溢れた表情を浮かべた。

「一言言うけど、隠したって無駄だよ。君の記録だって閻魔庁にはしっかり記録されているんだからさ」

「え……？」

その言葉に吾妻は驚愕の表情を浮かべた。

篁のその手には黒い表紙のとある資料。そう、吾妻俊彦のあの日が記された生前調査票だった。

「君はあの日、一つの盗みをはたらいた。それが相楽峰雄の上着のポケットに入っていたこの小銭入れ。この資料にはそう示してある！」

そう言うと篁は吾妻の足元にその資料を投げ渡した。

彼はその資料を震える手で拾うと、一枚一枚頁を開きゆっくりと中身を確認する。

そして、その確認の手はだんだん早くなり、事実を知ったとき彼は声にならない叫び声を上

げた。

「そんな！ そんなあああ！」

その瞬間、吾妻は膝から崩れ落ちその場でその場で号泣した。

その泣き声はしんと沈黙した法廷中に響き悲痛さを醸し出していた。

「証人、吾妻俊幸よ」

そんな彼を閻魔王は冷やかな表情を浮かべて言った。

「ここでいい加減、罪を認めたらどうだ？」

「でも——！」

吾妻は泣き濡れた顔を上げて訴えた。

「ここで認めたら俺は……本当に地獄へ——」

「今日は君を裁く場じゃない」

そう言うと篁は吾妻の元に歩み寄ると彼の目線に合わせて膝をついた。

「俺たちは真実を明らかにするために君に証言を求めているだけ。それに、君が罪を犯したのは消えがたい事実なのだから仕方ないだろう？」

「それは……」

「君が証言しない限り彼は無実の罪で裁かれる。最後の最後に君の善が彼を救ってあげてもいいんじゃないか？」

そう言うと篁は蹲る彼にすっと手をさしのべた。

それを見て吾妻ははっと彼の顔を見た。

先ほどまであれほど厳しい表情で追求していた篁が一転して優しく顔を和らげていた。

「先輩を救えって言うのか？」

その言葉に篁は黙ったまま頷いた。

吾妻を深く信じているような目で彼をじっと見つめ黙ったまま口元に微笑みを浮かべる。

そんな彼の優しげな表情に吾妻は次第に心を開き始め差し出された篁の手に吾妻はゆっくりと手をかける。

そして彼に誘われるように彼はよろめきながら立ち上がった。

「俺は——先輩を救うためには証言しません」

吾妻はそう言い放つと閻魔王をすっと見据えた。

「でも、このまま自分の胸に閉まっておくには重すぎる事実。出来ればいつか吐き出したいとずっと思っていました——」

「ならば、今この時に言い放て」

閻魔王のその言葉に吾妻は一瞬頭を垂れたが、すぐに閻魔王を見つめ直して言った。

「わかりました。ここで俺は心の重荷を下ろしたいと思います」

その一言は沈黙しきった法廷中の視線が吾妻に注がれる。

そんな視線に緊張しながらも吾妻は落ち着いた口調で語り出した。

「言われたとおり、俺はあの日先輩の小銭入れを盗みました。昼休み、ふと目に入った脱ぎっぱなしの先輩の上着と小銭入れを見て俺の中に悪魔が入ったような気がした。気付いたときには俺は先輩の上着から小銭入れを抜いていた」

「何のために？」

「この小銭入れ一つで先輩をいくらでも陥れられる。そう思った瞬間俺は別人になったようにあの場所へ向かった——」

「それが、中村よね宅だったんだな」

篁のその言葉に、吾妻は一瞬言葉を詰まらせたがすぐに前をむき直して白状した。

「殺す相手なんて本当は誰でもよかった。でも力がなくて騒がれない相手を探していたら近所の顔なじみのあの婆さんの顔が浮かんだ。その瞬間から俺は自分を止められなくなって気付いたときには事を実行してた——」

その言葉を聞いた瞬間、法廷は息を呑むように静まりかえった。

そして、吾妻は沈黙に染えるような衝撃的な真実を淡々と語りだした。

「あの婆さんを手にかけて瞬間、俺は強盗に見せかけるためにとにかく部屋を荒らし雀の涙程度の金を盗んだ。そして部屋を出る最後、忘れずにやったことはその小銭入れをあの婆さんの家に置いていく事だった」

「え——」

その言葉を聞いた峰雄は信じられない表情を浮かべて後輩吾妻を見つめた。その瞬間、峰雄は事件の恐るべき真相を悟りそして愕然とするばかりだった。

「そうだよ。俺はこの殺人をどうにかして先輩になすり付けようとしたんだ！ その小銭入れがあの婆さんの家から見つかったことで、先輩は目測通り逮捕され見事に俺は先輩の未来をメチャクチャに壊すことが出来たんだ！」

事実を語る吾妻は時には沈痛に時には狂乱にしながら話を続ける。そんな後輩を峰雄はとにかく見ていられなかった。

「君は彼が憎くて仕方がなかったんだな」

「ああ、憎いよ！ 今でも憎くて仕方がない！」

篁のその問いに吾妻は狂気に満ちた声で答えた。

「俺はあれよりも前からずっと先輩を追い落とそうといろいろ画策した。本社の上司に先輩の失敗や弱みを告げ口して正社員の内定を取り消しにさせたのも俺だし、現場監督にけしかけて先輩ともめさせたのも俺だ。俺はそんな先輩の愚痴を聞いてやってたけど、本当は心の中はほくそ笑んでいた——！」

「——もう、やめてくれ！」

吾妻の告白を遮るように峰雄は悲痛な声でそう叫んだ。

重々しい沈黙が覆い被さる法廷に峰雄は膝から崩れ落ちすすり泣いた。

そして、悲劇的な空白の真実を知った峰雄を見て居並ぶ冥官たちは黙り込むしか出来なかったのだ。

「何故…君はそれほど彼を憎むんだ？」

その重苦しい空気を裂くように篁は最後の質問を吾妻に投げかけた。

「それは——」

その問いに吾妻は初めて峰雄の方を気にするように見た。

もうその眼は憎くて仕方がない敵を見る眼ではなく苦しむ友人を労る優しい眼だった。

「この際、君のためにもそれを明らかにした方がいい」

そんな吾妻を見て篁は優しげな口調で諭した。

「本当のところ君は彼に罪をなすり付けたことを心から悔やんでいる。それを言わないで心にしまえば一生苦しむのは君自身だろう」

「でも——」

「彼はもうすぐ自らが相楽峰雄である使命を終える。その前に全てを知った方が彼にとっても一番楽に旅立てる」

その言葉に吾妻はもう一度峰雄の顔を見つめる。

彼はよろよろと立ち上がりながら、潤んだ眼で吾妻を見つめ一言言った。

「吾妻——真実を、教えてくれ……」

「先輩……」

「俺はお前を完璧に許せるほど心は広くないけど、真実だけは知って終わりたい——だから、本当のこと……教えてくれよ」

心の底から絞り出すような弱々しい声。

しかし、吾妻にとってこれほど痛く突き刺さる声はなかったのかもしれない。

吾妻はふっと峰雄から目をそらすとまた沈痛な表情を浮かべてゆっくりしっかりと真実を語り出した。

「先輩の——幸せが憎かった……」

「え…？」

「俺から伊世を奪っていき幸せになっていく先輩が許せなくて憎らしかったんだ！」

その言葉を言った瞬間、吾妻の眼にまたあの狂気が宿った。

「俺は伊世を心底愛していた。何度も結婚の申し入れをするくらい愛していたんだ！ それなのに彼女は俺よりも暗くて口べたな先輩にどんどん惹かれていくのが悔しくてならなかった」

恨み節を口にしながら吾妻の眼にはじわりと涙が浮かんだ。

そして止めどなく流れる悔し涙でぐしょぐしょになりながら吾妻は訴えかけるように叫んだ。

「伊世はなぜか知らないけど俺よりも先輩の方を取って去っていった。そして二人は憎たらしいほど幸せになった。俺はそんな先輩の幸せを壊したくてたまらなかった。幸せを壊したら——俺の元に伊世が戻ってくるような気がして…」

「だから、俺が逮捕された後改めて伊世にプロポーズしたのか——」

「ああ、そうだよ。全てを壊した後、伊世を幸せにしようと思ったよ！」

吾妻は涙声になりながらも必死で言葉を続けた。

「でも、あの時も伊世は先輩のことを信じて俺の元には来なかった。先輩が伊世を幸せになんかできないのに純真に先輩を信じ続けたんだ。そう思うと俺はますます先輩のことが憎たらしくてならなかった」

そう言い残して吾妻はそのまま膝から泣き崩れた。

「でも、俺……解ってますよ。俺の罪が先輩はおろかあんなに愛していた伊世の幸せさえも打ち砕いたことを——俺はその罪を隠してずっと悔いてきました。でも、それが消えるわけはありませんよね？」

「当たり前だ。人の犯した罪は必ず残るものだ」

その問いに篁は冷たく突き放すように言った。

「——でも、これで少しは荷が下ろせて楽になっただろう」

「ええ……」

そう言うと吾妻は何かを請うように篁を見上げた。

「あの、最後に質問していいですか？」

「何だ？」

「俺、この後どうなるんですか？」

「この後——ねえ……」

その問いを受けて篁は閻魔王をじっと見据えた。

「どうなさいます？ 閻魔王？」

「そうだな……」

閻魔王は渡された資料を眺めながら言った

「本当ならここでこの者を裁きたいところだが、よく見るとこの者の法定の寿命はあと16年3

ヶ月残っているようだな——」

「あなたのお力ならすぐに奪える寿命でしょう」

「それもそうだが……」

そう言うと閻魔王は口元に何か企んだような笑みを浮かべた。

「私は今回だけはこの者を地上界に帰すことにする」

「え……」

その言葉に吾妻は涙に濡れた顔を上げた。

そこには、あの忿怒の像からはかけ離れた穏やかな表情を浮かべた閻魔王がいた

「この者はそう遠くない未来にまた閻魔庁へと足を踏み入れるのだ。その時、罪を裁いても私は遅くはないと思う——それに」

そう言うと閻魔王は牙を見せてにやりと笑いながら吾妻を見た。

「この者がこの場で罪を告白したことで、未来に再びやってくる時にどれだけ人間性が変わっているか見物であろう。そう思わぬか、篁？」

「なるほど、あなたらしいお考えですね」

篁は一瞬だけ笑顔を返したら、すぐに鋭い表情で吾妻を見て震わせるような緊張感のある凜とした声で彼に言い放った。

「証人吾妻俊幸よ。これから君を人間界に釈放する」

「ホントですか？」

それを聞いたとたん、吾妻の表情が一気に明るくなった。

「——勘違いするな」

しかし、篁は今までで一番厳しく鋭い瞳で吾妻を睨み付けると威嚇するように言葉を続けた。

「この場では君は人間界に戻れるが君に最期の瞬間が訪れたとき間違いなく君は閻魔庁によって厳しく裁かれ断罪される。それだけは生涯忘れるな」

「——はい……」

吾妻は畏縮しきったように弱くそう頷くしかできなかった。

「まあいい。もう一度ここに来たら俺が相手してやるよ」

そう言うと篁は不気味なほど妖艶な笑みを浮かべて言った。

「それまでもう一度地上で自分の愚かさや浅ましさについて考えてみる。そして、再び冥界に足を踏み入れたとき少しは成長できた自分を俺たちに見せてみる——それが君に残された使命だ」

篁がそう言った次の瞬間、法廷の最後方の扉が勢いよく開き勢いよく風が吹き出した

その瞬間、法廷にこだます彼の絶叫。

吾妻の身体は風の中に呑み込まれ、みるみるうちにその風によって扉に吸い込まれる。

そして、その絶叫が途絶えたときには彼は外へ吸い込まれ扉はバタンと自動的に閉まった。

「閻魔王。これがずっと空白になっていた彼の記憶の真相です」

彼に与えられた舞台のようにしんと静まりかえった法廷に篁の凜とした声が響き渡る。

「見事な調査じゃ」

閻魔王ならずとも法廷にいる口達者な冥官たちさえも異論など唱えられない。

それほど篁の調査は完璧そのものだったのだ。

「出来ればこれから言い渡す聖断の材料にこれを組み込んで頂ければ幸いです」

篁は一言そう残すと、後は閻魔王に全てを任せるように潔く身を引いた。

下がっていく彼は一瞬だけ峰雄をちらりと見て何かを合図するように小さな笑みを浮かべた。

——それは勝利の確信の合図だったのだろうか…

ハッと彼を振り返ろうとしたその時威圧的な小槌の音がまた法廷中に響き渡った

「これから被告人相楽峰雄への判決主文を言い渡す」

央のその高圧的な声と共に閻魔王は衣を翻して持った笏を峰雄に突きつけた。

そして金色の眼で彼を威圧的に睨み付けた瞬間、その時は訪れた。

17 奈落の夕陽

荒涼とした大地に血のように真っ赤な夕陽が沈んでいく。

太陽など滅多に見せない冥界にしては珍しく綺麗な夕焼けの斜光が差し込む生前特捜部三課の小さな事務所。

その緋色に染まる室内で円は淡々と書類をファイルにはさんでいった。

先に受け持った亡者相楽峰雄の報告書――

円はその報告書を複雑な表情で眺めながら深いため息をついた。

「あーあ……」

円はがっかりしたようにそう唸るとファイルした報告書をデスクに投げ出した。

「私たちあんなに頑張ったのに、結局亡者は地獄行きか……」

「なあに？ 円ちゃんあの亡者助けたかったの？」

円のその言葉に、隣で書類を整理する直は手を止めて彼女を見た。

「いや、そうじゃないんだけど――」

その問いに円はまた複雑な表情を浮かべた。

「でも、私たちが死ぬ気で資料を探してあの亡者の冤罪を証明してあげたのに――何だか、それが評価されていないような気がしてさ……」

そう言うと円はまたファイルした報告書を手に取りぱらっと広げた。

【被告人相楽峰雄、妄言の罪にて叫喚地獄2年の刑に処する】

重々しくそう書かれた文字を見て、円はため息が止まらなかった。

「私、あの亡者が冤罪って証明できたなら無罪放免になると信じてたのに――こんな事になっちゃって、私たちの頑張りって一体何だったんだろう？」

「あら？私たちの調査は無駄になんかなってないわよ」

彼女の背後からそう言い放ったのは直だった。

「どうして？ 地獄行きて事は亡者が冤罪だって認められてないってことじゃん」

「馬鹿ね。もう少し資料をちゃんとみなさいよ」

それを聞いて、円はパラパラとファイルされた書類に目を通し始めた。

「彼が犯したと思われる罪——殺生、盗み、そして妄言。それがすべて閻魔王の聖断にかかってしまうと彼の魂は百年、二百年も地獄をさまよわないといけなかった。だけど——私たちの調査でその殺生、盗みだけは罪は覆された。そして残ったのは妄言だけってことよ」

「でも…どうして妄言だけ——」

「多分、生前彼が一度いわれのない罪を自白し、そしてそれを翻して無実を訴えたところが取り扱われたみたいね。そこにも書いているでしょ。亡者の心の弱さと愚かさが真実を混乱させた罪は大きい——って」

「あ…ホントだ」

円はその文を見つけるとまた難しい顔をして黙り込んだ。

今まで亡者など助けたいなど一度も考えなかったのに今回だけは地獄送りにしてしまったことがとにかく悔しくてならない自分がある

亡者に同情などしてはいけないのが冥官なのに何故か今回だけは同情ばかりが先走ってしまっていた。

「そんなことよりもさあ……」

しばらくの沈黙を破ったには自分のデスクでなぜか不機嫌そうな表情で資料整理をしていた涼であった。

「何で俺たちは吾妻俊幸の存在にもっと早く気づかなかったんだろ。俺、ずーっと前から怪しい

とは思ってたのに……」

「さあ、どうしてだろうね……」

円のなんとも人事のような顔きを聴いた瞬間、涼はむっとした顔ですっと立ち上がった

「——お前、何か忘れてない？」

「え？ 何のこと？」

「だーかーら！ 人間界出張のとき吾妻のこと調べて来いって言ったの忘れたのか!？」

「んー。そうだっけ？」

「……こいつめ」

涼は苦々しくそうつぶやくとさらに不機嫌そうに言い放った

「いいか、考えてみろよ。俺があの時吾妻が怪しくて奴の生前調査票が早く見つかったら二週間も資料室に缶詰になって処分寸前の中村よねの生前調査票探すことはなかったんだぞ！」

「ええ！ そうなの!？」

「そうなの？ って——お前反省も何もしてないな」

「——どういうこと？」

「ったく……自分のせいだってまだ気づいてないのか」

そういうと涼は銀色の髪を欠きながら円をにらみつけた

「あの時、お前が俺の指示をちゃんと聞いていれば、今回の苦労はなかったんだ！ だから今回の責任は俺の言うことを聞かなかった円のせいだぞ！」

「そんなこと言われても……」

そういうと円はむくれながら言った。

「無責任は涼のほうじゃない？ 新人のあたしにそんな重大事項押し付けるなんて」

「いつまでも新人だからで済まされねえぞ」

「でもさあ」

涼のその一言に円は不機嫌そうに答えた

「そんなにあの吾妻が怪しいと早くわかってたんなら、自分で資料探して自分の手柄にすればいいのに……」

「あ……」

その一言に涼は思わず迫力をうしなった。

「そうだね。涼君はちょっとお人よしすぎたなあ」

「あれさえ見つけていればあなたも外回り卒業できたのにね」

円の一言が口笛となって雅と直も冷めた目で涼を見つめた

そんな三人の視線を感じ涼は居心地を悪くしたのか、先ほどまでの迫力がうそのようにぼそぼそとしゃべった

「なんだよう。結局俺の責任かよ……」

そう一言言い放つと落ち込んだようにまた静かに資料を整理し始めた。

そして、外の者も資料整理の続きをはじめしばらく部屋の中に沈黙が流れだす。

だがやっぱり沈黙はそう長くは続かない。また口を開いたのは新人の円であった

「ねえ、みんなは悔しくないの？」

「え？」

円の急な質問に一同は再び手を止めた

「あの亡者のこと！だってさ……やっぱりここまで来たら目に見えて無実を勝ち取りたいと思わない？ それが出来なかったのは——私、ものすごく悔しいよ」

その言葉に涼と雅と直はお互いに顔を見合わせた。

「なあ、悔しいと思う？」

「僕は思いませんね」

「私も別に……」

「そうだよな、俺はどちらかというの大満足だね」

「どうして！」

「だって、真実はちゃんと明らかになったじゃん」

「真実？」

「そうだよ。それ以上に無実が欲しいってなったらそれは亡者に対する同情にしかないぞ」

「そりゃ……そうだけど——」

涼のその一言に円は悔しそうに口ごもる。

なぜかその一言だけで自分の全てを見透かされたような気がしてとても悔しい気分になった。

「それに、今回の判決に一番納得して一番満足しているのはアイツだと思うよ」

そういうと涼はすっと筐のデスクを指差した。

彼は窓から漏れる真っ赤な斜光を背負うように浴び、右手には短冊状の色紙、左手に筆を持ち、いつも通り難しい顔をして何か思案していた。

「そうなの？」

「だって、アイツは馬鹿みたいに真実ばかり追い求める男だぞ。もやもやしていた事実が明らかになった今は多分一番機嫌がいいときなんじゃない？」

「ふーん……」

「しかし、怖い男だよなあ……」

涼は遠巻きに篋を見ながらふと漏らした。

「自分の描いたシナリオ通りに完璧に裁判をひっくり返して自分の思い通りに閻魔王の判決まで操っちゃうなんて——俺、怖くて鳥肌が立ちそうだった」

「ホントですよ……あれで人間出身なんて信じられませんよ」

「だろ、正直鬼よりも怖い冥官だよ」

涼と雅がしみじみと漏らすその言葉を聞きながら円はこの前聞いた篋が閻魔庁に務めだしたきっかけをふと思い出した。

前代未聞の閻魔王直々のヘッドハンティングで招へいされた人間出身冥官の小野篋——

なぜ無能で愚かな人間を好待遇な冥官に取り立てた謎が今更ながら解けたような気がした。

「——篋さんって多分人の心も鬼も心も両方持ってるんですよ」

「え……？」

その言葉に、涼も雅も驚いたように円を見た。

「私の印象だけど篋さんって人であって人でないし、鬼であって鬼でない。どちらにもなれる冷たさと優しさ、厳しさと甘さを兼ねそろえているからヘッドハンティングされたのかなあ——って」

円のその言葉に涼と雅と直は狐につままれたような顔をして彼女を見つめた。

そんな彼らの不思議そうな視線に円は顔をしかめて威嚇するように言った。

「何よ。その顔」

「いいえ、あなたも少しはまともなこといえるようになったんだなって——」

直はそう言うと雅の方を見た。

「円さん。やっと成長したんですね」

雅は嬉しそうな笑みを浮かべて言った。

「やれやれ、手こずらせやがって。やっとその境地に達したか」

涼は不機嫌そうなため息をついて一言ちくりと言う

そんな三人の態度を見て円は素直に喜べなかった。

「私、いつもまともなこと言ってるつもりなんだけどな……」

「馬鹿言え。いつもはわがままみたいな文句ばっかじゃねえか」

「そんなことない！」

「ほーら。そこでムキになるのがガキンチョなんだよ」

「何よ！ あんただってそういう風に人をからかうのって子供って言うんじゃない？」

「何だと！ お前に言われる筋合いは——！」

「ちょっと！ 喧嘩する暇があったら早くこの膨大な資料整理しなさいよ！」

直は目を吊り上げながら言い争う涼と円を叱り飛ばした

その鬼の形相を見た二人はすぐに黙り込むしかなかった

「とにかく今日中に相良峰雄のファイル作って提出しなきゃなんないのよ！ 休んでる場合なんてないわ」

「そうそう直さんの言うとおりに」

雅は直の言葉に相槌をしながら円の元に行き大量の資料をデスクに置いた

「何ですかぁ？ これ……」

「とりあえずこれだけの報告書と庶務課と資料室に渡してきて

「ええー？」

その言葉に円は不満の声を上げた。

「成長したって認めてくれたの、結局やることは同じなの？」

「当たり前だ。それとこれとは話が別だ」

「何よ！」

涼の棘のある言葉に円はまた食いかかるように言いかけたが、やはりそれを仲介したのも雅だった。

「まあまあ。そう言わずに」

「でも……」

「この仕事が終わったらみんなで一杯飲みに行こう。打ち上げてことでさ」

雅はそう言うとポンと円の肩を叩く。

その言葉に最初は不満そうな表情を浮かべた円も折れるように「仕方ないな……」と漏らし、報告書を抱えたまま足早に事務所を後にしていった。

「雅さん……あの娘の事うまく操ってるわね」

そんな彼女の後ろ姿を送りながら直はくすくすと笑いながら雅に言った

「操ってませんよ」

雅はおおらかな笑み返しながら言った。

「あの娘は意外と素直な面があるからその部分をくすぐってるだけです」

「あら、それが操ってるってことじゃない」

「——さーて、もう少し資料でも整理しようかな…」

直の意地悪な問いに雅はあえて無視するようにその場を離れた。

——なるほど、アイツらしい円の活かし方だな…

そんな彼の姿を見送りながら涼はふっと笑みを浮かべたあと、何かを思い立ったように篁のデスクへと歩き出した。

奈落の夕陽はますます刺激的な赤になり部屋中を緋色に染める。

滅多に太陽の光など除くはずのない閻魔庁であるが篁は口々にその夕陽が好きだと言っていた。

きっとそれはこの赤い斜光が唯一自分の住んでいた世界を懐かしめる光なのだろう。

篁は荒涼とした大地に沈む夕陽をぼんやりと見つめながら何気なく物思いにふけていた。

「なあ、さっきから何やってるんだ？」

涼はデスクに軽く腰をかけるとそんな篁の顔を覗き込んだ。

「いや、大したことではないんだけど…」

そう言うと篁は夕陽を見るのをやめてまた短冊を見つめた。

「久々に歌でも詠んでみようかと思ってね」

「歌？」

そう言うと涼は彼のデスクに並べられた数々の短冊状の色紙を見ると、そこにはびっくりする

ほどの達筆な文字で優雅に詠まれた和歌が並べてあった。

「ああ、あんたが人間界にいたとき趣味でやってた詩だな」

そう言うと涼は一つの短冊を手に取りじっと眺めた。

「——でも、いつ見てもものすごく短い文章だよな……人間ってこれで感動するものなのか？」

その問いに篁は一言慚然と答えた。

「——鬼には人の情緒など解らないだろうな」

「なんだよ。それ……」

「本当のことを言っただけだ」

篁はそう言うと涼の手から短冊を取り上げた。

「——で、何の用だ」

「別に……」

涼は少し不機嫌そうにふくれながら言った。

「ちょっとあのオッサンのその後が知りたかっただけだ」

「気になるのか？」

「そりゃ、気にならない方がおかしいよ」

涼は急にムキになるように篁に食いついた。

「確かに俺たちはあの亡者の冤罪を証明して見事に閻魔王は認めて下さったよ。でも、本当の意味での無罪放免には出来なかったし、なんせ事件の真相があの人にとってあまりにも重くて悲しすぎるんじゃないかな……と思ってさ——」

その言葉を聞いて篁は冷やかな笑みを浮かべて言った。

「——お前、円に説教できる口じゃないな」

「うるさい。今回だけは別だ」

涼は強がるように篁から顔を背けた。

「まあ、お前が同情する気持ちも解らないわけではないがな…」

そう言うと篁はまた窓の外の透き通る夕焼けを見た。

「でも、お前が心配するまでもないよ。彼はそんなにへこたれてない」

「——どういう意味だよ」

「あの亡者は俺たちが思っているほど心の弱い愚かな人間ではないって事だよ」

篁はそう言うと深いため息をついて言葉を続けた

「正直驚いたよ。あの最終審判の後の彼は地獄行きになる運命を快く受け入れて、何か憑きものがとれたような晴れやかな顔をしていた」

「え……？」

その言葉を聞いて涼は信じられない表情を浮かべた。

「それ……本当なのか？」

「ああ……」

篁はそう言うと淡々とした口調で彼との最後の別れを語り出した。

「あの最終審判で心を許した後輩によって罪をなすり付けられた真実を暴露した後だから彼にもいくらかの衝撃は残っていたと思う。それだから俺も彼のことは少し心配になってな——地獄へ送られる最後の瞬間、俺は彼に会うことにしたんだ。

夕暮れの地獄へ送られるバスのターミナル。

俺が待合室に入ったとき彼は意外と穏やかな表情で迎えてくれた。

——正直、驚いたよ

今までその目には恐怖と不安しか映っていなかっただろうその目は、何故かとても涼やかで口元には笑みを浮かべてきたのだから

『箕さん。来てくれたんですか』

憑きものがとれたような笑顔を浮かべ彼は言った。

『ああ……ちょっと気になってな』

俺はそんな驚きを表情に出さないまま彼の横に座って不躰に一言訊いた。

『君は俺のことを恨んでいるのか？』

『え？』

『君の目の前で衝撃的な真実を暴き出したことを恨んでいるのか？』

その問いに彼は困惑した表情で答えた。

『よく、解りません……』

『解らない？』

『箕さんに俺の記憶の空白を埋めてもらったことで俺は被せられたいくつかの罪を覆すことが出来ました。それはとても感謝しているんです。でも——その記憶の空白に隠された真実があまりにも悲しくて——正直言うと俺はあんな真実なんて本当は知りたくなかった……』

『——だと思うよ』

俺は手を組みながら一言そう言った。

『あの……質問していいですか？』

『どうぞ……』

『あなたは、どの時点から吾妻が怪しいと思ったんですか？』

彼のその問いに俺は表情を変えずに一言答えた。

『君が拘留されている間に奥さんにプロポーズした事実を知ったあたりかな？』

『あの時から？』

『君では彼女を幸せに出来ないって言い切った辺りから怪しいなとは思った』

その言葉を聞いた彼はただただ呆然とするばかりだった。

おそらく聞けば聞くほど悲しくなるのだろう。それほど俺の暴いた事実は彼に重くのしかかっているようだった

『——やっぱり君は彼のことをまだ恨んでいるのか？』

俺は一番気になっていることをもう一度彼にいきなりぶつけてみたが、彼が次に返したのは意外にも笑いだった。

『いえ……』

なにか憑き物が落ちたように彼は初めて晴れやかな笑みを浮かべて答えた。

『もう何も恨んでも憎んでもいません。むしろそんな感情がなくなってしまったくらい何も感じられないんです』

『ほう……』

『不思議ですよ。彼のやったことは許されないのに、何も感じないって——多分生きているときにこれを知ったら絶対に彼のことは許せないし、復讐だって考えたかもしれない』

そう言うと彼はやりきれないように顔を俯け言葉を続けた。

『ただ、唯一よかったなと思ったのは伊世がこの事実を知らずにいることだけ。もちろんできれ

ば彼女には事実を知らないままいて欲しい。このまま、知らないまま……』

彼はうわごとのようにそう呟き続けそしてそのまま絶句した。まるで俺に訴えかけるようなその言葉に、正直珍しく心が動かされたよ。

『大丈夫だ』

そう言うと俺は彼の肩を軽く叩いた。

『おそらくだが彼女はなにも真実を知らないまま一生を終える。唯一真実を知っている吾妻もそれを二度と口にするにはもうないだろう』

『本当ですか？』

『ああ、君が望むのであれば彼女がこちらにきて俺たちは何も伝えない』

その言葉に彼は張りつめた気持ちが途切れたように皺の目立つ眼から涙がこぼれた。

『——よかった……』

彼は安堵のため息に似た声を上げた。

『これで、安心して地獄へ逝ける……』

俺はその瞬間彼が見せた晴れやかな表情が忘れられない。

考えてみる、これから地獄へ逝くのに彼は安心してと言ったんだぞ。

はっきり言って、そんな亡者を見たのはさすがの俺でも初めての経験だった。

その瞬間、バスターミナルに叫喚地獄行きのバスが煙を吐きながら入ってくる。

全体に炎のペインティングをされたバスが来たのを見て彼はゆっくりと立ち上がった。

『箕さん。本当にありがとう』

彼はバスに乗り込む際俺に一言そうお礼を言った。

『——別に』

俺は無然とした態度を取りながら冷たくそう言った。

『君を助けるためにやった事じゃない』

『でも、ここまで見送ってくれるって事は俺のこと少しは心配してるんでしょう』

『——』

彼のその言葉に俺は何も言えなかった。

むっと口を真一文字に結んだ瞬間、火車ターミナルに真っ赤な斜光がずっと差し込む。

それは久々に見る奈落の夕陽だった。

『冥界にも夕陽があるんですね……』

彼はまるでその夕陽を目に焼き付けるように斜光を眩しそうに見つめた。

『まさかもう一度夕焼けが見られるなんて思わなかったな』

一言そう言い残すと、彼は火車の中へと吸い込まれていった。

やがて、彼を乗せた火車はもくもくと煙を出し夕陽の沈む荒野へと出発していく

——俺はあれから夕陽を見つめていた彼の顔が忘れられない。おそらく今まで生きていた世界を懐かしむような眼に、俺も不思議と冥界で初めて夕陽を見たときのことを思い出したよ」

「この夕陽が——？」

そう言うと涼は窓の外の夕焼けを見た。

荒涼なる黒い大地を赤く染めゆっくりと沈みゆく真っ赤な太陽。

鬼にはただの珍しい現象にしか見えないが人間にとってそれは特別な郷愁を誘うものだった。

「冥界にはねこの夕焼けしか現世を思い出せる瞬間がないんだ。だから俺もこの夕陽を見ると1200年前の現世を生きていた自分を思い出してしまう」

篁は遠い目でその夕焼けを見つめると深い吐息を吐いた。

おそらく相楽峰雄も同じような眼でその夕焼けを見ていたのだろうと思うと涼は珍しく感慨的な気分になった。

「あのオッサンもあんたと同じような眼をしていたんだな」

「ああ……」

そう言うと篁はもう一つ深いため息をついてその夕焼けから背を向けた。

「——でも、戻れないと解っているから余計その夕陽が辛いんだよ」

涼は篁の表情一つで乗る前の峰雄の表情が手にとって解るような気がした。

それほど、彼の顔は悲しげでどこか晴れ晴れしくもあった。

「あんたは戻りたいと思うの？」

「え？」

「だから、人間界に戻りたいって思ったことある？」

涼のその問いに篁は一瞬きょとんとした表情を浮かべたが、すぐに彼には珍しく声を上げて笑い出した。

「馬鹿らしい。もっとまともな質問をしろよ」

篁はけらけらと笑いながら涼の胸を軽く小突いた。

「もう俺が死んでから1200年も経ってるんだぞ。これだけ時間が経てば——冥界の方が居心地がいい」

いつも難しい表情ばかりしている篁が珍しく感情を出した笑顔をこぼしたことに、涼は思わず

呆然としたがその呆然とした表情も彼につられるように笑顔になった。

「そう……だよな」

涼はそう言うのにやにやと笑いながら篁を見た。

「今と昔を比べればあんたの生きた人間界も全く違う異世界になっちゃったもんな」

「そういうことだ」

そう言うとき篁は何か思いついたように白紙の短冊を取り、筆でさらさらと一息である句を書き上げる。

そしてその句を満足げな表情で眺めた。

【旅立ちの 奈落の夕陽 眺めれば 帰れぬ道に わが郷里（さと）思ふ】

「なかなかいい句じゃない？」

涼はそれを横目からそれをのぞき見て一言言った。

「お前、意味解ってるのか？」

「いんや。全然解らないね」

「そうだと思った……」

篁は呆れたような笑みを浮かべるともう一度詠んだ句を眺めた。

その瞬間、真っ白い短冊状の色紙が斜光によって緋色に染まっていく。

——奈落の夕陽もなかなか風流なことをしてくれる。

篁はそれを見て小さな笑みを浮かべて、密かに雅な気分を嘯みしめた。

終章

窓から漏れる淡い春の光。さわさわと白いカーテンをたなびかせる緩やかな風。

時々都会の喧噪に混じり木々のざわめきや小鳥たちのさえずりが微かに聞こえてくる。

東京の桜が満開となったこの日、相楽伊世の元にもようやく春の便りが届いた。

伊世は足元から崩れるように黒いソファに腰をかけると定まらない瞳で呆然と前を見つめた。

東京地裁の変わり映えのしない控え室。

気持ちが高まるのに連れて今まで聞こえていた木々のざわめきや小鳥のさえずりは聞こえなくなり隣の記者会見会場の騒がしさのみが耳に入だし、それを相まって大きくなる自らの心臓の音はどんどん大きくなっていく

しかし、そんな高まる緊張でさえも今では心地よく感じ、長年の傷をゆっくり癒していくようだった。

ふと、伊世はしっかり胸に抱いた遺影を見つめた。

彼女が生涯愛し彼女を残して去っていった夫、峰雄――

もう、彼の優しくても悲しげな笑みはもうこの遺影越しでしか会えない。そう思うと、余計虚しくてしょうがなかった。

「あなた……」

伊世は愛おしく遺影の彼に手を当てたその瞬間、彼女の目からぽろりと涙がこぼれた。

「今日、やっとあなたの念願が叶ったんだよ……ついに、あなたの名誉が――」

伊世はそのまま言葉に詰まるように、泣き崩れる。

彼女のこぼれた涙が遺影の彼の笑顔を小さく濡らす。

ガラスにはじけた涙の粒は遺影の中の彼も嬉し泣きしているようにさえ見えた。

「相楽さん——」

伊世は上から降ってきた優しく労るような声にふっと涙に濡れた顔を上げた。

そこにはグレーのスーツを着こんだ白髪 of 弁護士が心配そうに立っていた。

「先生…」

伊世はハンカチで涙を拭いながら小さく鼻をすすった。

「すみません。つい感極まっちゃって…」

「いえいえ。仕方がないですよ」

そういうと白髪 of 弁護士は優しげな笑みを浮かべて言った。

「やっと旦那さんの悲願だった名誉回復の機会が与えられたのですからね」

「ええ……」

しかし、それに答える彼女の顔はとても哀しげだった。

「でも、主人が死んでしまった後に決まっても——ただ虚しいだけな気がして……」

そう、せっかく杉並事件の再審が決定したと言っても一番その場において欲しかった彼はもうここにはいない。

嬉しい事実を打ち壊すようにそれが虚しくて哀しい事実として伊世の胸にずっしりとのしかかる。

——どうして、あなたはそんなに早く逝ってしまったの？

再び彼の遺影を眺め、彼女は彼の笑顔にそう問いかけた。

しかし、問いかけたって答えは返ってこない現実を突きつけられるとまた涙がこぼれた。

「いいえ。例えそうであってもこれは十分意味のある判断ですよ」

白髪の弁護士は彼女を労るようにゆっくりとした口調で励ました。

「大切なのは旦那さんの傷つけられた名誉なのです。それを回復させてあげるのがいま旦那さんの墓前に手向けられる最高の花ではないのですか？」

「先生……」

その言葉に伊世は眼を潤ませながら白髪の弁護士を見たあと、彼女は哀しみから決別するように強く涙を拭いた。

「そうですね。こんな私が泣いてばかりじゃ、あの人にはなむけなんか出来ない……」

「仰るとおりですよ」

そう言うと白髪の弁護士は力づけるように彼女の肩を叩いた。

「我々はここで勝利を手にしたわけではないのです。あなたがここでしっかりしないと本当の勝利は掴めませんよ」

弁護士のその一言に伊世は何かを決意したように一つ深く頷くと、亡き夫の遺影をしっかりと胸に抱くとすっとソファから立ち上がった。

「記者会見——出られますか？」

「ええ……」

そういうと伊世は真っ直ぐ前を見つめた。

「——あの人のために闘うのは私しかいませんから」

そういうと彼女は白髪の弁護士に連れられてゆっくりとざわめきが高まる記者会見場へと進んでいく。

弁護士がドアを開けた瞬間、目に入ったのは眩いばかりのカメラのフラッシュ。

浴びせられる眩い光にそこにどれだけの報道陣がいるのかさえ解らない。

だが彼の遺影をぎゅっと強く握りしめると不思議と力が湧いてきた。

それはこの世には居ない彼と硬く強く手を握っているような——そんな感覚を持たせる不思議な気分であった。

居るはずのない彼の力を借りながら彼女は臆することなくフラッシュを浴びながら小さな会見場の中心へと歩いていくと、小さなパイプ椅子にすっと座り、眩いフラッシュを真っ直ぐ見据えた。

「えー。これから杉並事件の再審決定を受けて被告人側及び我々弁護側の見解を発表させて頂きたい」

彼女の隣に座った白髪の弁護士が、マイクの調子を見ながら報道陣に重々しく言った。

「なお、故人である被告人の未亡人相楽伊世さんは今回の決定と先に夫を失った両方の衝撃で動揺しております。そこは皆様方のご配慮をなにとぞお願いしたい」

その言葉を言っている間にもカメラのフラッシュは容赦なく伊世に襲いかかる。

牙をむくような光と音の攻撃。好奇に光る記者たちの眼。

それでも彼女は目を真っ赤に腫らしながら彼らの中央をじっと見据えるのをやめなかった。

「あの。伊世さんに聞きたいのですが」

その瞬間、光の中に浮かぶ人影のような記者がすっと手を挙げた。

「今回の判断を受けて亡くなられた旦那さんにどう報告しますか？」

その一言に伊世は一瞬の間をおいてしっかりとした口調で答えた。

「少し遅れちゃったけどあなたの念願がやっと叶いましたよ——と報告したいと思います」

「やはりあなたの中ではもう少し早く再審が叶えばと思いますか？」

記者のその問いに伊世はまた言葉を詰まらせた。

そして記者たちに見せつけるかのじょうに膝の上の遺影をまた強く握った。

「それは……正直にそう思います。主人が亡くなってから何度それを思ったか解りませんから……」

その言葉を言った瞬間、伊世の目からまた涙が噴きこぼれた。

「主人の死があまりにも急で何もかも失ったとき、もう再審請求などやめてしまおうと思いましたが、でも、それでは道半ばで倒れた主人に顔向けなど出来ない。だから、私は——いくら時間がかかっても彼の名誉を回復してあげる。それが、彼にしてあげる最大の供養だと思ったのです」

伊世の目からぼろぼろと涙がこぼれた瞬間、なお一層のカメラのフラッシュが彼女の顔を白く照らす。

それでも、非情な記者たちはさらに踏み込んだ質問を彼女に浴びせかけた。

「世間ではあなたは獄中結婚までして夫との純愛を通したと話題になっています。そんな生涯愛した峰雄さんのことを亡くなった今でも忘れられないですか？」

その一言に、伊世は小さく涙をこぼしながら一言答えた。

「忘れられませんよ……」

その瞬間、室内を走るフラッシュの光。

それを一心に浴びながら彼女は一字一句味わうようにゆっくりとした口調で言った。

「主人は刑に服していた時には私しか頼る人はいなかったのです。例え主人が遠くへ旅立ったとしても、私はこの裁判に勝つまで彼を裏切れません」

伊世のその力強い言葉に今まで冷やかさを保っていた報道陣から一瞬唸り声上がる。

そして、先ほどまで乱れ飛んでいた意地悪な質問がその瞬間ピタッと止まったのだ。

「最後に言わせてください」

彼女は自らマイクを取り上げるとフラッシュを浴びながら前を見据えた。

「私は主人と一緒に暮らした期間はとても短かったし、決して幸せと言える生活ではありませんでした。でも、いくら短く薄幸な結婚生活でも私は彼といるだけで幸せだと思った。

しかし——私は彼に幸せだって言えなかったんです」

「どうして？」

その瞬間、報道陣の中から一際幼さを残す声が伊世にそう質問する。

放たれるフラッシュの中その人物の人影は成長しきってない少年のようだった。

「あんたはどうしてそう思うの？」

「どうしてって……………」

伊世は妙に幼いその記者を訝しげに見つめた。

真っ黒なコートを羽織った黒ずくめの少年。そして、彼の髪は放たれるフラッシュで銀糸のように白く輝いていた。

「それは——私がいけないんです。主人がこんな事になるのなら早く自分の気持ちを伝えておけばよかった！」

その言葉を言った瞬間、彼女は初めて顔を俯けまたもう一つ涙をこぼした。

「今、彼に私の気持ちが伝わるのなら私はこう伝えたい。たった五年間しか主人と暮らせなかったけど、私はあれほど濃密に充実し温かい幸せに包まれた五年間は過ごしたことはありません。だから——私はあなたと一緒にあってよかった！」

彼女の泣き顔を覗き込むように、またカメラのフラッシュが煌めいたが、彼女は顔を上げることなく、彼の遺影をギュッと抱きしめた。

今すぐにでも声を上げて泣きたい——

沸き上がるやるせなさがまた伊世を支配し始めたその時、あの幼い声の主が意外な言葉をか

けた。

「あんた、意外とあのオッサンのこと解ってないね」

その言葉に伊世はハッと顔を上げると、一人の銀髪の少年がにっこりと笑みを浮かべて立っていた。

「解ってない？」

「そうだよ。一番解っているはずのあんたなのにおかしいね」

伊世は少年の顔を凝視しながら、ごくっと思を呑んだ。

深紅の瞳に額に生えた角――

その存在は集まった報道陣とは明らかに異質の存在だったのだ。

「オッサンは俺に言ったよ。彼女を幸せには出来なかったのは悔しくてしょうがないって。でも、あんたが幸せだと思ったら、オッサンも――少しは浮かばれるんじゃないかな？」

少年はそう言うときにやっと牙を見せながら笑う。

明らかに異形の者である少年を見つめながら伊世は一瞬背筋が寒くなるのを感じた。そして、呆然とした表情で一言彼に訊いた。

「あなた…誰――？」

「相楽さん！」

その瞬間、身体を揺さぶりながら隣に座った弁護士は強い口調で伊世に話しかける。

ハッと我に返った伊世は急いで報道陣の中に紛れた少年を探した。

絶え間なく瞬くフラッシュの中少年の影は光の中に溶けたように跡形もなく消えていた。

「どうなされたんですか？ 一体？」

呆然とした彼女の顔を心配そうに覗き込みながら弁護士は優しくそう訊いた。

「いや……男の子が——」

「え——？」

その一言に困惑したのは弁護士だけではなくカメラを抱えた報道陣からも動揺の声が上がった。

その場の空気を感じた瞬間、伊世はあの少年は自分にしか見えなかったことを知ったのだ。

「疲れておられるのでしょうか」

ふっと俯いた彼女の背中を優しくさすりながら弁護士は一言言った。

「——もう、記者会見を続けるのは無理ですか？」

「いいえ」

そう言うと彼女は顔を上げ一言言った。

「最後に一言だけ言わせてください」

彼女は凜とした表情を浮かべ、睨み付けるカメラを見据える。

そして、今まで弱々しかった口調が嘘のように力強くしっかりとした声で言った。

「あなた方が私たちのことをどう書くのかは知りませんが、私は不幸な男に人生を振り回された幸薄い女だなんて絶対に書かないでください」

「では、あなたはこんな旦那さんに付き従ったことに悔いなどないと？」

「——はい」

その瞬間、伊世は初めて見せた笑顔で言った。

「私は——彼に愛された幸せな女でした」

麗らかな春の陽光が降り注ぐ昼下がり。眩く輝くそんな陽の光に照らされ白いコンクリ打ちの地面をさらに白く輝かせる。

背後にそびえるのは数え切れないドラマを生んできた東京地裁。

周りにはさらなるドラマを期待する人々と、ドラマに敗れ失意を浮かべる人々——そんな人々の間を人知れず涼は縫うように歩いていく。

胸に抱くのは今日ここで起きた数々のドラマの一つ。

罪を着された男にやっと回ってきた名誉回復の好機。そして、彼に付き従った一人の女が最後に見せた幸せそうな笑み。

愚かな人間たちはそれを相楽峰雄という人生の最終章ともてはやすことだろう。

——だが、涼はこの地裁の決定の意味のなさを重々知り得ていた。

彼はもうこの世の人間ではない——それを虚しいと思える人間は一体この世にどのくらいいるのだろう。

涼はふと足を止め、後ろにそびえる地裁を振り返る。

ふと、思い出したのはあの時言った篁の言葉。

『人が人を裁くってことには限界がある——』

追求するのも不完全な人間、弁護するのも不完全な人間、そして裁きを下すのも不完全な人間——

ここで生まれる数々のドラマだって何割かは人間の間違いで成り立ったものだってあるかもしれない。

人が完璧ではない限り人は必ず間違いは犯すのだから

「これだから、人間は……」

涼はそう漏らすと小さく笑い、また地裁に背を向けて足を進めた。

白く輝くコンクリ打ちの地面をしっかりと踏みし、彼は誰に気付かれることなくその場を去っていく。

そして、黒いコートを翻したその瞬間、彼の姿は陽炎の中へと消えていった。